



# ACKU\_news 46

(2022年度)



平井一正先生を偲ぶ会

神戸ラッセ ■ ホール B1F パンジー 2022年4月23日

平井一正先生を偲ぶ会  
(2022年4月23日、神戸ラッセホールにて)

# 目次

第一章 巻頭言	会長 山田 健	1
第二章 追悼		
(1) 平井一正先生を偲ぶ会		
①平井一正先生を偲ぶ会報告	山本恵昭	2
②追悼のことば	会長 山田 健	5
(2) 高田和三さんを偲ぶ	居谷千春	6
(3) 梅里雪山登山隊三十三回忌法要の報告	山田 健	9
第三章 氷ノ山千本杉ヒュッテ60周年記念行事		
(1) 氷ノ山千本杉ヒュッテ竣工60周年記念祝賀会報告	大竹口誠治	13
(2) 氷ノ山ヒュッテ竣工60周年記念スライド	山田 健	16
第四章 紀行・随想・活動報告		
(海外編)		
(1) マルディヒマールトレッキング	居谷千春	22
(2) 南米チリへの1958/1960遠征の60周年レビュー	豊田寿夫	29
(3) 第2回グレートヒマラヤトラバース	吉井 修	32
(4) 海外登山研究会の実施	山田 健	38
(5) チベット関係書籍の紹介	大竹口誠治	39
(国内編)		
(1) 東北5座 花の山旅	壺阪祐三	42
(2) 秋晴れの蓼科山・八ヶ岳登山	山形裕士	45
(3) 2022年春の氷ノ山2題	山田 健	49
(4) 飯豊山 悄然紀行	吉原敏明	52

(5) 吾妻山系前川大滝沢	川端 充	5 4
(6) 真川源流から北ノ俣岳及び池口沢から池口岳	山本恵昭	5 6
(7) 苗場山及び恵那山山行	大竹口誠治	5 9

## 第五章 例会山行報告

(1) 第244回 氷ノ山整備山行	山田 健	6 1
(2) 第247回 忘年会	山田 健	6 3

## 第六章 山岳部活動報告(2021年度～2022年度)

山岳部 6 4

## 第七章 事務局報告(総会・会員近況報告・理事会・会計・予算)

(1) 総会・会員近況報告・理事会	事務局	7 0
(2) 会計・予算	事務局	8 1

## 編集後記

大竹口誠治 8 5

## 第一章 巻頭言

### 巻頭言

山岳会会長 山田健

今年度久々に「山と人」を発刊できました。その22号の約400ページのうち半分の約200ページが2007年から2021年にわたる15年間の現役山岳部の活動報告で占められています。この部分は通常ページよりも文字ポイントを落としてページ数を減らす工夫をしたにもかかわらず、これだけのページを費やしています。この膨大な山行記録を会員の皆様はどう感じられたことでしょうか。

2008年に発刊した「山と人17号」は河本卓生さんが編集長をされていますが、約690ページで本の厚さは4センチ、重量は1キログラムにもなった「山と人」史上最大のボリュームの本でした。編集長と同期の図書館司書のHさんは「枕にするにはいいが、部厚すぎて広げて読むにも持って読むにも難儀」と評されましたが、この時にも1989年から2006年までの現役山岳部の活動報告が半分以上のボリュームを占めています。しかしこの17号は、その扱いにくさにもかかわらず雑誌「岳人」において2008年の会報賞を受賞し、副賞に6人用冬テントをいただきました。その受賞の要因は、実は前半の一般記事ではなく後半の現役活動報告でした。受賞理由として、17年間に及ぶ膨大な現役部員の山行記録を、よくもこれだけまとめて会報に掲載し記録を世に残した、その山行が若者の眼で生き生きと表現されていたことを評価した、ということでした。因みに、副賞のテントは2009年のロプチン遠征に持っていき大いに役に立ち、遠征隊員は皆感謝したものでした。

話は逸れましたが、「山と人17号」が上記の理由で評価されたことから、2007年から積み残してきた現役山行記録をぜひ次の「山と人22号」に掲載したいと思っていました。幸い多くの記録が電子媒体で残してきていたので、割合にスムーズにまとめることができました。私はこの22号の現役活動記録をすべて読んでみました。この活動報告がされている期間は、ちょうど私が山岳会事務局長に就任した直後から、続けて副会長、会長の職にあった時期と重なっており、記録に登場しているほぼすべての現役部員を知っていますし、記録されている主な山行も、計画書がいつもメールで送られてきたため、そのような山行がなされたことも覚えています。しかも自分自身が現役と一緒にいった記録もありました。そういったことからこの膨大な記録を興味深く読むことができました。

記録を読んでみて、ちょっと忘れ物や集合時間に遅れたということが多いのが気になりましたが、自分自身が現役学生の頃もこんなものだったのでしょう。また幸い大ごとには至らなかったものの事故報告も幾つかあります。これも私が現役の頃にやってしまった小さな事故は、思い出しても幾つかありますので今も昔も学生のレベルはそう変わらないのでしょう。また、山の中で何を食べたか、その日のメニューなども割合に記録されており、この辺は昔とちょっと違う感性が入っているのかと思いました。

しかしそんなことはさておいても、多くの若者が膨大な労力と時間を費やして行った山行の記録には多大な感銘を受けました。大学生という何事にも代えがたい多感な青春時代に登山という非日常の世界に仲間と浸る。時には自然の美しさや楽しさに酔い、時には自然の厳しさに恐れを感じる。こういった経験がその後の人生に与える影響は、如何に大きいものであったかということは、我々山岳部OBは皆が実感しているところだと思えます。山岳部の4年間あるいはもっと長かった人もいますが、実に濃密な時間をそれぞれが過ごしたことは間違いないでしょう。

この原稿を書いているときに、2022年の流行語大賞というものが発表されました。年間大賞は「村神様」でしたが、選考委員特別賞に「青春って、すごく密なので」というのが選ばれました。夏の甲子園の優勝監督のことばですが、多くの人に共感されたので特別賞に選ばれたということでした。まさにグッドタイミングというか、私が現役山岳部の活動記録を読んでいた時に感じたことを端的に言い表してくれました。よほど「村神様」よりも味のある流行語だと思いませんか。

私が現役山岳部員の時(1974年～1979年)の山行記録は「山と人12号」と「13号」に掲載されています。それらを今読み返してみても、50年近く前のその時の光景がはっきりと蘇ります。卒業してからや最近の山行では得てして曖昧な記憶なものが多いのですが、不思議なもので現役学生の時の記憶は鮮明です。本当にくだらないことでもいつ誰が言ったか、あそこで誰がへまをしたかなど、どうでもよいことまで記憶が蘇ります。それだけ一生懸命に登山に集中していたということでしょう。まさに「青春って、すごく密なので」

会員の皆様も古い「山と人」を引っ張り出して、ご自分が現役の時の記録を読み返してみてもどうでしょうか。楽しい時間が蘇ってくると思います。また、現在の山岳部員の人は、そのような濃密な時間を今現在過ごしているということを感じて、素晴らしい青春の山を登ってほしいものです。

## 第二章 追悼

### 平井一正先生を偲ぶ会報告

山本恵昭

2021年2月15日、平井一正先生が89歳で亡くなられた。その後、何度か平井一正先生を偲ぶ会が企画されたが、その度にコロナ禍の影響を受けて延期が続いていた。

そしてこの度、2022年4月23日神戸ラッセホールに於いて、開催されることとなった。

11時、野邊久美司会担当の声掛けで、平井先生のご冥福を祈り全員で黙祷を捧げた。

その後、山田健会長による追悼のことば、山形裕士前山岳部長による献杯に続き、居谷千春前会長が編集した平井先生の思い出動画を見ながら、食事会が始まった。

当初のいくぶん緊張した空気が、談笑でほぐれ和やかな雰囲気にも包まれたころ、御来賓の方々よりお言葉をいただいた。

- ・京都大学学士山岳会 上尾庄一郎様。

5年先輩であるけれど、ポコさんと呼んでいた。狙っていた山の許可を取ろうとしている間に別の山岳会が登ってしまったので、カンペンチンの許可を神戸大学からまわしてもらった。そのことで、平井先生には引け目を感じていた。その後、平井先生を隊長とする神戸大学がもっと高いクーラカンリに登られたので、その感情を払拭することができた。

- ・日本山岳会関西支部 重廣恒夫様。

中国登山協会と長年にわたる深い信頼関係を作られていた。2011年、私が日本山岳会の評議員をしていたときに、その年の名誉会員の該当者なしとなりかけていた。支部長は名誉会員にしないとなっていたが、ほかの評議員からの口添えもあり、平井先生が名誉会員になることができた。

- ・甲南山岳会 平井幹男様。

1995年神戸大学を退官された後、甲南大学に来られ山岳部長を引き受けてくださった。年齢を感じさせない、気さくな方だなという印象。チョゴリザのサミッターにどうして選ばれたのかをお聞きすると、「いちばん軽いので雪庇を踏み抜くことがないからや」と、冗談交じりに面白い話をさらりとされる方だった。

しばし談笑の後、今度はご友人からのお言葉をいただいた。

- ・日本山岳会関西支部 金井健三様。

平井先生とは、最も古いおつきあい。只見湖の銀山平で会ったのが初めて。当時の海外登山研究会は、半分くらいが京大の方で海外登山をいっぱい出していた。自分は小さくなっていったけれど、次第に打ち解けるようになり、「チョゴリザの峰の最後のシーンは、笹ヶ峰で撮ったんや」と打ち明けてくれたりした。その後、神戸大学に来られて、仲良くさせてもらった。

- ・日本山岳会関西支部 久保和恵様。

日本山岳会関西支部の評議員をされていたとき、東山ゆるやか山行の打ち上げ会でたまたま隣の席になった。緊張したが、話の聞き上手でほっとした雰囲気を作ってくださいました。「東山が終わったので今度は西山に行きたい。先生は西山に住んでおられるので、ご一緒してもらえませんか」とお願いすると、「そうやなあ、やりましょか」と、低山なのに一生懸命に取り組まれ、参加者も増えてとても盛会になった。

- ・東郷賢治様。

石川君の事故の時に、当時副部長であった平井先生に出会った。難しい滝の所で石川君の遺体を発見してくれた。平井先生と一緒に山に登る機会がなかったことが残念だ。山岳部が現在も続いていることは、平井先生のお力によることが大きいと思う。

・河本卓生様。

自分がリーダーで行った3月の西鎌尾根で、石川君が水鉛谷に滑落した。4人での搜索に、平井先生は「自分が行く」と言ってくれた。雪崩の巣の谷で遺体を見つけてくれて、ワサビ平で仮通夜を行うことができた。心から感謝している。2015年の50回忌に平井先生も来られて、大粒の雨の中、蒲田川のレリーフの前で一緒に慰霊を行ったことが、つい先日のことのようにだ。

・石川毅様。

先生とは50年来の付き合い。いつもニコニコされていて、機会があるとポートレートの撮影をした。今日の写真もその一枚。その笑顔が頭から離れない。亡くなられたと聞いて、大変ショックだった。

ハーモニカを取り出し、みんなの心に染み入るような優しい音色でエーデルワイスを演奏された。

・田中俊甫様。

シェルピカンリ遠征で、アタック1次隊の登頂成功後、平井隊長からは「隊が成功したので、それで良い」と、2発目のアタック隊を出すことを許してもらえなかった。そこから、葛藤が始まった。わだかまりがあって別々に帰り、山岳会から総すかんを食らった。2, 3年したら先生のもとへ行きますので、またそこで議論をしたいと思います。

・井上達男様。

平井先生に怒られてばかりだったが、教えの中で一つだけ実行しているものは、「人と人の出会いを大切にしろ」です。私が住んでいたソルトレークに平井先生が学会のために来られた折、1958年にチョゴリザのキャンプで繋がりがあったヒドンピーク登頂者のクリンチさんと再会を果たし楽しく過ごされた。ヘルマンブールの遺品をその奥様に渡したいと、ヨーロッパに行かれたこともある。この会に来られている方々との繋がりを大切にしていけることが、平井先生の教えを大切にすることかと思う。

・乙藤洋一郎様。

ふと思いついたことを気軽にやらせる人だった。山を知らない私を部長にしたこと。クーラカンリのBCには、500hpaの等高線がファクシミリで送られてくる。平井先生が、地球物理学が専門の私に「天気予報たのんまっせ」と思い付きのように言われた。せめてクーラカンリに行くまでに言って欲しかった。3日間先生に渡された3冊の本を読み予報を試してみたが、結局、平井先生はあてにならないと観天望気をするようになった。

・日本山岳会関西支部 平林克敏様。

学習院大の鹿島槍天狗尾根遭難の搜索から下りてくると、大川沢の猟師小屋に平井先生が一人でいて会話をしたのが、最初の出会い。その後、親しくしてもらった。お互いに興味があり、平井先生が「わしも必ず成功するやろ。平林さんも必ず成功するやろ。良い仲間やな」と言われた。私が出すと、平井先生が書評を書いてくれた。平井先生は、人に優しく接して不快感を与えることなく過ごしてこられた。日経新聞の交友録に平井先生のことを書いたら、いろいろな人から「どうい関係ですか」と反響が大きくて驚いた。いつも自慢話は、「計画したら100%成功。事故もないし、怪我人も出さずに来たのは、私だけですよ」だった。

ご令嬢の廣瀬由仁子様が、ご家族からのことばとして、コロナ禍での闘病の様子やお父様との思い出と感謝、ご参加の方々へのお礼を述べられた。

続いて、机を片付け、写真家であられる石川毅様による参加者全体の写真撮影。

最後に、大竹口副会長のお礼のことばで、閉会となった。

参加者（敬称略）

・ 来賓

廣瀬由仁子（ご令嬢）                      上尾庄一郎（京都大学学士山岳会）  
平林克敏（日本山岳会関西支部）                      平井幹男（甲南山岳会）

・ 日本山岳会関西支部

金井健二                      重廣恒夫                      城隆嗣                      嶋岡章                      野口恒雄

- |  |   |  |  |                                     |             |
|--|---|--|--|-------------------------------------|-------------|
| 久保和恵                                     | 新本政子  | 山内幸子   | 岡田輝子   |                                     |             |
| 神戸大学山岳会<br>(名誉会員)<br>(特別会員)<br>(正会員、関係者) | 乙藤洋一郎<br>沖村孝<br>東郷賢治<br>金井良碩<br>坂本淳<br>野邊久美<br>緒方順子 | 井上達男<br>石川毅<br>田中俊甫<br>瀬野鋼太郎<br>岩井正隆<br>小宮勇介<br>居谷道子 | 山形祐士<br>山本恵昭<br>柏田紘一<br>山口幸久<br>大竹口誠治<br>吉井修 | 居谷千春<br>河本卓生<br>山田健<br>松村政則<br>大仲秀治 | 長谷川浩<br>林市雄 |
| (準会員：現役山岳部員)                             | 萩原真哲  | 城間一輝   |  |                                     |             |



挨拶される山田会長



集合写真

(写真は、いずれも石川氏撮影)

# 追悼のことば

山田 健

平井一正先生、先生が逝かれてから、はや一年と二か月が経ちました。その間、コロナ禍で思うように偲ぶ会を開催できない状態であったとはいえ、随分とお待たせしました。今日ようやく開催することができました。先生が笑いながら「遅いやないかい」とおっしゃられている光景が目には浮かびます。今日は神戸大学山岳会のメンバーに加えて、京都大学学士山岳会や日本山岳会、甲南山岳会から、先生の古くからの知り合いの方々もお見えになっています。これから先生のことを話題に多くの方に思い出話をしていただこうと思っております。先生のことですから、あまり人に知られたくないような話も出てくるのではないかと心配しつつ、ひそかに期待もしているところです。

さて、私事になりますが、私が先生と出会ったのは、神戸大学に入学すると同時に山岳部の門をたたいたときですので、もう四十八年前になります。実は「平井一正」というお名前だけはお会いする前から、京都大学のチョゴリザ遠征のサミッターとして書物で知っておりました。その有名な登山家が、たまたま入部した山岳部の顧問をされているとは本当に驚きでした。最初はなぜ京都大学の人が神戸大学にいるのか分かりませんでした。でも日本の一流の登山家がすぐ近くにおられるということは、山岳部員としてスタートする自分には大いに安心感がありました。先生と初めて山と一緒にいったのは、一年生の冬山合宿で白馬にいったときです。先に入山していた山岳部員が猿倉荘の横にテントを張っていたところ、あとから入山してきた先生が「なんちゅうとこに張ってるんや」と五年生の居谷リーダーを叱り飛ばしてテントを移動させました。一年生にとって五年生のリーダーは山では神様みたいなものですが、その五年生リーダーにとってさらに神様のような存在、私たち一年生から見れば神様の二乗みたいな存在で先生を感じていました。確かに下級生の頃には先生は近づきがたい印象でしたが、三年生になって部を運営するようになると先生との接点が増えて、実に人間味にあふれた先生の本当の姿がわかるようになりました。

それから本当に長くお世話になりました。先生との思い出と言えど何と言ってもクーラカンリ遠征に連れて行ってもらったことです。総隊長としてベースキャンプに腰を据えて登山指揮を執っておられた先生は本当に存在感があり、先生がそこにおられるだけで、ヒマラヤ初見参の私たちは安心して登山していました。高所順応がうまくいかなくて体調を崩した私が、上部キャンプからベースキャンプに降りたときには、先生は笑顔で出迎えてねぎらいの言葉をかけてくださいました。その時まで私は意気消沈していたのですが先生の笑顔に接し少し元気になりました。その後体力を回復して、最終的に標高七二五〇mのアタックキャンプまで到達できたのは先生のおかげだと思っています。クーラカンリ初登頂は神戸大学山岳会にとって大きな財産となりました。そのクーラカンリの帰路にカンリガルポ山群を発見したことは次の大きな目標を神戸大学にもたらしました。先生にとってもこのカンリガルポとの出会いが運命的なものであったと思います。その後の長い間、先生はカンリガルポ初登頂に執念とも言える粘りで登山許可交渉を続けられました。ようやく二〇〇三年、カンリガルポへの世界初となる登山許可を手に入れました。クーラカンリから十七年目のことです。この時、先生はすでに七二歳、しかも奥様のご病気が判明したこともあり、隊長として自身がかんりガルポへ行くことに逡巡されました。しかし、先生の初登頂に懸ける情熱が勝り実行を決断されました。このことは平井一正という人間の凄さが感じられるところです。二〇〇三年は残念ながら初登頂はなりませんでした。この時蒔いた種はその六年後に花開きました。二〇〇九年十一月七日、カンリガルポ山群ロプチン峰初登頂。先生の背中を追いながら歩んできた井上達男隊長とその登山隊が成し遂げました。この成功を先生はことのほか喜ばれました。副隊長として参加していた私は、登頂祝賀会に出席するために中国武漢へ来られた先生を空港で出迎えました。この時の先生の喜びにあふれたお顔が忘れられません。先生の念願であったカンリガルポ初登頂のお手伝いできたことを本当にうれしく思いました。

今から思えば、平井先生が偶然にも神戸大学に赴任されたということは、神戸大学山岳会にとって、誠に幸運であったと思います。シェルピカンリ、クーラカンリ、ロプチンなど、これほどの実績を積み重ねることができたのは、ひとえに平井一正という優れた指導者がおられたからです。誰も登っていない山、しかも誰も手を付けたことがない山に、自分たちが努力して道をつけ、そして最初に登頂する。このことに重きを置いた先生の教えは、神戸大学山岳会に確実に根付いています。

多くのヒマラヤ初登頂に成功した平井一正という登山家を見て、人はよく「運がいい」と言います。ご自分でもそのようなことを言われたこともありました。しかし、単に運がいいだけではなく、努力し耐え忍んで幸運を引き寄せたように思います。先生は私たち山岳会員にとって、紛れもなく師でした。登山だけではなく生き方の師でもありました。先生とお会いできて本当によかった。先生には感謝しかありません。どうか安らかに眠りください。

二〇二二年 四月二十三日

神戸大学山岳会 会長

# 高田和三さんを偲ぶ

(2021年7月1日没)

居谷千春

## 突然の訃報

高田和三さんが亡くなったとの知らせは「関西ペイント散歩会」の久保田さんから突然もたらされた。訃報というものはまあ急であることが当たり前だが、亡くなる半月前の下記メール（6月16日付）には「長期戦になる」という表現があり我々には非常に「予期せぬこと」「突然」な印象であった。

「高田です。大勢の方からお問い合わせをいただいておりますのに、ご返事を差し上げず失礼いたしました。連休明けに調子を崩し、検査やら、検査入院をくりかえしました。結果は、肺気腫が肺がんとなっております、リンパ節癌の可能性もあったのですが、肺がんでした。本日、MRIの脳の検査があり、22日には別途の検査です。年を取ると、がんも転移しやすくフルコースの検査があり厄介です。この結果で治療法が決まります。いずれにいたしましても長期戦です。私の部屋が3Fにあるのですが、3階の往復にゼイゼイ言っております。ゆっくりとリハビリをいたしますが、当面は無理と思われまふ。面白い愉快なことがありましたらお聞かせください。ご返事など差し上げず、お詫び申し上げます。」

コロナ禍2年目の2021年、4月の山岳会総会も延期、一ヶ月延期した総会も中止となった。6月下旬から7月上旬にかけては「コロナワクチン1回目接種は終わったか、まだか？」というのが日常の挨拶になっていた頃だ。コロナもやや下火になってきて北海道・東京・大阪などの9都道府県の緊急事態宣言を解除し、東京オリンピック準備にまっしぐらの頃。親愛なる高田和三さんは5月連休明けに調子を崩される迄は、今まで通り活発にいろんな活動を発案し面倒を見られていた。ACKU理事として、HNA役員として、関西ペイント散歩会の世話人として、そして合歓木山荘の管理人の一人として、本当にフットワークのいい世話好きな先輩であった。フィナンシャルプランナーとして、私の知らないところでも活発な活動をされてきたのだろうと思う。会社卒業後はいつもイベントプランをたて、進行を世話する立場の高田さんは盛んにメールを発信していた。「高田です。〜〜〜では失礼いたします。」の決まり文句が懐かしい。

1月9日付メール：新春合歓木スキーの件（カニ鍋パーティーおさそい）

「高田です。明けましておめでとうございます、久しぶりの豪雪です、たっぷり楽しみましょう。（中略）カニ鍋、焼き肉、おでん、にします。（後略）\*コロナ禍の中、用心しながらやりましょう。では失礼いたします。」

2月6日付メール：合歓木スキーの会の案内（文略）

4月5日付メール：合歓木山荘収支報告と山菜狩りの案内（文略）

4月15日付メール

「高田です。何時もお世話になっております。

先般、山菜狩のお伝えをいたしました、最近の感染拡大が激しく中止いたします。第4波とか、関西地区がこんなに激しくなるとは予想いたしませんでした、残念ですが中止いたします、申し訳ありません。早くコロナ禍も開けいつもの様に”ワイワイガヤガヤ”騒ぎたいものです。では失礼いたします。」



(左) 2021年7月11日、合歓木山荘会計引継ぎで世話人の和光さん・橋本さんがお参り、東郷さんが合流。

(右) 2021年2月24日、合歓木山荘で映画「チョゴリザ」のDVDを見ながら平井先生を偲ぶ。

## 高田和三氏の経歴

1961年4月神戸大学経営学部入学、その初年度は山岳部の名簿や山行記録には名前なく入部はしていないようである。1962年度2回生の夏山槍ヶ岳千丈沢で記録上の初登場、引き続き南アルプスの北岳から塩見岳縦走をこなした。そして10日程休んだ後すぐに谷川岳合宿(注1)に参加し一ノ倉沢ニルンゼ・幽ノ沢南稜などを登っている。夏山だけのトータル日数は26日、11月の富士山合宿、正月前後の冬山は岳沢強化合宿、春山は白馬岳合宿と続く。山岳部2年目期初にはサブマネージャー(SM)、LS交代時にはチーフマネージャーに就任、1963年度と1964年度は「山と人8号」の山行記録が〇L以下何名という記述なので高田さんの詳しい山行がわからないが、1964年3月、3回生の春山「黒部源流合宿」は特に印象深かったようだ(注2)。

(注1) この「谷川岳合宿」は高木正孝先生の夢であった「OB・現役の虹芝寮での待望の合同合宿」であった。高木先生は「神戸大学南太平洋学術探検隊」に参加し同年6月に日本を離れられている、仏領マルケサス群島ファッヒバ島を調査中単身タヒチに帰ることになってコブラ採集船シャロット・ドナルド号に便乗、8月6日未明ヒヴァオア島の近くでその船の甲板から突如姿を消されたとのこと。谷川岳合宿が8月11日からだから、「合同合宿の成果を高木先生に報告することができなかつたのは残念であった」と『山と人80年』で前田精三先輩が書かれている。

(注2) ACKUは1964年・1965年、2年連続で春の黒部源流部に入り込みメインの目標として薬師岳を東南稜から(大谷L)、中央稜から(井上L)狙うというという壮大な計画が実行された。山岳会創立百周年記念誌で各年代の「春山」にスポットライトを当てようということになったので、高田さんは2013年11月1日、その原稿準備&懇親会と称して前後3世代のリーダーシップを大阪凌霜クラブに招集された。鷲尾さん(1963年L)、大谷さん(1964年L)、井上さん(1965年L)、有馬さん(1964年SM)…寺倉さんは病気で欠席・大野さんは既に物故・その他瀬野さん・和光さん・居谷が出席…が集まり長時間にわたり春山の思い出、監督団、高木先生の影響力などについて語りあった。録音が残っており非常に懐かしい。



2013年11月1日の春山編集懇親会(凌霜)



2003年9月25日ルオニー壮行会

1965年に関西ペイントに入社、2001年に退職されるまでの会社員の期間、初期数年を除いてはACKUとしての山登りはあまりないようだが会社内では「関ヶ散歩会」と称して随分いろんなところにかかれている。退職直前からはACKU例会への参加率は非常に高くなり、長い日程の国内登山例会、海外への特別例会(中国チベットカンリガルポ山群〜トレッキング2003・米国ソルトレークススキーツアー2005・パキスタンバルトロ氷河トレッキング2005・チロルドロミテスキー三昧2007)などはもう仕掛け人だったのではないだろうか。

ACKUの理事会でも2004年に財務担当理事、2006年に監事、2008年に企画担当理事、2010年に企画担当・遭難対策担当、2012年に監事、2018年に退任されるまで長期間、役員を務めていただいた。登山だけでなく懇親会・飲み会・座談会など企画担当としての活動力・調整力は特筆すべきで高田さんの面目躍如である。うるさく強引で声の大きい高田さん、亡くなってからはいたるところで各グループ会員や現役に至るまで「最近静かで寂しいですね」という声が聞かれた。監事をやめられてからも親しいお仲間との中国新疆地区や中央アジア旅行をされ活動範囲は非常に広い。HNA理事としての大活躍は田中俊甫さんがHNA会誌70号に書かれているので省略します。

合歓木山荘管理人としては、同じ管理人の和光さん、橋本昭さん(関大山岳会)から「何やっていますのん!」といつもおこられてはいたものの、なくてはならない存在であった。営業マンとして培った接待手法でオールドボーイから若い現役まで気持ちよくホワァとした気持ちにさせる話術はたいしたものだった。コロナ禍の少しおちついた2021年11月21日に凌霜クラブで「高田和三氏を偲ぶ会」が開

催され参加者全員が思い出を語りあった。いつも ACKU 例会や HNA 活動、合歓木生活のイラストを描いてくれる橋本昭さんがソルトレーク特別例会のイラストを写しながら思い出を語られた。残された我々は大事な大事なイベント仕掛け人、スポークスマンを失ったのだ。深く感謝してご冥福をいのります。



2021年11月21日高田和三氏を偲ぶ会（凌霜）、そこで橋本昭氏のイラスト紹介（右列一番前が高田和三さん）



1963年冬山、北岳小太郎尾根、2005年3月27日ACKU理事会後の「これで委員会」



2004年8月13日坂西宅で



2005年2月27日、氷ノ山例会



ソルトレーク特別例会 2005年

高田和三さんが亡くなる前の数年、合歓木山荘では「和三（わぞう）する」という言葉がはやっていた。日本茶をいれてゆっくり味わうという意である。合歓木山荘では、これからもストーブの前でお茶を味わうたびに和三さんのことをおもいだすだろう。

以上

# 梅里雪山登山隊三十三回忌法要の報告

山田 健

「もうあれから三十年以上が経つのですね」

梅里雪山の遭難を知る人に今回の法要のことを話すと、例外なくこの言葉が返ってきます。それほど長い時間が経ってしまったということでしょう。しかしご遺族にすればあの遭難ことは忘れることのなかった長い時間であったでしょう。

2022年11月3日文化の日、比叡山延暦寺において「京都大学学士山岳会梅里雪山登山隊三十三回忌法要」が執り行われました。この登山隊に当会の船原尚武君が参加していたことから、神戸大学山岳会から1名参列してほしいという連絡が京都大学学士山岳会(AACK)からあり、理事会で諮ったところ、船原君とクーラカンリと一緒に登山していたという関係もある筆者が代表して法要に出席することになりました。そもそもこの32年前の遭難について、若い会員はご存知ないかもしれないので簡単に次に紹介しておきます。

中国雲南省とチベット自治区の境にある山域「梅里雪山」はある意味ヒマラヤの東における特異な存在である。チベット仏教の著名な聖山であり、西のカイラスと並び称されている。この山の周囲は巡礼路となっており、一周300kmを多くのラマ教巡礼者が五体投地をしながら何日もかけて廻っている。また、梅里雪山のある地域は世界自然遺産になっている三江(サルウィーン、メコン、長江)併流地域に属し、多雨豪雪の気候、地形の急峻さにおいて他に類を見ない自然環境の厳しいところである。この梅里雪山の最高峰であるカワカブ峰(6740m)の東面は深く切れ込んでいて、頂上からメコン河畔まで4700mの高度差があり、有名な明永氷河が滝のように懸かっている。20世紀初頭に東チベットを探検した英国のプラントハンター、キングドンウォードがこの地域を「深い浸食の国(The Land of Deep Corrosions)」と形容している。

このカワカブの初登頂を目指して1990年暮れから1991年にかけて京都大学学士山岳会が登山隊を送った。この強力な登山隊は頂上間近まで迫ったが、1991年1月3日深夜または4日未明、カワカブの頂上稜線から明永氷河へ向かって大雪崩が発生し、ほとんどの登山隊員が集結していた第3キャンプを埋め尽くし、その場にいた日本人中国人17人全員が遭難するというヒマラヤ登山史上最大の悲劇が起こった。その17人のうちの一人が、クーラカンリと一緒に登った船原尚武君であった。彼はクーラカンリとチェルー山の経験を買われて神戸大学山岳会から一人この登山隊に参加していた。

1月4日以降、第3キャンプからの連絡が途絶えた。待機していたベースキャンプでは何が起こったかわからなかった。ようやく9日になって人民解放軍が飛行機を飛ばして雪崩の痕跡を発見した。中国登山協会の捜索隊が北京から出発した。捜索隊にはクーラカンリへ一緒に行った李致新と王勇峰の二人も含まれていた。しかし、気象条件が極端に悪く捜索隊は第3キャンプにすら到達できず捜索は打ち切られた。

その後、京都大学学士山岳会ではカワカブ初登頂を目指して1996年に再度登山隊を送ったが、その時もルートが危険すぎるとのことで断念された。また、地元の住民の間で、神の山を犯した登山隊に天罰が下ったとの噂が広まり、再度の登山への猛抗議もあったことから、それ以降この山を目指す者はいなくなった。

しかし遭難から7年経った1998年7月、遭難現場の下流にあたる明永氷河で遭難者の遺体・遺品が発見されるというショッキングなニュースがもたらされた。遭難現場の第3キャンプは頂上東側の標高5100m付近の盆地のようなところである。カワカブの東面の高さ千数百mに及ぶ壁からの雪崩がこの盆地で集められ、膨大な氷が盆地の唯一の出口である明永氷河から溢れ出し落差千m以上ものアイスフォールとなって流れ落ちている。その明永氷河の標高3700m付近のクレバスの中から多くの遺品とともに遺体の一部が明永村の村人によって発見されたのである。

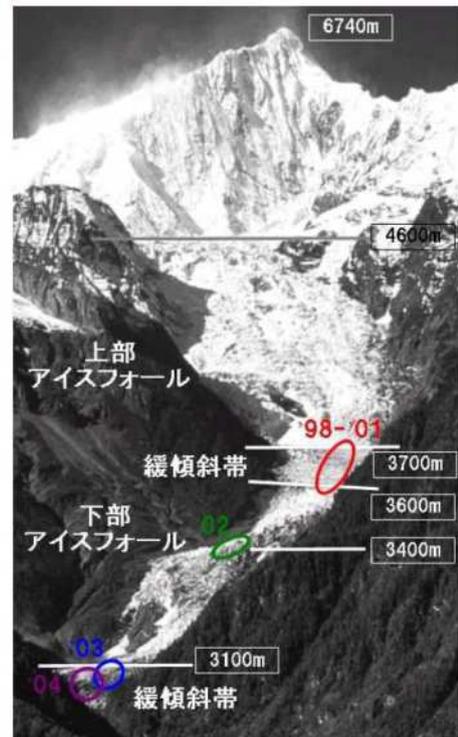
最初の発見以降、毎年雪融け時期に京都大学学士山岳会の人たちが現地へ赴き、少しずつ遺体と遺品が回収されていった。船原君の遺体も遭難から11年経った2002年8月に発見されご遺族に引き渡された。くるまれていた寝袋のネームにより彼であることが判明した。奇跡的に損傷の少ない状態であったという。この遭難のいきさつと遺体捜索については京都大学学士山岳会の小林尚礼氏の著書「梅里雪山 十七人の友を探して」に詳しい。

(画集「山と人」の解説書から)

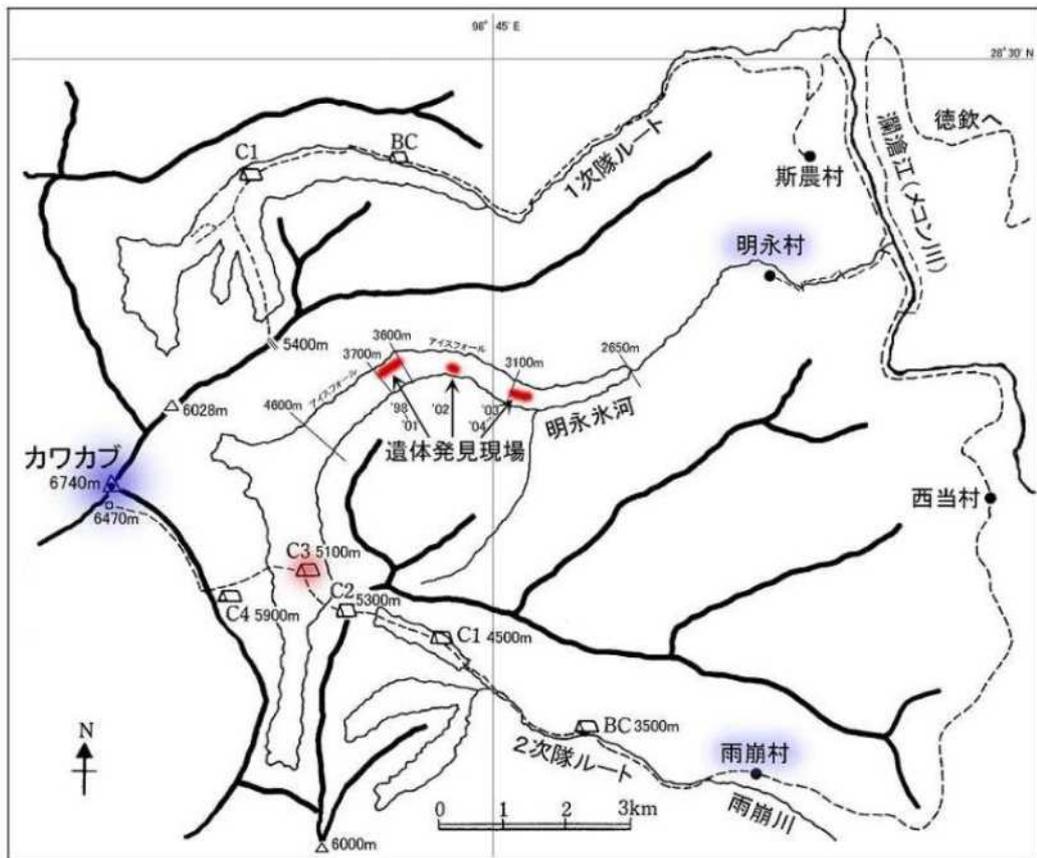


遭難直前の第3キャンプ

遺体の発見位置2



遺体発見位置



登山ルートと遺体発見現場

(以上写真と図は小林尚礼氏による講演資料より)

さて、法要には梅里雪山のご遺族14名に加えて京都大学学士山岳会関係者など合計48名の方々が参列されました。残念ながら船原君のご両親はご高齢のために欠席とのことでした。

まず、比叡山横川の元三大師堂本堂にて山田能裕大僧正が導師を勤められ、故人一人ひとりの俗名と戒名も読み上げられて読経されました。その後、梅里雪山の遭難者を供養するために建てられた「鎮嶺碑」前に移動し、清原大僧正が読経されました。紅葉が非常に美しく彩られるなか、荘厳な読経であったと感じました。



鎮嶺碑と祭壇



鎮嶺碑前での参列者集合写真

その後比叡山会館に30名が移動し、お斎の席が設けられました。比叡山の3名の大僧正も同席され、幸島司郎 AACK 会長のご挨拶、左右田健次学術登山隊総隊長、斎藤惇生氏からの追悼のことばと続いたあと、ご家族を代表して故井上治郎登攀隊長の奥様、井上悦子さんからことばがありました。笑顔でご挨拶されましたが、32年という時間が経ってもなかなかご家族にとっては忘れることのできない時間であったと推察されました。当然のことでしょう。それからご欠席されているご家族の様子が紹介さ

れ、船原君のご両親の近況についても紹介がありました。最後に事務局から横山宏太郎氏がメの挨拶をされて閉会となりました。

そもそも何故比叡山延暦寺に京大の梅里雪山遭難の鎮嶺碑があるのか、これまで詳しくは知りませんでした。今回 AACK の方から初めてその関係について聞いたところ次のような話をお聞きしました。

梅里雪山の特にカワカブ峰はチベット仏教の聖山と崇められている山である。その聖山に登山することは地元民にとっては大問題になる可能性があった。そこで AACK が登山するにあたって、どうすれば地元民に納得されるだろうかと、同じ仏門の比叡山法主に相談したところ、頂上は踏まずに少し手前まで登り、その場所に箱に入った小さなお釈迦様の仏像を安置してきたら地元民も収まるだろうとアドバイスされ、持っていく仏像も比叡山から託された。

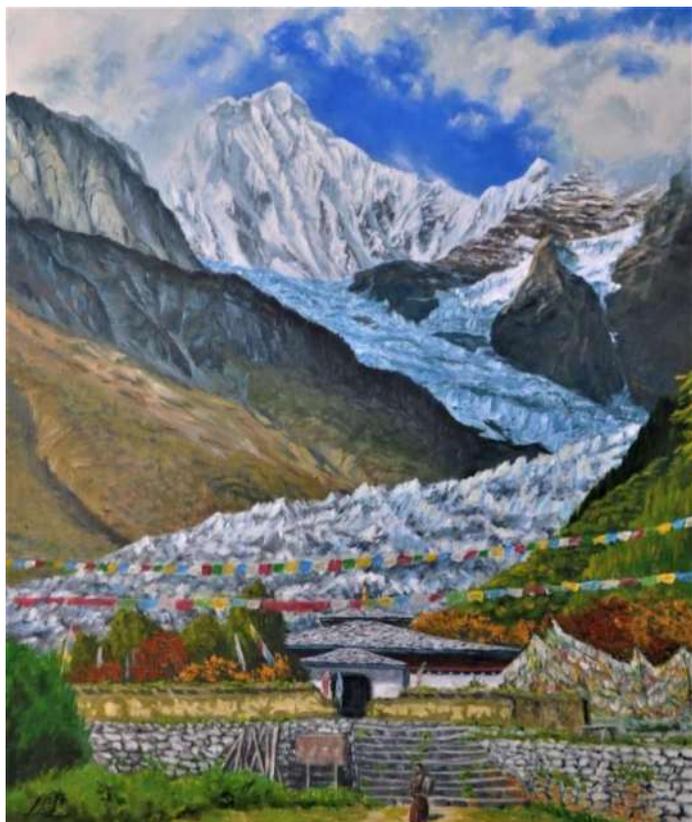
そういう関係性から遭難後に鎮嶺碑が比叡山横川のあの場所に設けられたということでした。その箱に入った小さな仏像は今もあの山のどこかにあるのでしょうか。

今回三十三回忌ということでひと世代が経過してしまいました。神戸大学でもあの遭難のことや船原君のこともよく知らない若い会員が増えたことと思ひ、今回の法要を ACKU ニュースに報告してこの機会にあの大遭難の事実を伝えたいと思ひます。

後日、法要の報告と写真を岡山県美作市の船原君のご両親に手紙で送ったところ、次のような返書をいただきましたので、併せて報告いたします。

「大変寒くなりました。この数日庭一面に降りた霜に驚いております。随分ご無沙汰しております。

去る十一月三日比叡山延暦寺での法要にご多忙中、遠路お詣りいただきありがとうございます。その節の法要の様子、写真までお送りくださり、ありがたく胸一杯でことばがありません。よき先輩に恵まれ、息子も喜んでいることと思ひます。三十二年の歳月は皆さまのお力添えがあつてこそ私たちもこの歳までがんばってこられました。この度の法要には残念ながら遠くからの合掌になりましたが、山田様から法要の詳しい様子と写真をいただき涙しております。クーラカンリ以来本当にいろいろお世話になり私どもこの歳までお気遣いいただき何とお礼申し上げてよいのか言葉が見つかりません。本当にありがとうございました。本格的な寒さに向かう折くれぐれもご自愛下さい。」



「天帝の峰に挑む」より

左の画は、2016年に故平井一正先生、居谷千春前会長らと、梅里雪山の明永氷河を訪れたときの模様を描いたものです。

明永村から谷を登って行くと、太子廟というラマ教の寺院が氷河の末端近くにあり、そこからカワカブの頂上とアイスフォールがよく見えました。

遺体が発見されたのは、第3キャンプがあった盆地から溢れ出した明永氷河のアイスフォールが向かって右寄りから左にカーブするあたりです。

彼ら17名はこのずたずたに割れた膨大な氷の中を落下してきたのです。大自然の破壊的な力と非情さを感じる場所でありました。

### 第三章 氷ノ山千本杉ヒュッテ60周年記念行事

#### 氷ノ山千本杉ヒュッテ竣工60周年記念祝賀会報告

大竹口誠治

昨年、実施予定であった氷ノ山千本杉ヒュッテ竣工60周年記念祝賀会は、新型コロナの影響で延期されたが、9月頃から新型コロナの感染が収まって来たので、今回、下記の通り、実施されたので詳細を以下の通り報告したい。

1. 実施日時：11月5日（土）～6日（日）
2. 出席者：17名（OB 9名、現役 8名）（敬称略）  
OB：豊田、田中（信）、壺阪、金井（良）、井上、山田、大竹口、山本（恵）、金（隼）  
現役：侯（4）、城間（3）、柳本（2）、三谷（2）、大矢（2）、後藤（1）、小田（1）、大澤（1）

#### 3. 行動記録

##### (1) 11月5日（土）

##### 入山記録

- ・現役部員 13：00 大段平駐車場発  
13：30 氷ノ山千本杉ヒュッテ到着
- ・山田会長・井上氏  
13：30 大段平駐車場発  
13：50 氷ノ山千本杉ヒュッテ到着
- ・壺阪隊： 13：40 : 大段平駐車場着  
13：55 : 大段平駐車場発  
15：25 : 最終パーティー氷ノ山千本杉ヒュッテ到着

現役部員と山田会長・井上氏は雨中の行動になったようであるが、壺阪隊は大段平駐車場に到着した時は雨が降っていたが、出発して直ぐに雨が止み、さすが同行している晴れ男の壺阪大明神のおかげであると感謝した。

#### 祝賀会

- ・16時15分頃から、山田会長の挨拶でスタート。その後、山田会長が10日間かけて作成された氷ノ山千本杉ヒュッテの60年の歩みのスライドを見て17時40分頃に終了。その後は、過去の遠征のスライドや映像を見ながら過ごし、自己紹介を行った。  
酒もなくなったので、21時半頃に就寝。
- ・今年の6月頃に運んで来た発電機（市販のガスカートリッジで動く）が、電灯やパソコンの電源に使えて大いに役立った。
- ・また、山本（恵）さんには、雨中のなかで現地調達された沢山のキノコを堪能させて頂き、誠に、ありがとうございました。

##### (2) 11月6日（日）

- 06：00 起床
- 07：00 氷ノ山山頂に向かい、三々五々、ヒュッテを出発。
- 07：30 先行パーティー頂上着
- 08：50 朝食後、水源工事隊は水源に移動して、塩ビ管の設置工事を行う。その他のメンバーは薪割りや小屋の清掃等を行った。
- 10：30 すべての作業を終了し、記念撮影。
- 10：40 下山開始
- 11：45 最終パーティーが大段平駐車場に到着し、その場で解散した。

当日は、前日の雨も上がって天気が良く紅葉見学が楽しめるので、東尾根登山道からはボーイスカウト一行が、大段平登山道からは家族連れが多く登って来た。



祝賀会でスライドを説明する山田会長



祝賀会の懇親会風景 1



祝賀会の懇親会風景 2



祝賀会の懇親会風景 3



氷ノ山山頂での記念撮影



ヒュッテ前での集合写真

4. 壺阪氏から頂いた俳句  
築60 青春の山小屋 歳古りぬ  
来てみれば 全山裸樹 氷ノ山  
葉月6日 雲海の果 日本海  
泥こねの 坂道下る 肩の凝る

## 5. 元会員の林市雄さんからのメール

千本杉ヒュッテ60周年記念祝賀会の報告と写真、パワーポイントのPDF等を元会員の林市雄さんに送ったところ、下記のメールが届きました。林市雄さんからはヒュッテ竣工60周年に2万円の金一封をいただいておりますので、ACKU ニュースの記事に加えさせていただきます。

**Subject: RE: お尋ね ; 氷ノ山・神戸大学体育所(山小屋) の件 (神戸大学山岳会)**  
山田 ヒュッテ担当幹事長 殿。 From I. Hayashi, 10th. Nov. 2022.

素晴らしい 60周年記念のレポ、さっそくのご送付感謝、電気による明かりがともったのは初めてでしょうね。記念パーティのご様子に感動しました。私たちの学生時代最後の事業であった小屋が、半世紀以上もたって、今また新しい息吹を吹き込まれた感があります。電気照明による新しい息吹、これから大いに活動の場を拡げていってくれることを祈るや切也。また 60年の歴史の集大成に時には思い出して涙がこぼれます。挿入されているスナップの西村教授、横山先性、E t c. 御影キャンパスの諸先生方のご熱意、諸先輩方の小屋への憧れと意欲、等々が、切れることなく続き、おおくのかたがたの努力の結晶がこの小屋につながりました。私などはほんの一幕にそこにいただけです。小生の文章引用が多すぎると、面はゆい感がします。私などよりも、ボッカに汗を流してくださった方々のことをもっと書き入れてほしかった。私などは裏方の1ページにいただけです。今これを何度も見て、ウイスキーを西村先生、横山先生、の御霊にささげながら、涙酒で多くの方々に語り掛けています。

それにつけても、よくあの千本杉の利用と、あそこに建設を許可してくださったあの営林局長さんのご英断を忘れることはできません。天然記念物扱い(当時)の千本杉の保存を訴えながら、そこに小屋を建てるという(しかも少しだけとはいえ一部伐採して利用したい、という一見虫の良すぎるお願いに、営林局の課長クラスが半ば呆れていたであろうが、ちょっと判断を考え直すという態度に、局長は、ちっとも矛盾した意見ではない、千本杉を保護しようという姿勢に、しかも同じ国立の機関があつて費用を負担して保護活動の拠点を作りたいというこの姿勢に感謝して、協力しようではないか。という、局長クラスならではの大所高所からのご意見に一気に決定されてしまったことである。この局長の貴重なご姿勢も忘れてはならない1ページであると思慮するところです。

それにしても、山田会長、長谷川事務局長はじめ皆様の、きめ細かいご配慮には感謝のほかありません。どうか皆様方のような岳人が、これからも後輩達に引き継がれて、良き仲間と素晴らしいヒュッテ・レーベンが展開されんことを切に祈ります。有難うございました。

山口さんのことが心配ですが、一度訪ねたいと思っておりますが、こちらも寄る年波に負けて、思うようにできません。山田、山口、長谷川のお三方は会の運営上はもちろん、仲間たちにとって至宝と小生はかねがね思っています。

感謝で一杯です。

はやし 拝。

以上

# 氷ノ山ヒュッテ竣工60年記念スライド

山田 健

## 千本杉ヒュッテ竣工60年



2022.11

1.

## 氷ノ山、鉢伏山地域とACKU

- ▶ 兵庫県の最高峰
- ▶ 以前は交通不便で手つかずの自然と豪雪地域の魅力ある山域
- ▶ 戦前から神戸高専では将来のホームグラウンドとして着目
- ▶ 1925年（大正14年）同台山岳会の三好毅一氏が、川口復幸氏らが、中村健治氏の案内で鉢伏山から氷ノ山を登山し、このとき大阪アルコウ会の旧千本杉ヒュッテに宿泊



小代越からの氷ノ山

山と人6号より（松本清、保坂昌）

2.

## 中村健治氏（健さん）という人

- ▶ 美方郡美方町（鉢伏山の裏側）出身
- ▶ 美方郡村岡で大工の修行、旧千本杉ヒュッテの建設に従事
- ▶ これを機会に氷ノ山に親しむ
- ▶ 海軍舞鶴建築部に勤務、神鍋でスキー
- ▶ 戦後丹戸に定住し四季にわたり但馬の山を歩く
- ▶ 山とスキーに凝ったため「こったさん」と呼ばれる
- ▶ 「氷ノ山の主」「飛燕のごときクリスマスアニア」「健さんが歩いたところが登山道になった」などの伝説



千本杉ヒュッテの健さん

山と人13号より（寺倉誠二）

3

## 大学の山小屋を持とう！（1950年頃）

- ▶ 全学を統合する山岳部が建設され・・・六甲台の人達もこの地域に関心を持ち・・・私たちの部が氷、鉢一帯にのさばってゆくうちにここに私たちの小屋を持とうという話が出てきた。
- ▶ 山頂の山小屋（尾工ヒュッテ）を買い取るか、小代越の下に新築するか。議論の末新築に傾いていった。
- ▶ 健さんに相談したところ、彼は敷地選定、平面図を作り神戸まで説明にきた。
- ▶ しかし、目的も資金も、そのような夢自体が私たちに過大であった。

山と人6号より（保坂昌）

4

## 大学の山小屋を持とう！（1960年頃）

- ▶ 「当時、名の知れた大学が北アルプスのどこかに山小屋を持っていた。したがって、神戸大学にも是非どんな粗末でもよいからほしいというのが念願であった。」  
山と人9号「千本杉ヒュッテの思い出」西村勝比古山岳部長
- ▶ 西村先生は学生部長であったときから、大学が山小屋を持つことに積極的であった。
- ▶ 当時の高木正孝山岳部長や山岳部員も山小屋の必要性を感じていた。

5

## 高木正孝山岳部長と谷川岳・虹芝寮

- ▶ 成蹊高校山岳部時代に谷川岳に虹芝寮を建設された経験がある（1932年9月15日開寮）
- ▶ 以後この小屋を根拠地に谷川岳一ノ倉沢、幽の沢を開拓（有名な一ノ倉沢奥壁積雪期初登は1933年12月）
- ▶ 「根拠地（虹芝寮）をようやく建設した私たちは、それ以後というものには全力を挙げ、若き血と汗を傾けて谷川岳東面の沢や壁に立ち向かった」  
山と人16号より（田中徹行）



昭和7年9月15日虹芝寮開寮式。山岳部長高木正孝、谷川岳一ノ倉沢、奥壁積雪期初登の経験者、講師の田中徹行。

6

## 高木正孝山岳部長と千本杉ヒュッテ

- ▶ 「山岳部がやらねばならないことは、OBの組織化、ルームを作ること、山小屋を作ること、次は君！海外遠征だよ」
- ▶ 山小屋を拠点として豊富な雪山生活をより安全に体験する。自ずとスキー技術を手始めに氷雪技術の質の向上が促され、同時に仲間意識も高揚し、これらの貴重な積み重ねは部の伝統づくりそのものとなる。そして現役による海外遠征も夢ではなくなるであろう
- ▶ 高木先生は虹芝寮と千本杉ヒュッテ建設が二重写しになっていたのではないかと想像される

山と人16号より（田中徹行）



昭和36年12月 氷ノ山にて高木正孝部長

7

## 立山弥陀ヶ原弘法小屋から氷ノ山へ

- ▶ 1957年学校登山で立山へ（林市雄OBがコーチとして同行）
- ▶ 室までまでのバス道開通により、弥陀ヶ原の弘法小屋の利用価値が下がり、10万円？で売りに出ているという情報
- ▶ 1960年西村学生部長、高木山岳部長らが交渉に行くが、価格面で折り合わず？ディスカウントを待つうちに立ち消えに
- ▶ 1961年2月ごろに中村健治氏より、大阪アルコウ会が旧千本杉ヒュッテを無償で神戸大学に譲渡したいとの申し出があったと連絡
- ▶ 氷ノ山という馴染んだ地域であり話が進み、旧ヒュッテは大阪アルコウ会から山岳部へ譲渡を受けることになった

山と人19号 林市雄

8

### 西村勝比古先生

- ▶ 学生部長として神戸大学が山小屋（千本杉ヒュッテや鹿島のワングルヒュッテ）を持つことに大きな働きをされた。
- ▶ 高木山岳部長と仲が良く、南太平洋への学術調査出発時に山岳部のことをよろしく頼むと託された
- ▶ 1966年から山岳部長



9

### 大阪アルコウ会の旧千本杉ヒュッテ

- ▶ 旧ヒュッテは下の千本杉の林の中、東尾根上に在った
- ▶ 1961年5月に旧ヒュッテを調査するも、基礎が腐っていたことが確認された
- ▶ 修復では持たないと結論。
- ▶ 結局、中村健治氏の提案により旧ヒュッテから南へ100mの大段平と東尾根登山道分岐点の現在の位置に新設することとなった。沢水が利用できることも決め手に



山と人19号 林市雄

10

### 尼工ヒュッテの怪

- ▶ 旧ヒュッテ調査時、中村健治氏ほかOB4名が上がったおり、頂上にあつた尼崎工業高校の山小屋（尼工ヒュッテ）に立ち寄り休憩を行った。その後下山したが、直後に頂上に至ったパーティーが尼工ヒュッテが燃えていることを発見、通報した。
- ▶ 健さんとOBらは確実に火の始末を行ったはずであるが、犯人であるとの証拠はないもの状況から見て疑われても仕方ない。
- ▶ 尼崎工業高校には金一封と菓子折りをもってお見舞いした。



山と人19号より（林市雄）

左の黄色いのが尼工ヒュッテ 1998年

11

### 地元関宮町の要請

- ▶ 地元では登山者の安全や千本杉の保全のため、県下の国立大学である神戸大学に是非小屋を作ってほしいとの意向
- ▶ 元々、戦前からこの山域に入り込んでいた神戸大学には特に親密感が強かった
- ▶ 国立大学ということと、地元民と親しいOBの方々が居たということが地元で安心感を与えたと思われる

山と人19号 林市雄

12

### 営林局の天然杉伐採許可の交渉

- ▶ 小屋建設と伐採には国有林であったことから営林局の許可が必要であった
- ▶ 大学の主張 ⇒ 氷ノ山のシンボルである千本杉をはじめ森林を守るためにヒュッテが必要である。但し、ヒュッテ建設費を下げるために現地の千本杉を材材として利用したい
- ▶ 営林局長「矛盾した、ちょっと虫のいい話では・・・」
- ▶ たまたま高木部長の近所の郵便局長の次子が大阪営林局長だったので、そのついで交渉
- ▶ 営林局長「大所高所から見ればヒュッテがあることが森林の保護につながる」
- ▶ 営林局長の鶴の一声で小屋建設と伐採許可が得られた



千本杉ヒュッテの建設

山と人19号 林市雄

13

### 建設工事

- ▶ 1961年8月、第一陣として現役部員が現地に入り、テント生活をしながら整地作業を行う
- ▶ 資材は部員やOBらがすべてを丹戸からボッカ
- ▶ 躯体材は千本杉を利用し総天然杉造りのヒュッテとなる。
- ▶ 現地に自生する千本杉、学名「アシウスギ」は雪に強く、霏雪に晒されながらも60年を経て立派に立っている（1975年に天然記念物となり今では伐採できない）
- ▶ この天然杉を伐採して、大工の健さんが製材機で製材した。その際右手薬指を切断する事故
- ▶ この小屋が風雪に耐えてきたのも優れた材材と大工としての健さんの匠の技の賜物

14

### 建設工事

現役を中心とした労働率は延べ人数450名に及んだ

建設工事はわずか5か月で行われ、12月に概成した。

山と人16号 田中徹行



15

### 建設工事

- ▶ 「竣工までには様々なことがあった・・・ペンキ塗りに励んで、重いストーブを荷揚げしたのも主として現役諸君の労力によるもので、大学と山岳部が一体となってできた汗の結晶である。
- ▶ 私がこれを書いたのは、ヒュッテができた当時の山岳部の努力をいつまでも忘れないでいただきたいため、そう簡単にできるものではないことを知っていただきたい。

山と人9号「千本杉ヒュッテの思い出」西村部長より



千本杉ヒュッテの建設

16



## ヒュッテの利用 (スキー合宿)

- ◆ 1965年前後の数年間、学校行事として一般学生を対象にスキー合宿が行われた。
- ◆ 毎回人気で40名近くの一般学生が東尾根をスキーを担いでヒュッテに登った
- ◆ 山岳部員は食料などポッカ小屋に着くなりぶっ倒れるものもいたとか
- ◆ 本当の自然の中で、山小屋で生活し、自分たちで飯を作って食べるという、一般のスキーツアーでは味わえないものがあった。
- ◆ 今の学生にはできないのでは？  
山と人19号より (八田義一)



25

## 中西哲先生とヒュッテ

- ◆ 1962年6月に大学主催で一般学生対象に開催された「氷ノ山バスツアー」に西村勝比古先生が、当時助教授として赴任されたばかりの中西哲先生を引っ張り込んで、氷ノ山の植物について現地指導を行わせた。
- ◆ これをきっかけに山岳部と関係を持つようになり、  
1963年 台湾學術調査隊の部長  
1968年 アラスカ・ユーンコン學術登山隊長  
1986年 神戸大学チベット學術登山隊実行委員長を引き受けられた
- ◆ また西村山岳部長の後を引き継いで、1977年山岳部長に就任



昭和36年頃の中西哲先生

26

## 中西哲先生とヒュッテ



図4 氷ノ山のブナ林調査(1974年)。中央は中西哲教授

27

## 横山千秋先生とヒュッテ

- ◆ 「乗鞍のプリンス」とあだ名される
- ◆ 乗鞍岳にある東大宇宙線研究所に1952年から務められ、その間山スキー技術を活かした。
- ◆ また、当時の皇太子(現在の上皇陛下)と誕生日が同日(ほぼ同時刻(県から表彰されたとか))
- ◆ 1970年ごろからは山岳部のほとんどの部員が山スキーを一から教えてもらっていた
- ◆ 氷ノ山で行われたスキーバスのコーチ
- ◆ ヒュッテの沢の水を「清森千本杉」と称し、まるで酒のように飲まれたとか(当時はヒュッテで酒はご法度)
- ◆ それを見ていたスキーバスの学生たちはすっかり騙されていた?
- ◆ 1997年2月 横山先生退官記念登山はヒュッテで行われた



1972年3月 氷ノ山への道の横山先生

28

## 千本杉ヒュッテとねむの木山荘

- ▶ 千本杉ヒュッテが完成したとき、私たちは絶好のたまり場ができたことを喜んだ。しかし就職して7、8年ごろ、仕事に追われ、結婚、子供ができ、なかなかヒュッテまで出かける時間がない。
- ▶ わりに行きやすい横角野(八チ高原)に自分らの小屋を持ちたい。夢は膨らんでいった(保坂、高田誠、・・・)
- ▶ 健さんから「土地が手に入りそうだ」
- ▶ 万博が近づいて建設費が高騰するかもしれない ⇒ 借金して建てる決断
- ▶ 1968年に完成

山と人13号 保坂昌

- ▶ 現在も和光会員らが管理人として運営し、現役部員らが千本杉ヒュッテからふん回しを下ってねむの木山荘に受け入れてもらっている

29

## 忘れられたヒュッテと解体の危機

- ▶ ヒュッテ建設から年月が経ち、1970年代に入ると、建設に従事した年代の人たちが社会人として活躍するにつれ、ヒュッテを訪れる人たちが減っていった。
- ▶ 学生課「5、6年前台風の影響を受けたので改修工事を行った。応急修理は毎年行っている。小屋の建て替えは当然必要ない。文部省へ報告の必要があり、昨年度の利用者は35人と報告したが、実際は10人前後と推測している。一方ワンダルの鹿島小屋は150人と利用者は多い」
- ▶ さみしい思いがするが、若とか氷雪の魅力の乏しく、電気やガス設備もなく、現役部員も少ない昨今の状況下ではこの現状を肯定せざるを得ないのか



1985年2月ごろ

山と人16号より (田中徳行)

30

## 但馬高原林道と氷ノ山国際スキー場

- ▶ 1980年頃に兵庫県が大規模林道(但馬高原林道)を建設
- ▶ 村岡~游川山~八チ北高原~八チ高原~大久保~大段平~戸倉
- ▶ 無雪期はヒュッテから至近の大段平まで自動車で登ることができるようになり格段にヒュッテに登りやすくなった
- ▶ 1985年頃に指定の対岸の段々畑のところが、氷ノ山国際スキー場としてオープン
- ▶ 東尾根基部までリフトが使えるようになり、積雪期もヒュッテに入ることが容易となった
- ▶ これらの出来事は、忘れられたヒュッテが思い出される転機となった

31

## 大改修とテラスの増設

- ▶ 1998年の大改修の前に大学からあまり使われていないようなので、廃却の方向で検討しなければならぬとの話が出てきたとき、山岳部山岳会会のなかから、なんとしても改修して維持しようとの意思が出てきたのは嬉しい限りであった 山と人19号より (林市雄)
- ▶ 建設から約40年が経過し、建設当時に現役学生であった人たちは、ちょうど会社を定年退職するタイミングになっていた。大改修に立ち上がったのはこのようなヒュッテに強い思い入れがある人達だった
- ▶ 改修工事やテラス増設の資材は約5トンに及び、総勢136名が大段平から担ぎあげた
- ▶ 大段平から短い角材なら二本、長い角材は一本を背負って千本杉ヒュッテまでの林道を何度も行き来しました。夏の暑さの中、首にかけた手ぬぐいはすぐにビショビショになりました。息を切らせながら、それでも「お役に立っている」という感覚が背中を押してくれました。 山と人19号より (中村千香)

32

2000年9月30日 改修工事竣工式



大学当局、地元代表者、施工業者、ACKU関係者など56名が参加した

2000年9月3日 改修工事竣工式

33



武田則明建設委員長  
金井良朝事務局長  
この最も改修工事に功績のあった両氏はなぜか竣工式には出席していない。当日は二人とも同じ病院にベッドを並べて入院していたとか

34

神戸大学氷ノ山体育所の看板

- ▶ ヒュッテの改修工事に先駆けて、1998年12月に西塚泰美学長から「神戸大学氷ノ山体育所」の看板の揮毫をいただいた。
- ▶ 1階の正面の壁に取り付け
- ▶ ステンレス製のミニチュアも外壁に設置



山と人19号より(中村千春)



35

山岳会例会への組み込み

- ▶ ACKUの例会は1996年から始まりました。千本杉ヒュッテは毎年の春のスキーツアー、夏秋の小屋整備を兼ねての山行で利用した
- ▶ いつものパターンでは前日にむむの木山荘に泊まり、・・・国際スキー場のリフト結点から「戦い」が始まる。重い食料は現役が持つが、ちょっとの軽いののは持たされる
- ▶ 東尾組小屋までは皆一緒。問題はその後急登と一の谷のジグザグで体力と装備の差が出る。1時間強の遅れとなる。しかし小屋に着けば「お疲れさん」のことがおぼえてくれる
- ▶ 精々ストープの「曲」くらいでもつばら「敷む」ばかりである。山の話、とおきのバカ話、スキー談義。現役部員の自己紹介などエピソードに続く
- ▶ 小生は言ったことがないが「今何時や」という声で「明日の予定」をリーダーの金井良、緒方、矢崎なりが天候、参加者の技量と体調を見て決めてくれる。突っ込みも入る。これがまた面白い。

山と人19号(高田和三)

36

ニセ飯岩とリングワンデリングの怪

- ▶ 2011年3月頂上から飯岩を巻くいつものルートを下った。視界はほとんどなし。2、3分滑ったところからいつものように左へ回り込んだ。下ると深淵となりラッセルとなる。当然馬力のあるトップは山田である。
- ▶ しばらくするうちに「下りすぎや、もっと左や」と音が聞こえた。その時岩らしきものが前方尾根上部に微光に見えた。下りすぎたかと登り始める。矢崎が尾根上に偵察に行ったが現在位置がわからない。
- ▶ その時である。一番ケツに揺た井上やおらGPSを取り出して指示を出してくれた。
- ▶ なんと登りついた左手には頂上前側のパイオトイレのある展望棟に赤ち当たった。GPSの威力は素晴らしい。その時の山田のしつかつめらしい顔はその後見ることがない。
- ▶ 頂上を時計と逆回りで一周したことになる。当然この時は東尾根から下った



緑：正規ルート 赤：ワグワグワ

山と人19号より(高田和三)

37

竣工50周年記念イベント

- 2011年10月16日 現地においてヒュッテ竣工50周年記念イベントが行われた
- 大学当局、地元関係者、武田義明教授(中西先生の弟子でクラカントリー隊員)、ACKU関係者ら38名が参加
- 福田秀樹学長祝辞(代読中満学生支援課職員)「青春時代の多感な時期に山小屋に寄泊して静かに自然と自分を見つめることのできる機会は大変貴重です。多くの登山者が立ち寄りデッキで休んでいられるそうで、神戸大学の山小屋がお役に立っていることもうれしい限りです」
- 同市会員によるヒュッテ建設の経緯の披露
- 武田教授による氷ノ山の植生について講演があった



ACKUニュース37号より

38

中国地質大学(武漢)との合同登山

2014年4月 中国地質大学(武漢)の副学長以下8名が来神し、2015年の百周年記念合同登山の打ち合わせを行った

そのうち6名が氷ノ山交流登山に参加

日本の雪山を楽しんだ



氷ノ山頂上にて4月7日朝

39

中国地質大学(武漢)との合同登山



下の千本から上の千本へ上がる中国チーム



ヒュッテでくつろぐ董冠(左)と牛小洪 ロフブテの中国副隊長と副隊長

40

### 山岳部百周年記念事業の改修

- ▶ 2014年度 5月～6月
- ▶ ヒュッテ躯体のジャッキアップ、土間コン打設、トイレ改修など
- ▶ 延べ65人の資材ボッカ 総額116万円
- ▶ 4名の女子部員も40kgのボッカを行ったが、その後すべて退部して居なくなった



改修工事参加者  
古橋 博 東高昭三  
田中啓彦 土山廣樹  
高田昭三 藤谷信俊  
河本卓生 金井昌樹  
井上達男 白根 洋  
和光公義 菅谷千春  
山田 健 長谷川浩  
松村武樹 山本康昭  
山本尚輔 松村健司  
加藤孔平 井原凡太  
藤原 武 高橋 香  
藤原 昌 唐大政生  
平 茂樹 松岡 仁吾

4 1

### 一般利用者への開放

学生支援課の水ノ山体育所の利用の考え方は利用は学内関係者と神戸大学のOB、高校体育連盟など公約な行事参加者、遭難時の緊急使用に限っていた

しかし、一般登山者からの利用についての希望が多く、ヒュッテの一般利用により協力が入るし、利用することで老朽化を防ぐことができる

2017年ごろ、学生支援課と協議し一般登山者から希望があれば受け入れることとなった

2019年3月には日本山岳会関西支部のメンバーが大勢してヒュッテに宿泊した

現在では年間30人程度の一般利用がある



4 2

### 山岳会の管理業務受託

- ▶ 2019年に学生支援課から相談
- ▶ 長年管理業務を委託してきた鶴橋地区の片芝氏から、もう続けることができないと申し出があった
- ▶ ついては山岳会で受託してもらえないか
- ▶ 条件 5月～11月に月1回の点検 報酬は1回11,000円 報告書提出など
- ▶ 理事会に諮り、受託することとした
- ▶ 実施にあたり、希望者を募って実施者には実費として1回6,000円を受領してもらい、山岳会ヒュッテ会計に5,000円を入れてもらうことを決定
- ▶ これにより、年間35,000円がヒュッテ会計に入ることになり、維持管理が一般会計からの補助を入れずに行えるようになった

ACKUニュース43号より (山田健)

4 3

### ヒュッテがあったからこそ

- ▶ 福定で民宿を営む 西村義雄氏 (健さんごき後の水ノ山の主) の話
- ▶ 多くの登山者がこのヒュッテがあったことでどれほど救われたことか
- ▶ あの山に山下の国立大学である神戸大学が小屋を持っていて、キチンと維持されていることが、地元にとってどれほどありがたいことか

山と人19号より (林市雄)

- ▶ 2021年、地元の養父市消防局 (遭難者保護の役割) と神戸大学との間で、遭難救助のためのヒュッテの緊急時利用の協定を結んだ (山岳会が仲介した)

- ▶ 「春夏秋冬、このヒュッテをベースに多くの岳人が育ちました。頂点であるヒマラヤや米路峰の登頂もここからの出発であることは間違いないと思います。現役諸君にはこのヒュッテの利用と維持を引き継いでゆくことが建設当時の諸先輩からの願いでもあり、輝かしい神戸大学の学術登山やフィールドワークの継続に貢献することでもあります。」

50周年記念式典神戸大学運動会会報より

4 4

### 近年の豪雪によるヒュッテの傷み

近年の大雪とヒュッテの老朽化が相まって屋根やテラスの破損が目立つようになってきた



2022年3月7日 大雪で完全に埋まったヒュッテテラスが雪の重みで破損した

4 5

### ヒュッテのこれから

- ▶ いつかは使えなくなってしまう。その時どうするか?
- ▶ 将来ヒュッテを建て替えようとなったとき、大学内でそれを合意形成するためには、ヒュッテの利用価値をアピールできなければならない
- ▶ 利用を促す必要があり、学内では授業や研究に活用されること、学外では遭難対策や高体連活動のベースなど
- ▶ 宣伝広報活動が必要である
- ▶ 建設費は寄付に頼らざるを得ない (大学からは立替費用の負担はできないだろう)

山と人19号より 学生支援課

山岳会としてできることは?

4 6

資料をまとめて掲載しているため、読みづらい点がありますが、もっとよく見てみたい方は、ACKUのホームページ (<http://www.acku.net/>) に1ページ毎に掲載しておりますので、ホームページにアクセスして御覧頂きたい。

以上

## 第四章 紀行・随想・活動報告（海外編）

### マルディヒマールトレッキング

居谷千春

2022年10月下旬から11月中旬まで山岳部同期の酒井さんのリードでネパールの旅に行くことができた。この旅のベースはHNA-J（ヘルプネパールアソシエーション・ジャパン）が支援する小学校建設引渡式をベースにトレッキングや観光を乗せたものと言っていいかと思うが、現実には酒井さんが主宰する東京の室町山岳会のネパールトレッキング計画にHNA活動を乗せたとも言えなくもないかもしれない。メンバーは山岳部同期の酒井利直Lと彼の山岳会の仲間の田中廣さん、2012年富士山で亡くなった故緒方俊治岳兄の奥様の順子さん、HNA会員でここ十年来山に燃えている中村かほりさん、そして私。HNAの会報で酒井さんはじめメンバー全員が今回の活動報告を載せ、特に酒井Lや田中廣さんがまとめられた報告はコース概要や雰囲気がよくわかる。ACKUの会員の多くは田中俊甫さんが興されたHNAの会員でもあるのでここで繰り返すのも二番煎じの感あり。そこで今回はこのネパール旅行で見た山々について書いてみたいが一応、最高到達点までの行程を簡単に写真で振り返ってみる。

（以下トレッキングはTRKと略し、TRK○と書けばトレッキング○日目ということにする）



TRK 1 出発点のカンデ



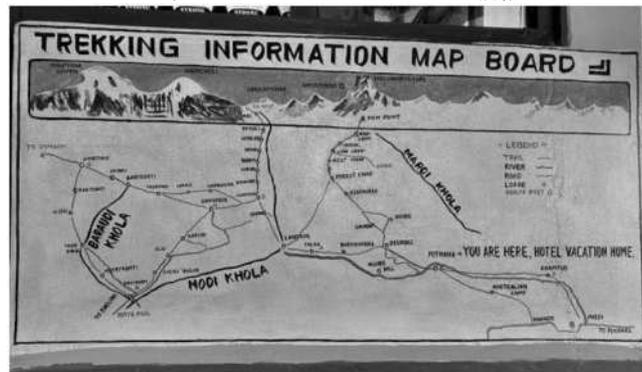
オーストラリアンキャンプ



ポタナで宿泊



TRK 2 ポタナからのアンナプルナS



TRK 2 ホテルの壁にかかれたルートマップ、終点はVIEW POINT



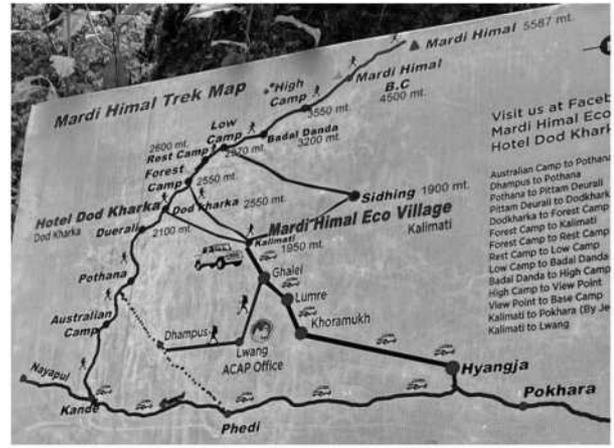
写真左から  
ネギ・スラーズ君  
サビン・グジェル君  
中村かほりさん  
酒井利直L  
緒方順子さん  
そしてガイド頭、巨漢の  
アンキッド・バンダーリさん  
田中廣さん  
ゴードン・プロビス君です。

私以外はみんな強いわ！





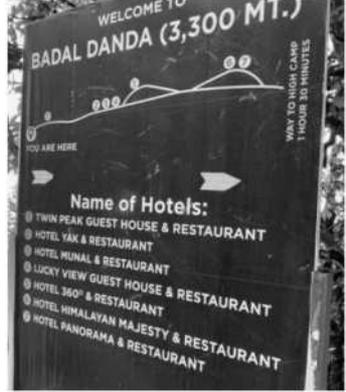
TRK2 フォレストキャンプへの気持ちのよい広場



ドッドカルカの看板 フォレストキャンプはもうすぐ



TRK3 レストキャンプからの早朝のマチャブチャレ、昨日はフォレストキャンプを通り越し、このレストキャンプ泊



TRK3 今日はバダルダダ泊とのことだが…ひとつ山越し更に上か！次の山の上らしい。バダルダダは広い！



TRK4 バダルダダ最高地点パノラマホテル 3300mからの景色は最高。ここからは眺望の開けた尾根歩きだ。



TRK4 ハイキャンプには観光ヘリサービスまでである。ヘブンホテルにはかなり早く到着。よって高度順応散歩。

## 1. マルディヒマール 5553m

(注：購入した地図での標高、報告や看板によってかなりの差あり、5587mという表記も多い)

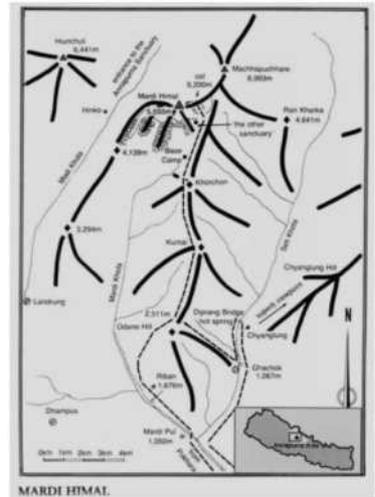
登ることを最初から特に予定されていなかった山で、ポカラで周辺地図を買って歩き出してもトレッキングを始めても正面に聳えるマチャプチャレ 6997m や進行方向左側に存在感のあるアンナプルナサウス 7219mばかりが気になって、トレッキングの名称の冠になっているそのマルディヒマールという山の確認もできず、当然指呼することすらできなかった。実は TRK4 でもマチャプチャレの前にあるはずのこの山は目を凝らしてもピーク認識もできていない。ところが TRK5、最高到達点(約 4000m)からズームカメラで、あえてマルディヒマールだけをファインダーに収め写真を撮って「ああこれか！」と確認できて安堵した。そして撮った写真を拡大したりしながら初登頂者はどのルートで登ったのか気になり出した。ネパールのトレッキングピークとしては最も低い方だし体力勝負のように思えたので、前日の晩だったか、ガイドのアンキッドに「頂上に行きたいなあ」とか冗談で言うと、「上部はダブルアックスでカリカリ！」とか彼はいうがあまり本気にはできなかった。しかし現実に「これがマルディヒマール」という写真をとるとそれがよくわかった。



TRK5 今回の最高到達地点、大方のトレkkerは此处で帰るが、先を目指す人も少しはある。例えば、我々の隊の仲間。アンキッド以外のメンバーは将来の主任ガイドへの修行の為、更に尾根をたどりベースキャンプまで足を延ばした。更に急傾斜を登るとハイキャンプへ至る、しかし見る範囲では頂上を目指す登山家はいなかったようだ。



TRK5、最高到達点からのマルディヒマール。ACKU のフェイスブックのサイトへ投稿した。井上元会長管理するホームページにも載せてもらった。中央右半分の3 高点の中央がサミットと思われる。2012 年以降トレッキング道が整備された。ネットなどでいくつかの登頂例を見ていると岩壁帯をクリアできれば右のクーロアールに入り込んで登っているようだ。クーロアールだけでも 4H かかったという記録もあった。Web ではこの頂上からのマチャプチャレの写真はでてこなかった(有料?)。



グーグルアースで作成：この山の初登頂は Basil Goodfellow であるとの記録がある (1961 年)。ルートは我々の辿ったマルディヒマール西ルートでなく、南ルートかもしれない。この南ルートは西ルートに比べポピュラーでないようだ。マチャプチャレの北上空から西・南ルート等を見ていると時間を忘れる。



東向きにマチャプチャレやマルディヒマールを眺めてみると、マルディヒマール山頂を扇のかなめにして西・南コースと素晴らしいトレッキングコースを提供していることがよくわかる。



今回のコースからではアンナプルナ I、II は見えなかったがガンガプルナやアンナプルナ III ははっきり見えた。アンナプルナサウス山頂部から数 km 上があれば遠くマナスル山群が見える。防寒ゴンドラ等でゆっくり GHT (グレート・ヒマラヤトレール) を楽しみたい。

## 2. カトマンズとポカラ間の高所から（アンナプルナ山群・マナスル山群）

カトマンズからポカラに飛ぶ機内で右側座席の客がどよめきだした。左側の我々は指をくわえるだけが、丁度右側に座っていた韓国登山チームの中の人のお兄さんが撮りましょかといってヒマラヤジャイアンツ、マナスル山群の写真をとってくれた。飛行航路と同じぐらいの高度の山々が丸い窓からチラチラ見えている。遠いような近いような、しかし青い空にしっかりコントラストを保ち輝いていた。成都からラサの航路からミニアコンカがポツンと見えた時より感動的だった。美しい青空のせいかもしれない。



カトマンズからポカラへの飛行機から。翼の下、左からネムジュンヒマール・マナスル・P29・ヒマルチュリ西峰・本峰と続いているのだと思うがやや自信なし。

ネパール国の長い鎖国が1950年に解けてから約10数年間はジャイアンツの初登頂競争が続いたが政情不安定を受けてまた1965年から「登山禁止令」が4年程施行された。しかし高額な登山料が入らないだけでなく多くの山岳民のポーターとしての収入源が絶たれたわけである。世界の屋根ネパールとしての外貨獲得策として「トレッキング」という観光客誘致活動が同じ頃にはじまった。高度6000m以上のヒマラヤ登山活動をしなくとも、その美しい山々を見ながら山間部の村と村をつなぐ生活道を歩くという新しいレジャーが確立されてからそろそろ60年だ。エベレストエリア、アンナプルナエリア、ジュガル・ランタンエリアが三大人気。トレッキング中にお会いした法政大学山岳会のK氏のネパールは登山・トレッキングで既に26回目だそうだ。

トレッキングを終了しカトマンズへの帰路で酒井Lはバンディプルというインドチベット交易路、今はリゾートに一泊の計画を組んでくれた。風邪気味で一人部屋を割り当ててもらった私は、翌朝酒井L一行とは別にホテルの裏山（ビューポイント）に登って日の出を待った。多くの観光客が日の出の方向を向いている。朝日が頂上を赤くし東面の壁に広がっていく。広角な範囲のヒマラヤ山脈が一望できるバンディプルのビューポイントは本当に素晴らしい。大画面のパソコンでそのモルゲンロートを拡大しながら見ていくと自分の目で確認できなかった遠くの山々が鮮映的によみがえる。



山の中腹から西北遠望（左）、ラムジュン山群の向こうにダウラギリ山群やアンナプルナ山群が見えているはず。同じく東北方向を遠望（右）、ガネッシュヒマールが見えているはず。



(左) 左からダウラギリ山群、その右にマチャプチャレ・アンナプルナII、ラムジュンカイラス  
 (右) 左からマナスル・P29・ヒマルチュリ山群

バンディブルからカトマンズへ帰る途中、ヒンドゥー教の聖地マナカマナ（1385m）にロープウェイで上がる。ここからはアンナプルナ山群とマナスル山群が一望できる。



マナスルと P29 は重なってしまっている。アンナプルナ山群も望遠、更に拡大しないとよくはわからないが、今回はじめてアンナプルナIがみえたのではないだろうか。



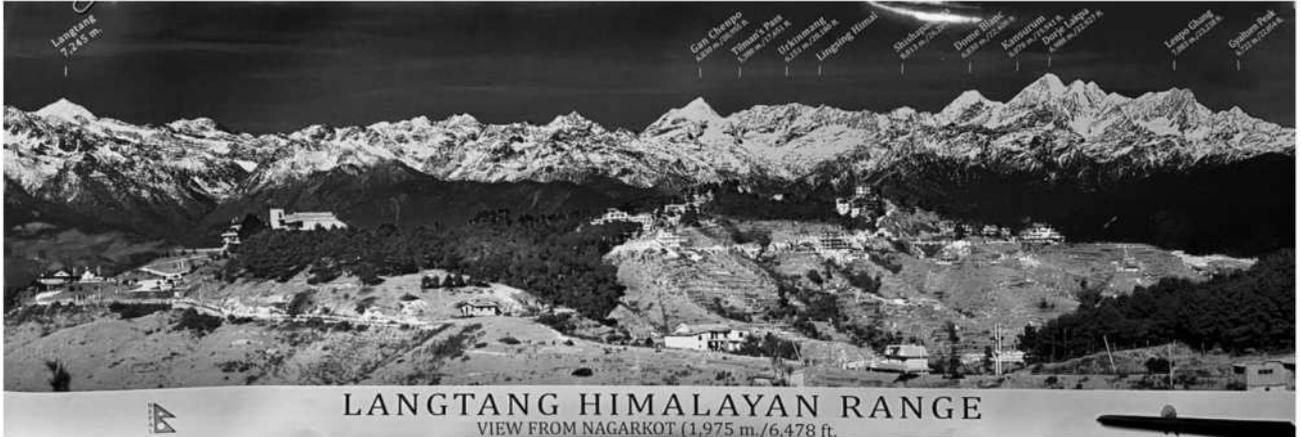
(上) アンナプルナ山群、左端からサウスから始まる大内院、一番奥に主峰、手前がマチャプチャレ、右へIII峰、更に右に立派なII峰、その手前右がラムジュンカイラス。

(左) アンナプルナ山群とマナスル山群のど真ん中に綺麗な台形の高峰が写っている。どうもカンクールIのようだ。その右奥はネムジュンヒマール。

ここはやはりバンディブルよりはジャイアンツにもかなり近いし高度も高いのでよく見えるということか。

### 3. ランタンヒマール

HNAの学校訪問行事が終了する日、酒井Lはとっておきの計画を組んでくれていた。ナガルコットのクラブヒマラヤホテルに宿泊。ここからはランタンリルンが見えると楽しみにしていたが、到着日も翌朝ももう一つ天気であった。また折角の眺望をさえぎるようにランタンの方向に林があるので屋根に上がって山を見た。ランタンリルンはすぐわかったが、それでもどれがどれかわからないのでホテルの外でパノラマ写真を購入した。



ポスターの左端からランタンリルン 7245m、ガンチェンポ 6830m、ずっと右に特徴的なドルジェラクパ 6998m  
この間に小さくシシャパンマ 8013mが見えるようだ。



ホテルの屋根からのランタンリルンの夜明け



同じくドルジェラクパ

無駄にたくさんの写真をはりつけてしまったが、旅の間に見ることができた高峰を紹介した。残念ながらエベレスト周辺の山は見えなかったが、たった一回のネパール行きでなんでもかんでも見たいなんてことはおこがましい。エベレスト周辺の地図を買ったが最近の地図は等高線もしっかりかいてあって美しい。地図だけで書斎で旅ができる。未踏峰かどうかなんて今回は全く気にならなかった。ネパールだからか、そういう山には肉薄してないからか、こちらが老人になったからか。若い仲間たちが近い将来またそういう山に行くために、チベットの未踏峰へチャレンジするために、縦横無尽にトレッキングを行い、6000m以上の登山も行ってもらいたい。

今回のネパール旅行では、私はチベット族だという人が時々現れた。その時は挨拶の「ナマステ！」を「タシデレ！」に切り替えた。その人の顔が「えっ！」と明るくなる。調子にのって「アーマーバーロー・クンガンサン」というと笑みがこぼれる。「テントテンハトツポイショ！」と続けていうともう驚きとともに「友だち」だ。この最後の言はどうも自信がないが、いつの日か若き仲間が正確なものにしてくれるだろう！

以上

# 南米チリへの 1958/1960 遠征の 60 周年レビュー

—1958 年のパタゴニア・アレナレス初登と北氷陸の踏査を中心に—

豊田 寿夫

## 1. はじめに—ACKU ホームページの関連アーカイブへの誘い

1950 年代後半から 1960 年代にかけて ACKU が南米チリで実施した二つの合同遠征については、それぞれが 60 周年を迎えた 2018 年と 2020 年にかけてレビューを行い、結果を ACKU-News 43 号及び 45 号に掲載すると共に ACKU ホームページ(HP)にアップした。これらはチリ側の関係者にも見てもらい、当時の登攀写真や対象山域の新しい情報などの提供を受けた。全資料を見直し、再編したのが今回のレビューで付図に示す HP 文書類である。

1958 年のパタゴニア遠征は第 2 次世界大戦のあと神戸大学が初めて送り出した海外遠征であった。当時筆者は在学中の山岳部員として遠征隊の送りだし準備に参加した世代である。その記憶と自身が参加した 1960 年の遠征を含め以後 60 年間に ACKU から出版された資料等を再整理し、“山と人”第 22 号等に載せたレビュー記事を全文 PDF 化し、英文の要約記事等と共に HP にアップした(付図)。なお、1958 遠征参加のチリ側隊員の一人が後年英国隊のメンバーとしてアレナレス岳山域に入っているが、今回それらの報告等も取り込み北氷陸南部山域の踏査史(’58 文書 A 補注 C)としている。

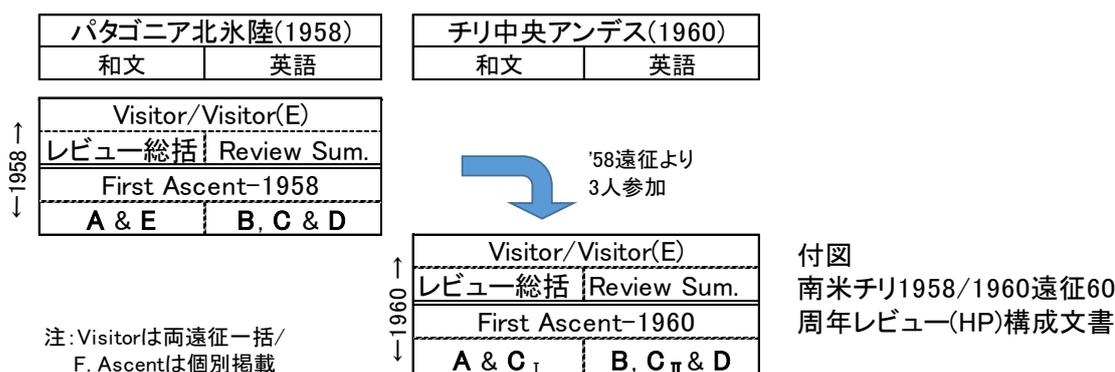
60 年遠征は’58 遠征のあと両国の若手メンバーに合同遠征の成果と友好関係を継承させる目的での合同山行、つまりチリ中央アンデスを対象とした派生プロジェクトであった(付図)。この’60 遠征にはアレナレス岳登頂経験を持つ’58 遠征チリ側メンバー 3 人が加わってくれ、セロ・コーベ峰の初登を含む充実した登山を経験している。

今回のチリの両遠征の振り返りは 1958 年遠征を中心にまとめ、二つのチリ遠征の 60 周年レビューとした。その結果の詳細は付図に示すように HP の Visitor 及び First Ascent 欄の文書類に含まれている。

## 2. 日本チリ合同パタゴニア遠征実現の背景—多くの先輩たちの援助を受けて

1956 年国際学会で南米に出張した ACKU 会長田中 薫教授がチリ山岳連盟クライツェル会長と交わした話のもとで日本・チリ合同パタゴニア探検(’58 遠征)が実現した。

時の在チリ大使矢口麓蔵氏は神戸高等商業学校の卒業生(T13 卒)であった。同氏は昭和 6 年 9 月に文官(高等)外交科試験に合格、第 2 次世界大戦中は欧州駐在の外交官を経て、1950 年代後半にはチリ大使の任にあった。遠征の立上げから登山隊入山中の全期間に発生した重大・緊急事態は同大使の尽力なしには克服できていなかっただろう。



一方、日本国内では探検後援会長には時の副総理で後の衆議院議長石井光次郎氏(神戸高商 M45 卒)が選ばれ、また対政府折衝や募金等に当たる事務局は当時椿本チェーンの専務だった ACKU 先輩の山中一郎氏(高商 S2 卒)が引き受けられた。石井副総理の貢献については後日談がある：

合同遠征の日本側先発隊の最も重要な役割は船積した装備一式(チリ側への贈呈分を含む)を関税なしで通関することであった。それらは遠征隊が氷河域の登行に必要な欠くべからざる装備であると同時に、チリ山岳連盟がこれらを会員に売却して日本側の滞在費等を捻出する原資になるものだった。ところが船積貨物の無税通関に必要な大統領令がなかなか下りない。そこで田中教授とクライツェル会長は矢口大使にともなわれ時の大統領ドン・カルロス・イバニエス・デル・カンポ将軍に接見した(1958年1月23日)。ここで大統領に渡したのが石井副総理からの親書で、スペイン語で書かれていた。全文に目を通した大統領は協力を約し、別れ際に登頂成功の暁には報告に来るように言ったとのこと。アレナレス岳の初登のあとの4月2日、日本・チリの全隊員はそろって大統領に謁見して合同登山の成功を報告したというエピソードが残っている。

なお、筆者が参加した'60遠征の時も矢口大使は在任中であつた。我々も日本とチリ合同遠征という仕組みでの遠征の遂行に必要な両国間の折衝や装備品の通関等では大使館関係者の援助を受けた。三つの山域に参加したチリ側メンバー全員と共に大使館での大使夫妻主催のパーティに呼んでもらい、楽しく過ごした思い出が残っている。

### 3. 60年レビューでは

#### 1) 合同遠征の成果の公表に問題はなかったか

'58/'60遠征の成果の報告はそれぞれの国で別個に行われている。'58遠征の場合、日本側は日本山岳会の山岳58年、チリ側では連盟年報 *Anuario 1957-58* であつた。前者をチリに送っていないし、日本側では後者を受け取った記録はあるが、同誌に掲載の E.ガルシア執筆の報告書を関係者が解読・参照した形跡はない。今回のレビューでは同記事を訳出したが(文書'58A/補注 B)、日本側にはチリ側の抽出した重要指摘を汲み取れていない。今回見つかった最も重要な問題点はアレナレス岳の第3登が主要山岳誌の報道で欠落していることであろう(次項参照)。

#### 2) アレナレス岳の第3登パーティへの登頂後の処置は適切だったか

パタゴニア北氷陸横断を1963年に成功させた英国人 E.シプトンが横断中に登ったアレナレス岳の登頂を第3登と *Alpine Journal* に寄稿したため、1958年3月9日の第3パーティ(前田を含む)の登頂がパタゴニア登攀史上で無視されることになったのである。本件は今回のレビューで見つかった問題点で、合同遠征の総括とプレスリリースに関する反省点であろう。詳細は'58文書 A.1.3.2 & 4 を参照願う。

#### 3) 遠征の成果は適切に継承されたか(日本側の場合)

アレナレス岳の登頂で終止符を打った'58遠征のあとに残った ACKU の課題として、当時田中 薫教授は同岳西方の太平洋岸との間に広がる氷原の踏査を指摘されている。

1960年代後半の ACKU 遠征研究会のテーマとして取り上げられた記録が残っているが、それ以上の進展はなかった(文書'58A.2.1/補注 C)。ACKU の氷河対応は大きく遅れ、当時の文部省の援助も得て各大学が共同で実施した GRPP プロジェクト(パタゴニア氷河研究/科研費補助)に参加できていない。なお、六甲学院山岳部 OB が中心になったパーティが1968-69年に南氷陸横断に成功し英国の山岳誌に公表されているが、きっかけは神戸大学の高木正孝部長が同校に招かれて行ったパタゴニア登山報告会だった

とのこと（成瀬謙二/Net 記事）。’58 遠征の後 ACKU では同地域は対象から消え去っていたのだった。

#### 4. むすび

##### 1)遠征アーカイブまとめ

今回のレビューの過程で収集した資料類は 2 冊のファイルにまとめ ACKU に保存するよう寄託した(写真)。この中にはチリ側から提供された約 150 葉の登攀中の写真が収録されている。なお、’58 遠征の写真類一切は毎日新聞社で保存されたことになっているが、今回その現物は確認できていない。

##### 2)チリの山への新しい取組み

季節が日本と真逆の関係にあるチリの山には 60 年前とは異なった新しい活用が考えられる。例えば・  
ーチリ中央アンデスでの若手 OB と山岳部員のトレーニング（日本の夏休みの活用）

’60 遠征で入山したイエソ 谷を北限とし、’58 遠征の時に日チ隊員がトレーニングのため入山したロバルデス山塊(DAV のヒュッテあり)を南限とするチリ・アンデスの首都圏山域での山スキーと氷雪技術の訓練、’60 遠征の第 1 山行で登ったベジョ氷河沿いの 5000m 級やマルモレーホ(6100m)山塊でのスキー登山と国境稜線までクライミング etc

##### ーパタゴニア北氷陸のアレナレス北峠の踏査

北氷陸への東側からのアクセスは近年著しく良くなったと報じられている（安仁屋教授の報告等：’58 文書 A/C2.4.3/2ndGRPP1985/86/東側氷河源頭から北氷陸に入り西岸までの往復 60km/日のスキー）。

一方、’58 遠征のアプローチに使ったコロニア湖が冬期に凍結しなくなったとの報告がある（’58 文書 A/補注 C.3）。これにより’58 遠征と同じ南からのアレナレス北峠への登山が可能になった。アレナレス岳北面(’58 文書 A 補注 C に写真あり)やガルシア峰(仮称)の偵察等のため冬期のパタゴニア入山を考えてみるのはどうだろうか。

なお、チリでは’58 遠征に参加した A.ヤーネッ(96 才/医師)と K.クラウセン(87 才)がチリ側メンバーとしての’58 遠征の回想をまとめているとの二ニュースが届いている。

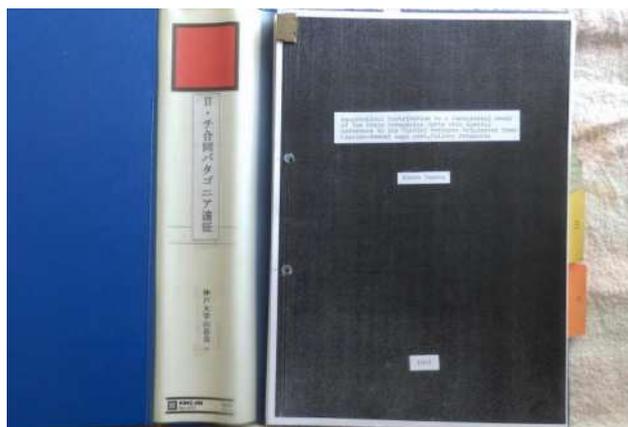


写真 [’58 遠征 資料ファイル]

’58 遠征の 60 年レビューで収集した資料一式(’58 文書 C を含む)が入っている。写真(上)は’58 文書 A 補注 A に紹介した田中 薫教授の理学博士請求論文(’58 文書 C Part 1.6)であり関連論文と共に収録した。

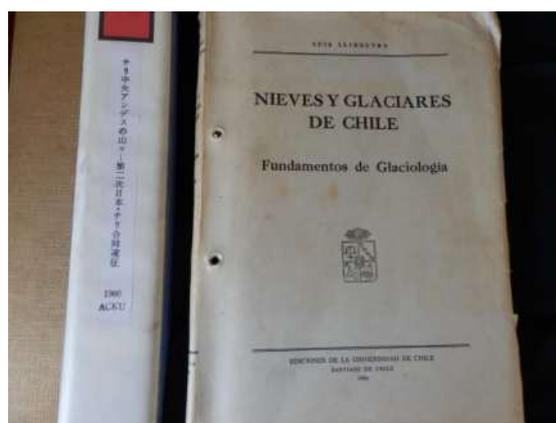


写真 [’60 遠征 資料ファイル]

’60 遠征対象 3 山域での登攀とその記録等に加えチリ側遠征報告書全文を電子媒体で収録した。写真(上)は L.リビュトリー教授‘チリの雪と氷河’で、’58 遠征でも使われ、登路決定のための主要資料であった。

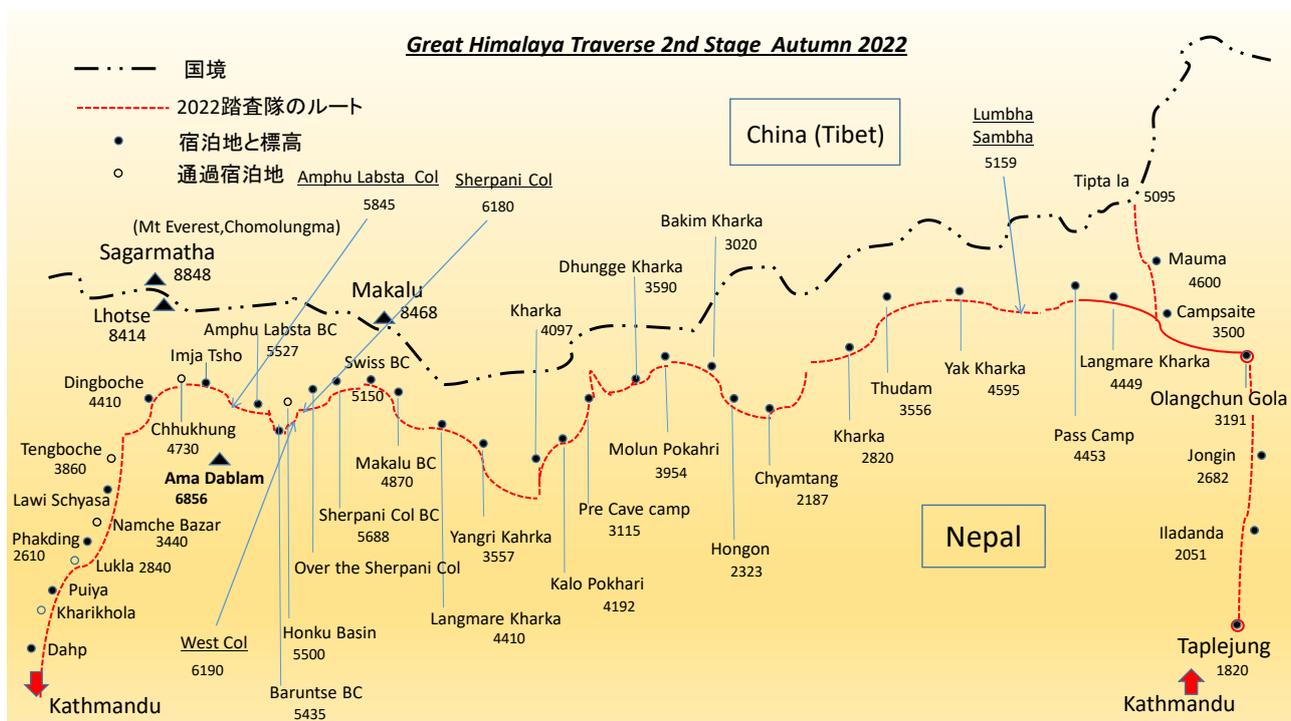
# 日本山岳会 120 周年記念事業 第 2 回グレート・ヒマラヤ・トラバース

吉井 修

2020 年春の第 1 回グレート・ヒマラヤ・トラバース (GHT) から、2020 年秋、2021 年春・秋、2022 年春と 4 回の機会をコロナ禍で見送ったが、2022 年 10 月 1 日～11 月 26 日までの 57 日間の計画で、ようやく第 2 回 GHT を実行に移すことができた。

第 1 回 GHT はカンチェンジュンガエリア、長期間ヒマラヤを歩く、未踏峰パブクカン (6244m) を目指すという私にとって、未知のことがあった。今回の第 2 回 GHT はルンバサンバ～マカルーエリア、5500m 以上でおよそ 1 週間行動し、スリーコルと呼ばれる、シェルパニコル (6180m)、ウエストコル (6190m)、アンプラプツァ (5845m) を越えるという、これまた初体験のことがある。自分にとって、初めてのことは、やはり不安と躊躇がある。今回もまた「チャンスがやってきた時には取り越し苦労などせず、勇敢に実行を決意することだ」という西堀栄三郎さんの言葉に背中を押されての出発であった。

全行程の報告は他の場所に譲るとして、ここでは、マカルー BC までの前半戦での山場・「ルンバサンバ峠 (5159m) 越え」と後半の正念場・「スリーコル越え」について、主に記述したい。



## 「ルンバサンバ峠越え」

10 月 9 日イラダダ～10 日ジョンギン～11-12 日オランチュンゴラ～13 日キャンプサイト～14 日マウマ～15 日マウマ～ティプタラ手前復～16 日キャンプサイト～17 日ランマレカルカ～18 日パスキャンプ～19 日ルンバサンバ峠越え～ヤクカルカ～20 日トゥダム

今回の隊は、重廣隊長 (74 歳)、藤井正善さん (75 歳)、丸尾祐治さん (77 歳)、私 (61 歳) の 4 人。

10 月 1 日にネパール航空の直行便でカトマンズ入り。ダサイン (ネパールで最大の祭り) の影響で当初の予定より 1 日遅れて、7 日にタプレジュン着。9 日ジープでイラダダの手前まで入り、最初の一歩を踏み出した。11 日にオランチュンゴラ (3191m) 着。ここまでは前回通った道、前回と同じバツィに宿泊。翌 12 日を休養日として、13 日～いよいよ西へ、GHT ルートの前回の続きを歩むことになった。

オランチュンゴラからルンバサンバ峠までは高度順化を度外視すると 3 日半の距離であるが、私達は 1 日歩いたキャンプサイト (3500m) から北へ 16 日までの 3 日間で、一旦 GHT ルートを北へ外れて、ティプタラ (5095m) を往復する計画とした。オランチュンゴラまでは結構な雨が降っていたが、出発の 13 日の朝はちょうどモンスーンが明けたか、快晴になった。村を抜けると通信は繋がらない。タムール川沿いのよく踏まれた道をキャンプサイトへ。ここで一泊し、まず、ティプタラを目指した。テ

イプタラは1912年に西本願寺派の僧侶であった青木文教がチベットに入る時に通過した峠である。テ  
イプタラへの道は中国側から下りてきている車道、但し、実際に車で走るには至難な粗削りの車道で、  
今は車は入っていない。峠そのものはコロナで閉鎖されていて、手前までしか行けなかったが、4000  
mを越えての行動、高度順化には効果があったと思われる。

さて、16日にキャンプサイト3500mに戻り、翌17日～GHTルートをルンバサンバ峠へ向かった。  
17日ランマレカルカ、18日パスキャンプ4595mと高度を上げた。振り返ると登ってきたディンサンバ  
コーラの谷が雄大だ。19日はいよいよ前半戦の山場、ルンバサンバ越えだ。南西方向に雪が残る斜面を  
登っていく。高度が上がって、一歩一歩がしんどい。右手にディンサンバコーラの広大なモレーンを見  
送り、左手後ろ、東の方を見ると白い山が連なる。おおっ、カンチェンジュンガとクンバカルナ（ジャ  
ヌー）だ。さすが、西側からもひととき素晴らしい。11時ルンバサンバ峠（5159m）着。峠は一面の  
雪であったが、堅雪にうっすらと新雪の状態が助かった。頭痛もなく、無事第一関門突破。峠を去って  
4595mのヤクカルカまで高度を下げてテント泊。翌20日朝、昨夕は雲で見えなかったが、西の方、見  
下ろす谷の向こうに三角形の白い山が見える。何とマカルーではないか！ 三角形の美しい姿、向かっ  
て右側、東稜が頂上に突き上げている。1995年重廣隊長率いる日本山岳会隊が挑んだ尾根だ。長大な  
稜線が見えるが、それでも東稜の一部しか見えてないとのこと。この日はひたすら下り、3556mのトゥ  
ダムの村まで下りた。8日ぶりの人里の民家は10軒ばかり。ポーター達が泊まる家を訪ね、村の話  
を聞いた。



トンパを飲む4人（オランチュンゴラにて、左から重廣隊長、藤井氏、丸尾氏、筆者の吉井氏）



1019 ルンバサンバ峠（5159m）



カンチェンジュンガとジャヌー

**21日カルカ～22日チャムタン～23-24日ホンゴン～25日バッキムカルカ～26日モルンポカリ～27日ドゥンゲカルカ～28日ケープキャンプ手前～29日カロポカリ～30日カルカ～31-11/1日ヤングリカルカ～2日ランマレカルカ～3日マカルーBC**

この行程の中のホンゴンとヤングリカルカには、南のヌムからそれぞれ道が通じている。ルンバサンバを越えたトレッカーはホンゴンからヌムに下る。マカルーBCを目指す人は通常ヌムからヤングリカルカに入る。それゆえ、この間のGHTルート歩く人は少ないようだ。この間は山を越え、谷を下っては登るの繰り返し。これがなかなかのスケールでやってきて、これぞ僻遠のロングトレイルという様相。ルートが不明瞭な所もあったし、橋が流れて、数時間に及ぶ迂回を強いられた所もあった。31日にバルン溪谷まで出ると対岸にヌムから北西に上がってきているマカルー街道。そちらはよく踏まれた道。その道と合流してまもなくヤングリカルカに到着した。ヤングリカルカでローカルポター20人を解散。ここからはカトマンズからの7人（ガイド2名+ポター5名）と隊員4名の計11名の登攀態勢で進むことになった。ヤングリカルカから2日、11月3日（歩き出してからは26日目）にマカルーBC(4870m)に到着した。マカルーBCからは1970年に日本山岳会・東海支部が初登攀（マカルー自体は第2登）した東南稜が真近に見えた。せり上がる東南稜の先に天空の貴婦人マカルー（8463m）、さすがの姿であった。



マカルー東南稜

## 「スリーコル越え」

4日スイスBC～5-6日シェルパニコルBC～7日ショルパニコル下～8-9日バルンツェBC～10日アンブラプツァBC～11日イムジャ湖岸

さて、ここからの1週間が正念場のスリーコル越え。その後、1週間でエベレスト街道を下山することになる。

ヤングリカルカで1日休養したので、マカルーBCでは休養を取らず、11月4日出発。バルン氷河のモレーン上を登っていく。高度は5000mを越えて、スイスBCが近づく頃、バルン氷河奥にローツェ、そしてその右奥にエベレストが見えた。私はエベレスト初見参である。この東側からのエベレストを見た日本人はまだまだ少なからう。4日スイスBC(5150m)泊、5日は途中からバルン氷河を離れて、左の谷へ入り、岩がゴロゴロの山腹を縫って登り、シェルパニコルBC(5688m)に入った。高度のせいもあったが、結構な悪路で相当のアルバイトであった。1日休むことになり、7日がいよいよシェルパニコル越えとなった。6日の休養日、キタップ以下4人が偵察に出た。「シェルパニコルまではFIXはない。コルから下りる時、荷物はロープで下す必要がある」との情報がもたらされた。

7日は8時すぎ出発、氷河を右手から登り、雪上に出た所で、アイゼンを装着した。あとは広い雪の谷を前方の鞍部目指して登っていく。背後にマカルーが堂々たる姿で素晴らしい。12:20シェルパニコル下に到着、この時、前日に登ってきたイタリア隊の隊員ら5名が取り付いていた。先行していた両隊のポーターがコルからの荷下しで停滞しているという。30分待って出発、ワイヤーロープにセルフブレイ、FIXロープにアセnderで、一步一步確実に、ゆっくりゆっくり登り上がった。13:30コル上(6180m)に立つと、向こう側、チャムラン(7321m)やバルンツェ(7152m)が素晴らしい。ウエストコルに続く広い雪原に目を見張る。両隊の荷下ろしで渋滞していて、コル上に1時間20分もいた。シェルパニコルの下りはFIXロープ伝いに何とか下りることができたが、荷下ろしの苦勞があり、スリーコルの中で最も通過に時間を要した。全員がコルから下りたのはもう16:30。すぐコル下にテント設営。急激に寒くなり、逃げ込むようにテントに入ったのは17:30であった。

翌8日はウエストコル越え、9:30テント場から10mほど登ると、そこは広大な雪原。ここは全行程中のハイライトといえる場所。背後に越えてきたシェルパニコルとマカルー、右手にバルンツェ、左後ろにチャムランという絶景。まさに空中散歩の感で、私は喜びをとくとかみしめながら歩いた。しかし、昨日の6000mを越えるシェルパニコルの登降で消耗されたのか、最後尾、藤井さんの歩みが遅い。ウエストコル(6190m)は雪原から一段低いようにも見える所で、コルそのものの登りは10mほど。11:15コル上に立った。下りは懸垂下降。重廣さんが「同じようにセットするんだぞ、丸尾さんにも伝えるのだぞ」と言いつつ先行された。徐々に斜度は緩くなったが、50mのFIX3本を懸垂下降で下りた。最後に斜めにブレイのみで1本。これだけの距離を懸垂下降で下りるのは実は初めてのことであった、私は緊張でいっぱい。しかし、ウエストコルを越えた西側も抜群の絶景。アマダブラム(6856m)の威容がひととき目をひく。周囲の絶景に励まされつつ、頑張っ下って、16:50バルンツェBC(5435m)に辿り着いた。バルンツェBCには営業小屋があり、常設のテントも張られていた。私達は自分のテントに泊まったが、食事は小屋のダイニングテントで、小屋のものをオーダー。藤井さんの消耗が激しく、夕食時、明朝起きて、行動することが無理なら、救助ヘリを呼ぶことに決まる。明日を休養日とする選択もあるのではと思えたが、この高度で1日休養して良くなる試しはない、明朝動けないようなら、一刻も早く下りるのが得策という判断であった。結果、翌9日は朝から衛星電話を通じて、救助ヘリを手配、歩き始めて39日目、藤井さんは先にカトマンズへと山を去られた。また、この日の未明、シェルパニコルで先行していたイタリア隊の30歳台ポーターが心臓発作で亡くなるという悲しい出来事があった。やはり、6000mの世界、一つ間違えば、何が起こるか、わからない。この日は藤井さんの撤退とイタリア隊の遺体収容の2台のヘリを見送ることになり、停滞日となった。

翌10日～は3人での行動、アンブラプツァBCまでは、氷河を下り、美しいポカリ(池)のほたりを歩く、なかなかの景色の行程。アンブラプツァは最難関との認識だが、メラピークとアイランドピークの2峰を一気に登る意欲的なトレッカーが通過するという、前2つのコルに比べ、通過者が多い。なので大丈夫だとラムカジが言う。何よりもアンブラプツァを越えたら、あとはエベレスト街道まで駆け下ろすのみ。安全圏に逃げ込める。そう思うと明日が待ち遠しかった。アンブラプツァBC(5527m)にも営業小屋があった。

11日コル目指して8:30にBCを出発。急峻な登りだが、とにかく一步一步登る。コルの登りとしては一番しんどい。FIXロープが張られた岩をアセnderで強引によじ登ると氷河の雪が出てきた。11:20アイゼン装着。装着してから氷頭を横に30分ほど登ると、そこがアンブラプツァ(5845m)であった。休まずに早速下りにかかる。眼の前にバルンツェ、それに続く尾根がぐぐっと弓なりに下がっている。その横を急激に下りていく。少し下って懸垂下降。最後の1本であったが、これまでのどれより、傾斜

がきつい。重廣さんが下りられるのを待って次が私。真っすぐに下りると少しハングして宙に浮いてしまう。「重廣さーん、どこを下りられました?!」と叫びながら、やや左よりに下りて、何とか着地することができた。ああ、助かった、もう大丈夫なんだと安堵感でいっぱいであった。通過者は多いというもの、やはりアン普拉プツァは最後にして一番の難関、これはトレッキングルートとは言えんわなあと言い合った。



マカルー（シェルパニコルに向かう）



シェルパニコル



ウエストコル



アンブラプツァの下り

**12-13日ディンボチェ～14日ラウササ～15日パクディン～16日パイヤ～17日カーレとブクサの間からジープ。**

アンブラプツァを越えてからも長かったが、途中で1泊、12日チュクンを経て、エベレスト街道のディンボチェ（4410m）まで下りた。チュクンの手前、アイランドピークから戻ってくる道と合流すると、そこからは世界のトレkkerがいっぱい。チュクンではウクレレを奏でる西洋女性に目を惹かれた。あとはエベレスト街道。重廣さんが昔の面影全くなしと言われる賑わい振り。私もちょっとびっくり。山小屋やレストランが立ち並び、空にはひっきりなしにヘリが飛ぶ。おびただしい物資がヤクやロバに担がれて登っていく。疲れた体で、でも安全な道ということで、ゆっくり下った。ルクラからの空の便は避けて、ジープに乗れる所まで下って、カトマンズへの人となった。

### 「最後に」

長い山旅を完遂するには、怪我や故障を起こさないことが、まず第一である。前回第1回GHTで、私は重廣隊長が40日に亘る歩行の中で、尻もちはおろか、一度も手をつかれるのを見なかったのに驚いた。私などは1日に1回やそこらは手をついてしまう。今回、私は勝負になるスリーコル越えの前、マカルーBC（計画では歩行28日目、実際には26日目に到着）までの道のりをとにかく怪我なく堅実に歩くことをまず第一の目標とした。元の勤務先のトレッキングの会の仲間が餞別に八咫鳥（ちょうどW杯カタール大会の年でもある）のシューズプレートをプレゼントしてくれた。ありがたいことに、靴紐に通して靴の前部につけたこのお守りは、足を踏み出す度に目に入り、一步一步、慎重に行け、慎重に行けと導いてくれた。結果、40日歩いて、手をついたのは3回、内、尻もちが1回であった。今回も山仲間の応援に支えられてのGHTであったことを記しておきたい。

以上

## 海外登山研究会の実施

山田健

2022年12月12日月曜日にリモートで海外登山研究会を実施しました。

海外登山研究会は、現在は主として現役部員に海外の山へ目を向けてもらうことを主眼に実施しています。ただ2021年3月に対面で実施したのを最後にコロナ禍により実施を見合わせてきておりました。研究会の発想としては「せっかく山岳部に入部したのだから、やり方によってはヒマラヤなど海外の山を目指すことも可能ですよ、知らないで何となく大学山岳部で過ごしてしまうのはもったいないでしょ」ということで、とにかく知ってもらうことが研究会の現在の目的としています。その中から行ってみたいという人が出てくれば、具体的に実施を計画していくような研究会に発展していけばいいと考えています。ですので特に今興味を持っていない人でもとりあえず聞いてみたら、というスタンスなので、今回は山岳部員全員が参加しました。

ACKUでは1986年のクーラカンリ遠征以来、中国登山協会、中国地質大学とは太いパイプを持っており、すべての海外登山はチベット、四川で行ってきました。しかし、今は中国のゼロコロナ政策の影響もあり、あの国の未踏峰へのハードルは非常に高くなっています。そこでちょっと目線を変えて、ネパールの山の勉強もした方が良くと考え、今回の研究会では日本山岳会関西支部、奈良県在住の竹中雅幸氏（京都府立大山岳部OB）を講師に迎えてリモートで実施しました。竹中氏は2016年に関西支部80周年記念登山でネパール北東部にあるナンガマリ2峰（6178m）に初登頂し、2020年3月にコロナ禍の中、マナスルの北にある未踏峰ジャルキャヒマール（6473m）登山隊の隊長として試登しておられ、その他ネパール辺境のトレッキングなどに行かれています。



ジャルキャヒマール



竹中雅幸氏

講演としてはこれら二つの遠征の報告のあと、ネパール登山の実施にあたっての方法、課題などをお聞きしました。なお、ジャルキャヒマールの報告書は下記のURLで公開されています。

[https://drive.google.com/file/d/12DMulmJxR9MzNtg6H5MYbNjLeBSRgzzn/view?usp=share\\_link](https://drive.google.com/file/d/12DMulmJxR9MzNtg6H5MYbNjLeBSRgzzn/view?usp=share_link)

今後、ACKUでネパール登山の機運が盛り上がってきたら指導していただくようお願いしております。

当日リモート参加者

山岳会 井上、居谷、山田、長谷川、松村

山岳部 萩原主将、城間主務、侯、大沢、柳本、大矢、三谷、後藤、小田

## チベット関係書籍の紹介

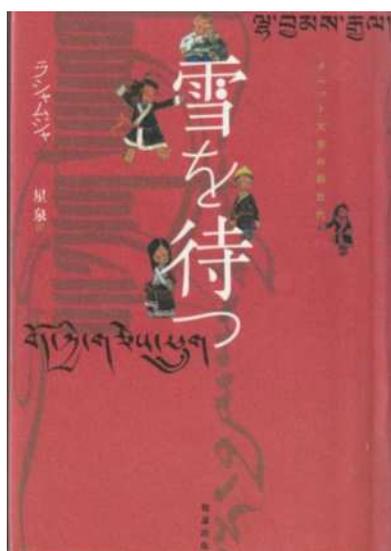
大竹口誠治

チベット語を習い始めて5年以上が経ちましたが、実際に現地に行って使う機会がないため、なかなか、話せるレベルには到達していませんが、最新のチベットを代表する本を紹介したいと思います。入手が難しい本もありますが、図書館で借りられる本もありますので、興味がある方は、お近くの図書館で探してみてください。



### 1. チベット幻想奇譚—著者：チベットの現代作家10名

本書は、昨年の朝日新聞の書評欄で2回、取り上げられた本で知られざる現代チベットの作家たち10名の怪奇幻想的な作品を紹介した選集です。もともと、チベット人はお化けの話が大好きな民族で、決して現実から乖離した世界ではなく、チベット仏教の影響から、日常生活の片隅に、今も現存しているものです。我々、日本人にとっても相通ずるところのある、土俗的で、どこか懐かしい世界が表現されています。苛烈な時代を背景に土地神の血を引く一族の因縁譚あり、怨霊の祟りを巧みに利用してまんまと幸福を得るカップルの物語あり、仏教説話の流れをくむ地獄譚の最新バージョンあり、アルコール中毒患者の妄想世界ありと、現実と幻想の間を行く多彩な物語が語られています。



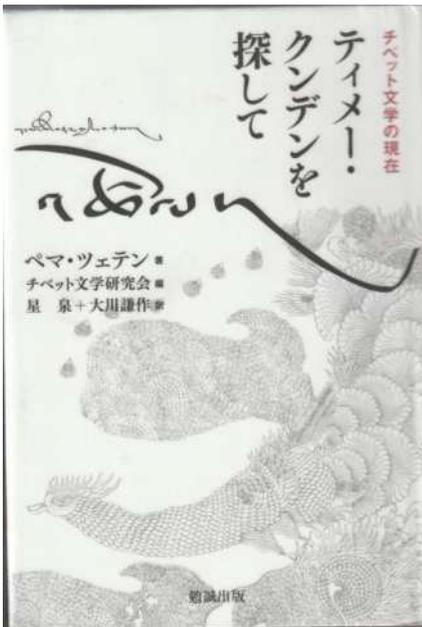
### 2. 雪を待つ—著者：ラ・シャム・ジャ

前半は、1980年代前半、山に囲まれたチベットの片田舎の小さな半農半牧を営む村を舞台に、文革が終結し、改革開放政策が進められる中、大きな変化の起こりつつあった時代に小学校時代を送った子供達が、小さな事件を起こしながら、物語の中を生き生きと駆け回る。叙情的でゆったりとした故郷の情景と子供達の豊かな発想と、彼らを取り巻く多彩な人々との心温まる交流は、チベットらしさにあふれている。物語の後半は、21世紀に入り、大人になった元子供達が、ある者は村以外の場所で、ある者は村から出られないまま、それぞれの人生を歩んで行く。都会で挫折を経験し、苦悩する元子供達の悲しみがくっきり浮かび上がって来る。個人的には、今まで読んだチベットの小説の中で、最も、チベットらしい情景と信仰心を背景とした温かい交流が描かれており、是非、読んで頂きたい本です。

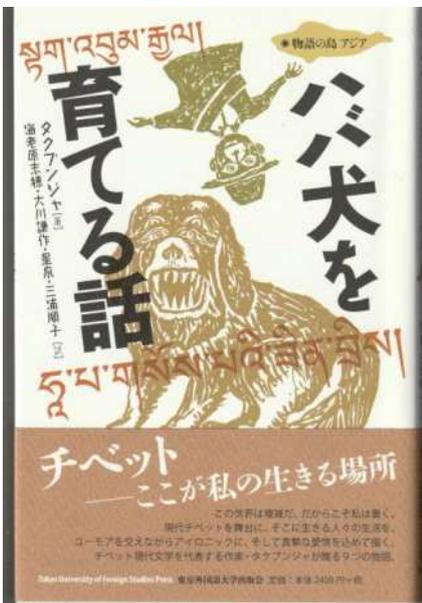


### 3. 路上の陽光—著者：ラ・シャム・ジャ

上記の「雪を待つ」と同じ作者の短編集です。本書のタイトルになった「路上の陽光」は、ラサ近郊の村から町へ日雇いの仕事を求めてやってくる若者たちの物語で、大切な宝物を手にしてはいたのに、そのことに気づかずに永遠に失ってしまう絶望と悲しみが描かれています。陽光はチベット高原の強い日差しを表しています。その他、10歳の少年が山で父の放牧の手伝いをしながら成長していく姿を描いた作品、横暴な同級生に怯える中学校の教室を舞台に、気弱な男の子が勇気を持つにいたる作品、村であった一人の羊飼いになった15歳の青年が生きとし生けるものの幸せについて考える作品等が、収められています。



4. ティメー・クンデンを探して—著者：ペマ・ツェテン  
 本書は、同名の映画の小説版です。映画の原作タイトルは「探す」で、「探す」ことがテーマになっています。物語は、映画監督の一行が「ティメー・クンデン王子の物語」という伝統的なチベット歌劇を下敷きにした映画を撮るため、相応しい役者を探しにチベットの村々を回るという設定になっています。一行は道中、様々な愛のドラマに出会う。とりわけ、一行を感動させたのが旅の案内役として監督達に同行している会社社長の初恋の物語で、還俗した元僧侶である社長が初めて出会った女の子との、切なくも甘く、そして苦い思い出は、耳を傾ける彼らをそれぞれの思い出に誘い込んでゆく。役者を探す旅が、複数の愛のドラマを介して、いつの間に、それぞれの愛を探す旅という意味を帯びるようになる。そして、探すと言う行為を通じて、登場人物がみな何かを失っていることがあぶり出され、誰しも思い当たる喪失の間隔が読む者の心を突き刺すようになります。



5. ハバ犬を育てる話—著者：タクブンジャ  
 本書は、絶大な人気を誇る著者の9つの短編集をまとめた物語で、本書のタイトルになっている「ハバ犬を育てる話」のハバ犬とは小型の愛玩犬のことを指し、このハバ犬が人間と話をしたり、主人の靴を磨いたり、人並みに主人の仕事を手伝ったりするが、ハバ犬は徐々に主人公を踏み台として巧みに利用して、社会的にのし上がって、主人公の秘書にまで求婚してしまうというように、職場における人間関係を、犬という存在を用いて皮肉たっぷりに表現している。その他に、中国の大躍進時代に行われた「犬殺し運動」をテーマにした作品、財政的に逼迫した村の安全のために、自らの体を病みながらも村のために奔走する村長の献身的な姿を描いた作品、放牧している羊の世話をしている主人公である少年が、年を重ねて年取って死んでいくという大きな変化もなく繰り返される牧畜民の生活を描き、輪廻転生を旨とするチベット人の死生観を想起させている。



6. 僕は日本でたったひとりのチベット医になった：著者：小川康  
 本書は、インドのダラムサラにあるメンツィカン（チベット医学暦法学大学）にチベット圏以外の外国人として初めて合格しチベット医となった小川康氏の奮闘記（自伝）で昨年12月の雲南懇話会の講師として登壇されたのですが、私は日程が合わず、直接、話は聞けませんでした。ただ、チベット語を習っている者として、是非、本は読んで置くべきと思い、今回読んだものです。内容は、非常に面白く、時に、チベット医学聖典である「四部医典」の8万字に及ぶ暗唱試験の「ギュースム」に挑戦して、4～5時間に及ぶ暗唱を完了して合格した下りは、感動しました。基本的なチベット語会話1分間分も暗記できない身としては、信じられない集中力だと思いました。留学時の様々な問題を解決されて行くパワーはまったく頭の下がる思いでした。



#### 7. 秘境西域八年の潜行—著者：西川一三

日中戦争下に、軍の命令で蒙古、回教、タングート、チベット、ブータン、ネパール、インド等、各種族の動静を探る目的で潜行したが、終戦で帰国の機会を失い、西域地区を足かけ8年潜行した西川一三氏の手記で、40年前に一度、読んだことがありましたが、下に述べる沢木耕太郎氏の最新刊が出版されたので、再読しました。

手記の内容は詳細に記述されており、潜行当時は、日本人であることを隠す必要があったので、記録を一切残していなかったはずですが、その抜群の記憶力には圧倒されました。

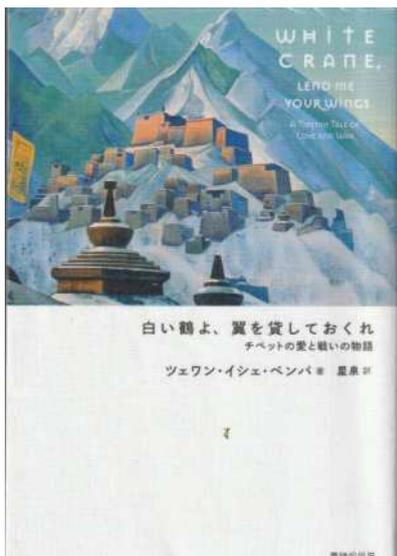
また、ラサに行く途中の川で、ヤクの群れを連れ戻すために、溺れかけたり、インド国境の町のガントーク周辺で歩荷をしたり、ラサで僧侶の修行を行った時に遭遇した滑稽な法会の様子、チベットの旅の途中で盗賊を捕まえた話、インド国内を無銭旅行と托鉢を行いながら移動する様子等、冒険談としても、とても面白いものがあります。



#### 8. 天路の旅人—著者：沢木耕太郎

ノンフィクション作家である著者が、西川一三の著書である「秘境西域八年の潜行」の旅を沢木氏自身の筆で辿り直す本で、帰国後は盛岡市で理美容材卸業を営んでいた西川一三と1990年代の後半に約1年間のインタビューを行い、西川氏の著書に書かれている背景や書かれていないことの聞き取りを行い、1冊の本にまとめたものです。

西川氏の著書をそのまま引用している部分もあり、明らかな間違い（ザリラ峠周辺—ブータンとチベットとの国境付近—からカンチェンジュンガと西の方にナンガパルパットが見えたという記述、ナンガパルパットはパキスタンにあるので見えることはなく、多分、マカルーかエベレストの間違い）もありますが、膨大な西川氏の著書を1冊の本にコンパクトにまとめて、西川氏という、稀有な旅人の人生が表現されていると思います。



#### 9. 白い鶴よ、翼を貸しておくれ—著者：ツェワン・イシェ・ペンパ

著者は、亡命チベット人医師で、原文は英語で書かれた本です。物語の前半は、アメリカ人宣教師夫妻が、今の四川省のニャロン地区に住みついてキリスト教の布教を行うのですが、うまく行かず、むしろ仏教者との哲学的な対話を通じて、チベット文化の奥深さや人々の寛容さに心打たれてしまう。ニャロンは2018年にACKU一行が訪問したカンゼチベット自治区にあり、我々が訪問した甘孜の南側にある新龍市付近と思われます。後半は、宣教師の息子や、ニャロンの領主の息子達、勇敢さで有名なカンパ族の人々が1950年代の共産党軍の侵攻に抵抗して、ゲリラ作戦を展開する等、手に汗握る冒険物語となっています。かなりエロチックな表現や、残酷な殺戮場面等がありますが、500ページという長さを感じさせない本です。

なお、表題の「白い鶴よ、翼を貸しておくれ」は、僧としての生活になじめず還俗したダライラマ6世の詩から取ってきたもので、ダライラマ6世は、酒や行きずりの恋、即興の歌を作って楽しみ、型破りの人物であったが、その人柄と歌がチベットの多くの民に愛されたと言われている。

以上

## 第四章 紀行・随想・活動報告（国内編）

### 東北5座 花の山旅 令和4年7月3日～9日

壺阪祐三

令和4年7月3日から9日まで、秋田県・岩手県・青森県に鎮座する花の名峰5座を巡った。ACKUから同期の田中信さんと鹿児島から有馬さんの二人、それに、ご近所の牛尾さんが参加してくれた。昨年なら高田和三さんの姿があったはずだが。

この時期は本来なら梅雨の真っ最中、コロナの患者も一行に減らない、だけど、花は盛りのはずだ。旅行会社の企画ツアーに乗っかって、往復飛行機・温泉ホテル6連泊の気楽な旅にした。地元のガイドや添乗員を合わせて20人ほどがぞろぞろと連なって狭い山道を歩く山旅だ。

4日は秋田県の森吉山(1454.2m)。数年前から、訪れたことのないこの山が気になっていた。北前船からよく見えて、格好の目印になった山だそうだが、なんと言っても秋田の内陸、ポツンと奥深い位置にあり、なかなか入る機会がなかった。去年の3月には、雪が山ほど積もった季節に、初めて秋田縦貫鉄道の全線を通して乗車し、沿線の打当温泉に1泊、この山のパンフレットなどを入手して一層興味をそそられていたので、丁度よい企画が見つかりこれに乗った。なにせ、ACKUのメンバーの最高齢は83才、平均でも80歳を超えている。登りは、掬や青森トド松の繁る斜面をひとつ飛び、尾根に乗っかるところ標高1160mまで阿仁ゴンドラが連れて行ってくれる。冬には雪のモンスターが見事に連なるそう。そこから頂上までは2時間ほど、ゴゼンタチバナやニッコウキスゲなどの花畑を楽しみながらゆっくり歩く。外輪山の淵を歩く形で、左側は結構切れ落ちているところもある。頂上からは田沢湖が眼下に、頂上は雲の中だが鳥海山や岩手山・白神山地などの大展望を望んだ。帰りも来た道を引き返してまたゴンドラで下った。夕食はなんとフレンチのフルコースが振舞われた。

☆ やっと来た 森吉山に キスゲ咲く

☆ 森吉山 チドリとヨウラク 雷も

☆ 花畑 ホテルフレンチ 赤ワイン(ホテルは雫石プリンスホテル)

高田さんも席に加わってもらって、赤ワインで献杯した。

5日は秋田駒ヶ岳。秋田県側から八合目までシャトルバスに運ばれ、そこから左回りに阿弥陀池にいたり、秋田県の最高峰 男女岳(オナメダケ 1637.1m)の頂上へ。丁度、地元 角館高校生の全校登山の一行と一緒に、山は大にぎわい。ガイドの二人も角館高校の卒業生で、サッカー部やスキー部で鳴らした猛者だったそう。

この山には30年ほど前に訪れたことがあり、つまらない山だとの認識があったが、今回は前と季節が違っていたのだろうか、結構いろんな花に会えて認識を改めた。馬鹿にしてはいけなかったのだ。下りは外輪山の内側の急崖を恐る恐る下り、ムーミン谷・横長根分岐を経て国見温泉へ。通称ムーミン谷では花盛りのチングルマの群落が続き、横長根分岐の手前のガラ場には コマクサの群落まで見られた。雷さんが光り、合羽のお世話になったり、しつこいブヨの群れに悩まされたりだったが、それなりに面白かった。つまらない山の認識から、八合目からツアーを離れて別行動をし、笹森山から乳頭山を目指して歩き、千沼ヶ原を経て滝ノ上温泉に下りるルートにしようかと思ったりしたが、“無理をせずに”が正解だったか。

☆ 阿弥陀池 巡りて夏の ムーミン谷

☆ チングルマ 褥に花の 夢を見る

☆ 合羽着る 横長根には ブヨが飛ぶ

6日は休養日。この日は、タクシーを雇って、4人ともまだ訪れたことのない 小岩井農場を訪れた。その広大さに驚き雄大な気宇と周到さに感動した一日になった。草茫々の採草地に立つ、高名な一本桜にもお目にかかった。堂々と立ってはいるとは言うものの、何せ葉桜、雪の野に岩手山を背に昂然と立つ姿とはちょっと違う一本桜だった。

☆ 小岩井の 一本桜は 葉桜に

7日は盛岡市近郊の 姫神山（1123.6m）、名前も姿も大層優美だが、古くからの修験信仰の山と言い、なかなか骨がある。この山も初めて登る山だ。今日はバスもゴンドラも無い。一本杉登山口から登り、城内口を下る。キリッと裾野を引いた独立峰で、頂上からの眺めは抜群だ。頂上は今日も雲の下だが、西に岩手山・八幡平、南に早池峰山などが堂々たる山容を広げている。しかし、標高は争えない、花はやや淋しい趣だ。

☆ 姫神山 南にどっしり 早池峰山

8日は高速道道路を3時間も走って青森県に入り、八甲田大岳（1584.5m）を目指す。黒石インターの手前付近では、岩木山（1625m）の勇姿が近々とそびえている。ここでも1605mの高みまでロープウェイが運び揚げてくれる。赤倉岳・井戸岳を経て、大岳避難小屋から大岳山頂を往復、上毛無岱・下毛無岱を通過して酸ヶ湯温泉に下る約6時間の行動だ。

この山には、スキーを担いで冬に、信さん達と秋の紅葉の最盛期に一度、妻のヨシ子と丁度7月の花の時期に一度歩いている。今回で4回目になるが、それぞれの趣が違った。スキーの時期には雄大な樹氷モンスターに会えるし、上毛無岱に掛る急坂付近から見下ろす紅葉は天下一品・日本一の見事さだったと思っているし、ヨシ子とはちょうど55年前の新婚旅行の初日に歩き、下毛無岱の全面をチングルマとヒメサクラの白い花が埋め、風にそよぐ中を歩いた。それぞれに一番見事な時期に巡り合ったが、今回はチングルマは咲き終わって、薄茶色の髭もじやの姿のものしか見なかった。どうやら、55年の間に季節が10日から20日ほど、進んだようだ。

☆ 大岳は 霧に吹かれて 見え隠れ

☆ 夏風に 背押され下る 毛無岱

☆ 新婚を 偲ぶよすがや 髭チングルマ

9日は、帰りの飛行機の飛ぶまでの3時間ほどを活用して、八幡平（1613.3m）に遊んだ。ここもアスピーデラインと言う山岳道路を使って、1540mまでバスが上がる。さすが東北の高山、キヌガサソウの群落など10種類ほどの花に出会えた。

☆ 岳樺 立ち並ぶ道 アスピーデ

☆ 霧流る 八幡平にも 花々が

今回の花の旅では、これまでにでてきた花の他に、ヒメウスユキソウ・エゾツツジ・コバイケイソウ・ヨツバシオガマ・シラネアオイ・ムラサキヤシオツツジ・ベニサラサドウダン・イワカガミ・ハクサンシャクナゲ・イワブクロ・マルバシモツケ・ワタスゲ・ミヤマオダマキなどなど30種類を越える花に出会えた。エゾツツジは駒ヶ岳が南限とか、知床半島の尾根を縦走した時の見事な群落を思い出す。イワブクロも北海道の樽前山などでよく見た花だ。良い季節に良い山に登り、期待通り大いに楽しめたと言えよう。また、私たちの前の週も東北地方は大雨、帰った次の週も雨続き、私たちが歩いている週だけ晴れ間がのぞいた。晴れ男の面目がまだまだ有効なもの嬉しい誤算だった。お陰で、体力の衰えは隠せないものの（有馬さんは別）、快適で楽しい旅ができた。



森吉山 午尾氏撮影

森吉山



ムーミン谷のチングルマの群落 午尾氏撮影

ムーミン谷のチングルマの群落



阿弥陀池とオナメ山



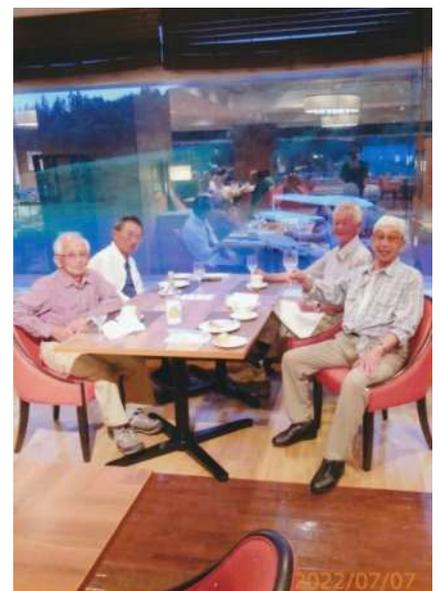
コマクサ



キヌガサソウ



シラネアオイ



高田和三氏に献杯  
(左から有馬氏、牛尾氏、  
壺阪氏、田中氏)

## 秋晴れの蓼科山・八ヶ岳登山

山形 裕士

私は退職するまでの数年間、大学の春休みと夏休みを利用してヒマラヤやヨーロッパアルプスなど海外の山のトレッキングを楽しんできましたが、この3年はコロナ禍でそれが叶わず専ら国内の山に登っています。今年（2022年）、日本人男性の平均健康寿命（72.68歳）に達したので、歩けるうちにできるだけ回っておかねばと急かされるように全国の山に出かけています。

2022年は、3月に乗鞍高原スキー、7月に南東北（蔵王山、西吾妻山、磐梯山、安達太良山）、9月に燕岳、10月に蓼科山・八ヶ岳、11月に九州（阿蘇山、祖母山、九重山）などに登りました。乗鞍高原スキーと燕岳は山岳部同期の仲間と行きましたが、その他は夫婦での登山です。夫婦の登山は単独行に似て誰に気を使うこともなくマイペースで自由気儘に登れますし、登山の思い出は夫婦共通の心の財産にもなっています。レベルが違いますが、「ソロでの登攀は充実感が違う」と語る無酸素・単独・8000m未踏壁の人生クライマー山野井泰史氏でさえ何度も妙子さんと同行しています。東北山行は悪天続きでほとんど修行のようでしたが、雨に濡れた高山植物を沢山見ることができました。また、蔵王温泉や岳温泉などの東北の素晴らしい温泉にも巡り会えました。燕岳と八ヶ岳はずっと快晴で山上からの大パノラマを満喫しました。九州の3山も快晴に恵まれ雄大な景色と遅めの紅葉、大分と熊本の素晴らしい温泉を楽しみました。その他にも兵庫県内の千ヶ岳前後の山々のハイキングは一年を通して楽しんでいきます。今回大竹口編集長のご依頼を受け、これらの山行の中から10月中旬の蓼科山・八ヶ岳登山の思い出話をさせていただきます。

丁度コロナの第7波の流行が収束に向かい全国旅行支援が開始されたこともあり、この機を逃がしてはならじと急遽山を探し、対象を蓼科山と八ヶ岳に決めたのはいつものように妻です。初日に蓼科山往復、翌日から1泊2日で南八ヶ岳の赤岳、横岳、硫黄岳縦走の計画です。ACKU諸兄はこれらの山に登られた方が多いかと存じますが、私達にとっては初めての山でした。現役時代も八ヶ岳は社会人山岳会の山という印象が強く、登山対象に含まれていなかったように思います。

10月18日、神戸の自宅から車で名神、中央道を経て諏訪湖まで移動。道中、最高気温は24℃と暑く、目にする山々や街路樹の葉は濃い緑色でした。しかし、諏訪ICを出て白樺湖に向け標高が上がるにつれ気温が急激に下がり、ついには10℃を下回りました。それとともに樹木の葉の色が黄色や橙色にどんどん変化していく様子は圧巻でした。この日は白樺高原スキー場のホテルに宿泊しました。

10月19日、晴。蓼科山登山。

蓼科山2,531mは八ヶ岳連峰の北端に位置し、諏訪富士とも呼ばれる美しい山容の典型的コニーデ型火山です。そのなだらかな山容から初心者向けの山とされており、私達も中級者向けの南八ヶ岳登山の足慣らしのつもりで北面の七合目登山口から最短コースを往復することにしました。朝8時に到着した登山口の蓼科神社の鳥居前には、平日にも関わらず既に多くの車が駐車していました。日頃、兵庫県内の山々で誰にも合わずに静かなハイキングを楽しんでいる我々は、登山者が多い山を避けるようにしていますが、百名山は登っておきたい良い山が多いので致し方ありません。外気温は2℃でした。前夜ホテルで蓼科山と八ヶ岳に初冠雪が観測されたことを聞いていましたが、樹林帯に入ると上から雲がパラパラ降ってきました。森のあちこちで木々の葉に積もった雪が朝日を浴びて溶け、輝く霰となって落ちていたのですが、幻想的な風景でした。脇に続く熊笹にもうっすらと積雪がありました。私達にとって今シーズンの初雪です。シラビソを中心とした針葉樹の森に苔が生い茂る中、2時間ほど登るとやがて稜線上の古びた山小屋、蓼科山荘の前に出ました。

標準コースタイムでは蓼科山荘から頂上まで往復約1時間なので高を括っていましたが、山荘から上部の道はそれまでと様相が一変し、黒い滑らかな大きな石（岩）がゴロゴロと積み重なった急坂で予想外の悪路でした。沢でもないのにどうしてこんなゴロゴロ石の坂道ができたのか不思議です。若者のグループや



写真1. ゴロゴロ岩の蓼科山頂

単独行の山ガール達はゴロゴロ石を大股で飛ぶように登っていきます。しかし、重い荷物（といっても10 kg あるかないか）を背負い、恐ろしくバランスの悪い年寄りが、滑りそうな岩の上をひよひよいといけるはずもありません。万一、転倒・落下して頭でも打ったら一大事です。一步一步、岩と岩の間に足を置く場所を探しながら両手も使って登りました。ようやく到着した蓼科山の広い頂上も大きな黒いゴロゴロ岩だらけで、近くにある蓼科神社の奥宮や方位盤を巡るにしても歩きにくい所でした（写真1）。晴れていた天気も、山頂付近はガスに包まれ、白樺湖や霧ヶ峰が見えるはずの展望も利きませんでした。それに同調して気分も晴れず、冷たい強風の中、誰かが作った小さな雪だるまとともに登頂写真に収まって早々に下山にかかりました。問題の蓼科山荘までの滑りやすいゴロゴロ岩の急な下りは、ただでさえ膝のパネが利かず、登りよりも下りが苦手な私にとって一層厄介でした。とにかく転ばないように注意しビスタリビスタリと呟きながら下りました。登りよりも下りが強いカミさんも何とか大きな転倒をせずに蓼科山荘に到着。ホテルで貰ったクーポンを利用して頂いた豚汁はボリュームたっぷりでも美味しく冷えた体が暖まりました。15時に登山口まで下山した時にはすっかり快晴となり、真っ青な空のもと紅葉に囲まれた女神湖や白樺湖を眺めることができ、登頂の達成感もあって気分爽快でした。その日は八ヶ岳山麓の諏訪郡原村にある樫の木荘に宿泊しました。八ヶ岳登山者がよく利用する宿ですが、リニューアルされていて食事美味しく、樫の湯という温泉に隣接する良い宿でした。

10月20日、快晴。赤岳山荘から赤岳登山、赤岳展望荘泊。

足慣らしのつもりで登った蓼科山でしたが、上述のようにゴロゴロ岩の登降でしんどい目に遭い、脚が浮腫んで一晩では疲れがとれませんでした。カミさんも似た状況でしたが、予定通りこの日は八ヶ岳の赤岳を目指しました。宿の朝食をキャンセルして7時に車で出発しようとしたのですが、フロントガラスに霜がびっしりと張り付いてまったく前が見えません。宿でレジ袋に入れた熱湯をいただき、その袋をフロントガラスに押し当てて霜を溶かしました。これはうまい方法です。美濃戸口登山口から赤岳山荘（標高1,700 m）までの道路は、自己責任の悪路でしたが、SUV車なので何とか徐行して底を擦ることなく辿り着きました。赤岳山荘で二日分の駐車料金を支払い、7時50分に出発しました。

北沢の車道と分かれて南沢沿いの森の中の道を辿り、行者小屋（2,354 m）までは3時間ほどかかりました。小屋に近づいて八ヶ岳の稜線を仰ぎましたが、今日中に辿り着けるのだろうかと不安になる高さでした。八ヶ岳は特定の一峰を指して呼ぶ名前ではなく、「八」は「たくさん」という意味で、標高3,000 m未満の山々が約30 kmにわたって連なっています。蓼科山のようなコニーデ型火山ではありませんが、約200万年前から何度も噴火を繰り返して形成されたといわれています。

行者小屋で持参のコンビニおにぎりを食べ、11時25分に小屋を出て南に向かい霜柱を踏みながら15分ほどで阿弥陀岳分岐点に到着。ここから赤岳と阿弥陀岳を結ぶ稜線に突き上げる文三郎尾根に取り付けました。この尾根はよく整備されていますが、長い階段や梯子が何カ所もあり、ともしんどい登りでした。今夏、北アルプス三大急登の一つ、燕岳の合戦尾根を登りましたが、それと比べても文三郎尾根は、距離は短いものの傾斜はきついように感じました。喘ぎながらも一気に高度を稼ぐことができ、振り返ると槍穂高、表銀座、鹿島槍、白馬三山など北アルプスの大パノラマが快晴の青空に見渡せ、疲れも忘れました。これまで北アルプス、中央アルプス、南アルプスの甲斐駒ヶ岳などから何度も眺めた八ヶ岳ですが、逆から見るのは今回が初めてです。やがて西方に厳めしい山容の阿弥陀岳2,805 mが近くなり、北方遠くには前日登った蓼科山が平らな頭を硫黄岳の西稜越しに覗かせていました。赤岳や横岳の西面は赤っぽい岩肌が剥き出しの荒々しくゴツゴツした壁になっています。赤岳という山名は酸化鉄の赤い岩肌に由来しており、この赤い岩肌や岩稜こそ南八ヶ岳の特徴的な景観です。私は赤岳や横岳西面の登攀ルートに詳しくありませんが、どこを登ってもガレ場で落石が怖そうでした。いつの間にか横岳の大同心も下に見えるようになりました。



写真2. キレット分岐から鎖場が続く。

13時過ぎに阿弥陀岳と赤岳を結ぶ稜線に出ました。行者小屋の赤い屋根が下の方に小さく見えます。この赤岳西陵は赤岳に真っ直ぐ突き上げていますが、道は西陵を越えて赤岳南面に回り込み、赤岳と南のキレット・権現岳 2,715 m を結ぶ赤岳南稜に出てから北上して赤岳頂上に至ります。南稜上のキレット分岐からいよいよ鎖場と梯子が連続する岩場の登りになりました(写真2)。トレッキングポールをザックに収納し、鎖が滑りにくいように手袋を着用しました。岩場は両手を離しバランスを崩すと危険ですが、三点支持を守っている限り安全です。なるべく鎖に頼らず自身の脚にしっかり体重をかけて登るうちに昔の岩登りの感覚を思い出し面白くなってきました。しかし、若い時とは違いすぐに息が上がるので、その度に立ち止まって呼吸と脈拍を整えてからまたゆっくりと登り出します。高齢者のための鎖場難易度ランキングというものがあるとしたら、八ヶ岳の鎖場は槍穂や劔の鎖場に続く第一級レベルに違いありません。高度感、恐怖感、達成感を味わうことができます。カミさんもバランスを取りながらしっかりついて来ていました。やがて14時過ぎに八ヶ岳最高峰赤岳頂上 2,899 m に到着。富士山、北アルプス、御嶽山、中央アルプス、南アルプスなど 360° の壮大なパノラマを飽きるまで眺めました(写真3)。この日は頂上から北に延びる鎖付きの岩稜を 180 m ほど急下降した所にある赤岳展望荘に宿泊しました。名前の通り展望が素晴らしい山小屋で、夕食をとりながら北アルプスや富士山の夕焼けを日没まで眺めることができました。北方には横岳西面の赤っぽい岩肌がアーベントロートで一層赤く輝いていました。展望荘はベッド付き個室スタイルの快適な山小屋でしたが、個室もベッドも日本の山小屋では初めての経験でした。



写真3. 赤岳山頂と富士山

10月21日、快晴。横岳、硫黄岳を経て美濃戸口に下山。

朝6時前に小屋から富士山の左に昇る御来光を仰ぎました(写真4)。快晴の雲一つない御来光は久々でした。西風が強い中、7時前に小屋出発。この日は横岳、硫黄岳に登り、赤岩の頭から赤岳鉱泉に下りて美濃戸口に下山の予定です。地蔵尾根が突き上げる地蔵の頭 2,716 m に7時過ぎ到着。赤い帽子と涎掛けのお地蔵さんが祀ってありました。地蔵尾根の岩稜も結構厳しそうでした。ここから横岳までの岩稜には鎖場や梯子が何カ所もあり、時々滑落事故が起きる所です。しかし前日赤岳の岩場で鎖場や梯子に慣れたせいか、スムーズに歩けました。後ろを振り返ると赤岳北面の勇姿が圧巻で、その左に富士山がくっきりと見えました。横岳は南北 800 m ほどに及ぶ岩稜の連なりからなる山で、その中の小さな突起に山岳宗教時代の名残をとどめる山名が一つ一つ付けられています。標識が少ないので実際どの山に登っているのかわかりにくかったですが、石尊峰 2,810 m を経て三叉峰 2,825 m に8時半、さらに 2,826 m 峰を経て横岳(奥ノ院) 2,830 m に9時に着きました。快晴の空の下、槍・穂高から北アルプスの稜線が遥か北の方まで見渡せました。振り返って阿弥陀岳から赤岳に伸びる稜線に突き上げる文三郎尾根を横から眺め、登ってきた道が如何に険しい登路であるか再確認できました。その阿弥陀岳と赤岳を結ぶ稜線越しには南の権現岳が、さらにその後ろには甲斐駒ヶ岳、鋸岳、北岳などの南アルプスも望めました。足元には大同心と小同心の岩塊の間にこれから行く赤岳鉱泉が小さく見えました。いつまでも眺めていたい雄大な景色です。



写真4. 赤岳展望荘からの御来光

横岳以北の稜線は険しい岩稜がほぼなくなり、強風の中、緩やかな下りの赤茶けたザレ道をゆっくり

下るとやがて 10 時に硫黄岳山荘 2,653 m 到着。昭和 61 年 8 月に浩宮殿下御宿泊の記念碑がありました。昼食後、なおも左側のジョーゴ沢火口から吹き付ける強風の中、11 時に北面の爆裂火口縁の硫黄岳山頂 2,760 m に到着しました。硫黄岳は南八ヶ岳の最北端の山ですが、赤岳や横岳などの峻険な岩稜の山とは違い、のびやかな稜線と丸みのあるピークを持つ火山です。頂上周辺は広く、北方には南八ヶ岳の荒々しい岩稜とは対照的ななだらかな山々や森がゆったりと広がる北八ヶ岳が、さらにその北には蓼科山が望めました。

硫黄岳から南西に進路をとり赤岳鉱泉に下山しました。途中の赤岩の頭 2,656 m からは、行者小屋から文三郎尾根、赤岳、横岳の岩稜、硫黄岳と歩いてきた道を見渡すことができ、満足感に浸りました（写真 5）。そこからひたすら下り、赤岳鉱泉 2,215 m に 13 時過ぎ着。横岳の岩峰群を仰ぎました（写真 6）。赤岳鉱泉から沢横の木道を下り、堰堤広場付近からは長く単調な林道を紅葉を眺めながら歩いて赤岳山荘横の駐車場に下山しました。翌日は豊橋に住む長男一家と富士見高原で落ち合い、天空カート、アルパカ牧場、山梨県立まきば公園などを回って孫と遊び、秋晴れの八ヶ岳山麓を満喫しました。山梨県側から眺めた赤岳の勇姿はあのアイガーにも似て一層迫力がありました。



写真 5. 赤岩の頭から望む阿弥陀岳(右)、赤岳(中)、横岳の岩稜(左)。



写真 6. 赤岳鉱泉より横岳の岩稜を仰ぐ。左は大同心。

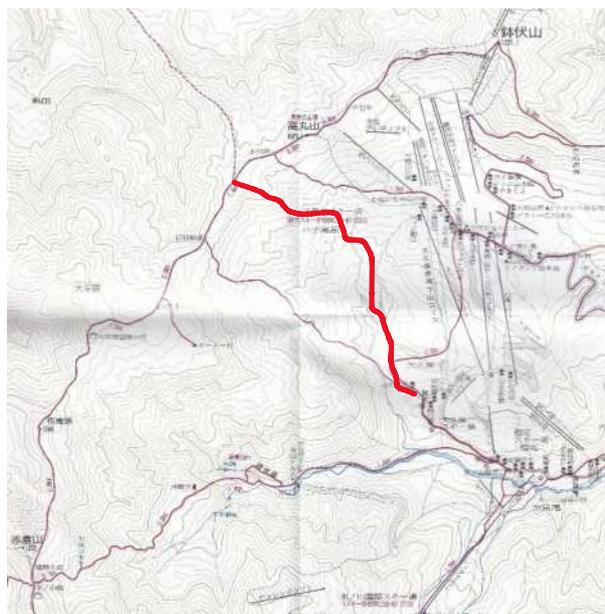
## 2022年春の氷ノ山2題

山田健

### ① 小代越から大久保集落へ

2022年2月26日 メンバー 居谷千春、橋本昭（関大山岳部OB）、山田健

前日からねむの木山荘に泊まって、晴れと予報が出ていた26日にどこに行くか地図を前にいろいろと候補コースを相談し、結局橋本さんがかねてから狙っていた小代越の先から大久保集落へ滑り込むルートに行くことに決まった。朝、和光さんに見送られてハチ高原を出発し小代越に向けて出発。今シーズンはラニーニャ現象とかで豪雪になっており、小代越への登山道からすぐ南に見える尾根には真っ白に雪が付いておりコンディションがよさそう。当初、最低鞍部（1019鞍部）から夏道沿いに滑ろうかと相談していたが、偵察の結果どうも樹林の中のトラバースが多くもう一つということで、登っているときに見えていた尾根を下ることにした。小代越のすぐ南のピークから派生している小尾根で最初は緩く、中間部で急斜面になって最後は沢に落ち込んでいる。中間部は一部で積雪の重さで滑ったようなクレバス状のところがあったが、問題なく迂回でき、末端部で左の沢に向けて滑り込んでいく。この間すごく快適な滑降。沢に降りて傾斜が緩くなり沢沿いに下っていくと、古いリフトの鉄塔が現れた。かなり昔にはこの辺りもゲレンデだったようだ。さらに滑っていくと自然と台地状の尾根上に出る。このまま台地を滑っていくと下流で合流している左右の沢のどちらかを超えないと先に進めなくなるので、深くなる前に左の沢を超えようかと思ったが、台地の滑降が快適そうなのでそのまま下っていく。すると、ちょうどおあつらえ向きに橋と林道が左に見えた。この橋を渡って林道を少し下ると倉庫が現れて、最後に除雪された大久保集落の中の道路に出た。ルートを探しながら滑ってきたので、滑り出しからは2時間くらい。次はたぶん1時間くらいで下りつけそうな手軽なルートだった。ただし雪が少ないとクレバスのところで苦労はすると思われる。大久保からリフトに乗ってハチ高原へと戻った。



ルート図



沢に下り上部を振り返る

中央に見える尾根を下った。遠くの山は鉢伏山、手前に高丸山。最低鞍部の手前から





台地状のところを下る



最後に大久保集落に出る

## ② 千本杉ヒュッテ掘り起し山行

2022年3月8日～9日   メンバー 居谷千春、山田健

あまりにも豪雪なので、ヒュッテが心配になって見に行ってきた。また、その次の週末に他の山岳会から使用願いが出ているので、不慣れな人達だと入口がふさがって入れないこともありそうだった。

東尾根から登り、一の沢の壁を登り、ヒュッテに向けてトラバースするまではいつも通りであった。ところが、いつもなら見えるヒュッテの屋根がいつこうに見えない。その代わりに雪の小山が現れた。近づくとかろうじて裏側の二階が少し雪面上に出ているだけで、大部分が小山のようにすっぽりと雪に覆われていた。長年ヒュッテに通っているがこんなことは初めてである。二階の裏の戸から入ろうとしたが、凍り付いてシャッターが動かない。仕方なく表のテラスの屋根裏に潜り込むために、こちら辺かと検討をつけて雪洞堀を始めた。しばらく掘るとぴったりで屋根裏の空間が現れた。しかし、テラス上に2mほど雪がたまっていて、入り口を完全に掘り出すまでには1時間以上の労働が必要だった。ようやくヒュッテに入れても1階の窓は到底掘り出せないで闇の中、ストーブも換気できないのでガス中毒に気を付けてその日は泊まった。しかしこの雪の中、ヒュッテの有難みは今更ながら痛感した。

翌日は快晴の中頂上へ。千本杉は雪が付いてモンスターになっていた。頂上から居谷さんがかねてから気にしていた「ダイレクト尾根」を偵察。ダイレクト尾根は頂上から北に向けての広い尾根で、いつもぶん回しに行くときに最初の滑り出しの尾根である。ただし、見たところこの尾根を下降しても最後は不動滝に阻まれるため、流れ尾根にトラバースしなければならないので滑降の快適性は疑問がある。その後、東尾根を下って帰った。



ヒュッテは二階裏側のみ出ている



検討をつけて掘り始める



テラス屋根裏の空間を掘当てる

5月になってヒュッテの管理業務に行った土山さんがテラスの床が雪の重みで抜けていたことを発見し、正垣木材に修理をお願いした。最近は雪が少ないことが多かったが、このシーズンは記録的な大雪だったのである。



上の千本杉を行く居谷さん



ダイレクト尾根を偵察



頂上からの三の丸

## 飯豊山 悄然紀行

吉原 敏明

飯豊山に登ろうと思った。

心を奮い立たせる岩稜も良いが、広葉樹やブナの樹林を穏やかに歩くのも悪くない。

ただ、数多ある山から飯豊山を選んだのはいつもの気まぐれと思いつきのせいだろう。

東北の山は久しぶりだ。なにしろ大学1年の夏合宿後の分散山行で以東沢から以東岳に登って以来だから45年ぶりになる。(メンバーは中川さん、谷本さん、同期の野口君、私であった。)

実は9月の連休で登る予定だったが台風により10月に延期した。(この時は氷ノ山に登り溜飲を下げた。)

10月になると小屋は積雪期体制で無人になる。装備も増える。食料は朝、夕はアルファ米、昼はクッキーとドライフルーツとした。アクセスは夜行バスを使う。最近全国各地に路線があり座席も快適だ。

10月8日(土) 大阪発福島行の夜行バスに乗る。

10月9日(日) 早朝、福島駅着。新幹線で米沢へ。米坂線に乗り換え今泉駅に。8月の豪雨で不通になっており代替バスで羽前椿駅に着く。ここでタクシーを呼ぶ。1時間半待ち乗車50分で大日杉小屋に到着する。ここは管理人が駐在している。何気なさを装い熊について聞いてみる。「いっぱいいるよ。だけど最近は登山者で見たという話は聞かないね。どっちかというところに出ることが多いね。」と返事。安心して良いのか良くないのか、ともかく久しぶりに熊に出会った登山者にならぬことを願った。

宿泊者は私一人。

晩御飯のわかめご飯を戻し食べる。不味い。ふりかけで無理やり食べるが食べきれない。

することもないので寝る。寒い。軽量のシュラフを持参したが失敗した。寒さで寝付けずまんじりともせず夜を過ごした。誤算続きだ。

10月10日(月) 昨夜から降る雨は相変わらずだ。朝食にシシご飯を戻し食べてみる。不味さが際立ち全く喉を通らない。昼のクッキーとドライフルーツを少し食べる。

管理人に見送られ出発。雨が降る中、薄暗い樹林帯を黙々と登る。今日は切合小屋までだ。

睡眠不足と食事不足と寒さでいつもより息が切れる。翌日、飯豊本山を越え梅花皮小屋を予定していたが飯豊本山登頂後引き返し、三国小屋泊とした。このシナリオは想定外だ。

登山者は全くいない。休み休み登り地蔵岳に到着。風が強くなってきた。稜線の道をひたすら登りようやく切合小屋に到着。宿泊は途中で出会った福島から来たという青年と私のみ。

アルファ米は相変わらず不味く、無理やり胃に押し込む。風雨はますますひどく小屋を叩き付けている。

10月11日(火) 目が覚めた頃には青年は出発していた。少し待つが風雨は治る様子がないため出発することにした。霧で視界は悪く道を探りながら進む。登山者は全くいない。草履塚、姥権現を過ぎ鎖のある岩場に着く。両側は切れており、息を整え慎重に渡る。風雨が強いので神経を使う。先に進み御前坂に着く頃には猛烈な風になり砂を吹き飛ばしている。寒さもひどくここで断念することとした。引き返しながらいけたのではないかという思いがまとわりつく。

鎖場を越え切合小屋に着くと登山者が二人いた。今日中に本山小屋まで行くという。小休憩の後三国小屋に向かう。風雨は幾分和らぎ早々に小屋に着く。宿泊者は私一人のようだ。登山者が一人立ち寄りやはり御前坂で引き返したという。なんとなく安堵する。2時間かけてマイカーまで戻るといふ男性を見送るとすることもなく白飯を戻しふりかけで胃に押しこむ。相変わらず不味い。寒さで寝付けぬ夜を過ごした。

10月12日(水) 曇り空の下出発する。少し早いとは言え霧の合間から見せる紅葉は素晴らしくやはり来て良かったと思わせる。道は1本道で迷う心配はない。ただ、所々に排出して間がない糞があり心がざわつく。広葉樹の中を黙々と歩く。巻岩山の手前の分岐で稜線を外れると急傾斜の樹林帯を一気に降りる。ブナ林を通り抜け、雨で増水した沢を数回渡ると弥平四郎登山口に着く。林道を歩き弥平四郎の集落に入ると手配した町営バスを2時間半待つ。集落には数軒の旅館はあるが廃屋も多く、人の気配のない寒空の下することもなく気持ちも沈む。ようやく来たバスに乗り野沢駅に到着する。駅前には何もない。待合室で1人新津行きの電車を2時間待つ。この磐越西線も8月の豪雨で分断されており代替バスで来ては家に帰る高校生を見送る。

新津行き電車で乗り宿泊先の長岡に着いたのは夜11時を過ぎていた。

10月13日(木)長岡市内を散策後、新幹線で東京へ。浜松町の居酒屋で疲れを癒す。その後、東京駅から新幹線に乗り帰阪した。

不完全燃焼ではあるが記憶に残る山行であった。



大日杉小屋



切合小屋



三国小屋



飯豊山地図

# 吾妻山系前川大滝沢

川端 充

金曜日の仕事終わりに新幹線に乗って1時間半。福島駅で降りるとロータリーのところに顔なじみが待っていてくれた。K 大学 OB の T だ。現役当時はまだ関西学生山岳連盟 (AAVK) の総会が開かれていた。各大学が集まってトピックスとなる山行のスライド上映を行い、そのあとは飲み会、さらに下宿になだれ込んで登山論議するのが常だった。K と私はお互い刺激しあったその時の仲間だった。

ザックをトランクに積み込んで、挨拶もそこそこにさっそく出発した。私たちは1ヵ月前に秩父の笛吹川に行ったばかりだ。

私は東京単身赴任の身でコロナ禍とあって単独行を続けていた。見知らぬ土地で見知らぬ山をめぐる山旅は新鮮だった。天気予報を見ては行先を考え、交通機関の乗り継ぎアプリを駆使して毎週のように山へ通っていた。そうして1年が経ち、世の中コロナへの警戒心が薄れてくると、こちらもそろそろパリエーションがやりたくなってきた。一方、T は春から仙台に赴任し7月に資格試験を終えたところだった。どちらからともなく連絡をとりあって、すぐに往年のタッグ復活となったのだ。

車はやがて街灯もない真っ暗な道を走る。カーナビだけが頼りだ。山道をずいぶん走り続けると、突然電気が煌々とした場所に出くわした。格納庫のような大きなシェルターがある。車を降りて探索すると、シェルターの向こうにプラットホームがあった。

駅だ。「こんな山の中で…どうして」

時空に迷い込んだのかと思った。

奥羽本線の峠駅という無人駅。さすがにこの時間に列車は通らない。案内板には「山形新幹線が（この無人駅を）通過する」と書いてあった。

納得したところもあるが、暗闇の中の煌々とした駅舎は現実のものとして腑に落ちず、じっくりしないまま入渓点に近い滑川（なめがわ）温泉を再び目指した。真っ暗な中で温泉の灯を見つけたときは、迷い込んだ思いが強まって「料理店」を見つけた旅人のような気分だった。

少し戻って路側帯に車を止め、マットとシュラフを広げてゴロンと横になり、缶ビールを飲んだ。

1ヵ月前に行った笛吹川は夜半から雨が降り出し、翌朝特段の議論もなくあっさり引き返しを決めた。初日にキャニオニングの一団と前後して進み、久しぶりの感覚を確かめようと、現れた滝や釜すべてに対応しているうちに時間がどんどんたってしまって、予定していたよりずいぶん手前で幕営となってしまった。久しぶりの山行とあって T は調子が上がらなかった。T が持ってきた古い9ミリのロープは水を吸って、すっかり重くなってしまっていた。入山前は「笛吹の次は奥只見の恋ノ岐川へ行こう」などと話していたが、下山後その話は「ちょっと無理かな」となった。

私たちはあと数年で60歳。これが元山岳部員のリアルだった。  
ところが—

T が LINE を送ってきた。「前回の反省からベアールのロープ8ミリ×30mとファイントラックのツェルトを購入しました。昔の古い装備より軽量でコンパクトです」

立ち直りが早くて笑ってしまった。

そして私はインターネットに無数ある報告を読み込んで、コースタイムに沿った行動計画を頭の中に叩き込み今回の山行に臨んだのだ。

空が明るくなり T を起こさないようにして、一人で沢床を橋から見下ろした。驚いた。十数メートルもある幅いっぱいのナメ滝がダイナミックな S 字状を描いている。

「オーッ！」

いっぺんで気分があがる。私は登攀系でも泳ぎ系でもなく、沢登りの中でナメが一番好きだ。大学1年の時に行った黒部の赤木沢、3年の時の上信越・魚野川本流、卒業してからも北海道のクワウンナイ川、八幡平の葛根田川とナメ山行を重ねてきた。前川大滝沢も嗜好そのままの選択だった。

T も起きて支度を整え、さっそく沢床に降りてペタペタと歩き出した。ラバーソールの沢靴のフリクションが素晴らしい。岩肌に吸い付くようにしてスタッと立ちこむことができる。なんとといっても「癒し沢」「デート沢」の異名をもつ前川大滝沢は、難しい滝がなく泳ぐような釜もない。ひたすらペタペタとスタッと繰り返した。

やがて沢が右に屈曲すると巨大な岩塊が姿を現した。

滑川大滝。日本の滝百選にも選ばれていて、東北では最大級だという。とにかく塊である。バカでか

い。岩の大きな塊が合体して超巨大な岩の塊を作り、さらに超巨大な岩の塊が合体しバカでかい岩の塊を作った、そんな感じだろうか。

問題はこの高巻きだ。右岸のルンゼを登り、ザレ場を渡るのが一般的。ザレ場ではロープを出すパーティーもいるようだ。しかし私たちが選んだのは超安全牌の高巻きルートだ。滑川大滝を見るための展望台からこの沢に降りる道がある。この道を利用させてもらっていったん一般道まであがり、しかるべき地点から沢床に戻る。インターネットに詳細な記述が載っていた。

「トロッコの残骸を見たら行き過ぎで、少し戻り赤テープを目印に降りる」

そのまんまだった。インターネットの情報は体力の温存につながるので遠慮なく使わせてもらう。

頭上に朽ちたつり橋がかかっていた。つり橋以外にも軌道跡や索道のための鉄塔、小屋が廃墟となつて残り、黄色味を帯びたザレた斜面があったり、川面に湯の花がユラユラゆれているところもあった。

大学で林学科だったTはフィールドワークでいろんな山に入っていた。

「鉱物は国策として採掘していたから、ここもそうかもしれないね」と話す。

記録によると「滑川鉱山」は1941年から鉄鉱石の採掘を始め1970年に閉山した。鉄鉱石は専用の索道で昨夜見たあの峠駅に運ばれていた。そして東新潟港から八幡製鉄所まで運ばれていたそうだ。

抗夫が一言もしゃべらず、狭い坑道で汗まみれになっているさまを思い浮かべる。国策という言葉と真っ暗な中で煌々と照らし出されている峠駅につながった気がした。

順調に行程をこなし、沢登りは終盤に入った。

小さいながらも釜をもった滝が出てきた。へつるのは一苦労しそうだ。滝下は泡立って水の中の様子はうかがえない。ここでTがザックから新しいロープを取り出した。

「飛び込んで取りついてみるわ。あかんかったら引っ張ってくれ」

長いブランクがあったとはいえ、Tは大学卒業後の一時期大阪の沢登り専門の社会人山岳会に所属し、台湾の大渓谷に遠征した経験をもつ。

迷いなくハーネスにロープを結ぶと勢いよく飛び込んだ。ひとかき、ふたかき、滝の真下に到達した。問題はここで立ちこむことができるかどうかだ。ロープを持つこちらにも緊張したその瞬間、Tは滝の真下の泡立ちの中に、すくっと立ち上がった。(よしっ。) さらに滝を登る。堅実で危ういところが全くない。

「ビレー解除！」

T、面目躍如の活躍だった。

潜滝を見たら登山道まで戻り下山にかかる。滑川温泉は乳白色の濁り湯で、岩風呂と内風呂で汗を流す。予定通り。なんだか満ち足りた気分だ。

帰りの車中で私たちは再び照準を「恋ノ岐川」に合わせ直した。これからの計画の話で盛り上がり「峠駅へ」の看板をちらりと見かけたが、もう寄ることはなかった。



滑川大滝



前川大滝沢

## 真川源流から北ノ俣岳 山スキー

山本恵昭

ゴールデンウィークは、やっぱり山スキーを楽しみたい。そして、イワナも釣りたい。釣ったイワナは、焚き火で塩焼き。でも、休めるのは、暦通りの3日間。あんまり奥地には行けない。

考え抜いた計画は、飛越トンネルから入山。途中、寺地山から北に降りて、真川源流でキャンプ。長い森を登り、北ノ俣岳へ。標高差約1000mを一気にスキーで滑り降り、イワナ釣り、焚き火三昧も楽しむ計画を実行してみた。

5月3日、雪の多い冬だったが雪解けは急速に進み、飛越トンネルの手前約1kmまで車で入ることができた。神岡新道下部の泥濘には、長靴が最適。でも、ザックに括り付けたスキーセットが重い。

寺地山から北に伸びる尾根は穏やかで、スムーズに真川源流に滑り降りることができた。期待していたスノーブリッジは皆無で、危なっかしい丸太橋を渡る。手頃な雪原にツェルトを張り、焚き火準備とイワナ釣り。チビッコはお戻りいただいて、2尾を塩焼きに。

4日、早朝の原生林を、シールとスキーアイゼンで独り黙々と登る。清々しいが、少し得体のしれない怖さを感じる。これを畏怖というのか、畏敬というのか。

スマホGPSを頼りに登り続けると、木々も低くなり、やがて上部の無木立斜面へ。そして、神岡新道トレースに合流。

快晴の北ノ俣岳山頂からは、絶景。北には、堂々と薬師岳。東は、雲ノ平の向こうに赤牛岳から水晶岳。さらに、三俣蓮華岳と黒部五郎岳の間から槍ヶ岳の穂先が見える。

北ノ俣岳西斜面は、スキー天国！先日降った雪が古い雪を覆い、程よく緩んで、抜群のコンディション。ハイスピード大回りが気持ちいい！下部の森は、総合格闘技。日陰はガリガリ、日向はズボズボ、木々の根元には落とし穴、小さな谷地形、うっかりしていると雪に隠れた枝に引っかかる。そんなこんなも楽しみながら、キャンプサイトに戻る。

平らな石を雪の上に置いてベンチを作り、のんびり昼食。日向ぼっこ。上流に下流に、イワナを求めて徘徊。思ったほど大物は出なかった。4尾をキープし、焚き火で塩焼きに。やっぱり旨い！

5日、朝の雪の締まった間に寺地山まで登り返し、神岡新道に合流。しばらくスキーで下り、デポした長靴に履き替えて、ダラダラと飛越トンネルへ泥濘道を下る。途中で会った人が、「クマがいた」と焦り顔。まあ、この辺のクマは控えめで純な奴だと信じよう。車に着いて、濡れものを干している間に、水浴び、着替え。そして、ちょっと山菜採り。フキの薹、コゴミを少々。

欲張り計画を3日間で堪能。あ～面白かった。これだから、なかなか、山はやめられない。



真川源流でツェルト泊



北ノ俣岳から、右に黒部五郎岳、左に三俣蓮華岳、中央奥に槍ヶ岳



北ノ俣岳西面、大回りハイ  
スピードターン最高！



真川のイワナ、期待した  
大物はいなかった。



焚き火で塩焼き

## 池口沢から池口岳

山本恵昭

南アルプス深南部、一度行ってみたいと思っていた池口岳。環境省が全国に5箇所指定している原生自然環境保全地域のうち、唯一本州にある大井川源流部原生自然環境保全地域の境界に位置する。この地域に入るのは、2011年のリンチョウ沢以来。どうせ行くなら、池口沢を遡って山頂まで行ってみたい。

8月9日、池口集落の下、橋の手前に車を止め、9:20に出発。しばらくは広河原を進む。ダムを越えて、1030m分岐までは沢歩き。時々、赤石沢のラジオリアと同じような赤い岩が見られる。

やがて、いくつかのゴルジュが現れ、右に左に、時にはシャワークライムで、次々と滝を超えていく。最狭部は、幅約2m。記録によると、泳いで奥の滝に取り付くか、右岸を斜上し10mの懸垂下降か。どちらも面倒臭いと思いながら水中をつま先で探っていると、右岸の水中に足場になる岩を発見。いくつか繋いでいくと腹まで浸かる程度で滝に到着し簡単に登れた。

1番核心部と思っていたところをスムーズに超えることができたので、気持ちに余裕もうまれ、美しいナメ滝に続く淵に竿を出す。毛鉤を何度か流していると、大きなイワナが水面近くに現れ、スローモーションのように悠然と毛針をくわえた。フィッシュ・オン！30cm弱か。しばらく、イワナと戯れるが、命を頂くのは1尾だけにしておこう。

その後も滝が次々と現れ、最も簡単安全なルートを選び超えていく。

1300m二股に15:20到着。岩小屋沢側に少し登ったところに、広くて平なキャンプサイトを見つけた。テントを張って、早速焚き火でイワナの塩焼き。旨い！

そうこうするうちに、ニョロニョロとヒル君発見。注意しないといけないなと思っていると、すでに遅し。よく見ると、足首から血がタラ〜リ。テント場代を血で払う。

10日、早起きして、5時過ぎ発。街では十分お散歩タイムであるが、谷底の森の中では、まだ薄暗い。慎重に二股まで下り、右の湯沢に入る。すぐにゴルジュとなり、次々と滝が現れ飽きることがない。だんだんと倒木が谷を埋めるようになり、最後はガレ場となる。

このまま詰め上がると、南峰と北峰の科尔に出るようだが、2100m付近で左岸にシカの踏み跡があつ

たので、それを辿ることにする。西尾根でもう一泊の予定だったので、水を3リットルほどザックへ。そして、フェルトシューズからトレッキングシューズに履き替える。

シカ道は、絶妙なルート選択で草付きとガレ場を右往左往。安全に南峰の西の尾根に導いてくれた。安全地帯に着いてふと見ると、腕にニョロニョロ君。結構パンパンに膨らんでいる。シカ道通行料を血で払う。

樹林の中を登り、池口岳南峰に10:20到着。小雨が降って、濡れた笹で下半身びしょ濡れになる。ガスに包まれて、展望は無し。踏み跡をたどり、北峰へ。ここからは、少し道らしくなった踏み跡をひたすら進む。

もう一泊するつもりであったザラ薙平に12:40到着した。まだ時間も早いので、今日のうちの下山することにする。登山口の林道に16:00。池口集落を経て、17:00に車まで辿り着いた。久しぶりの12時間行動で、疲れた。

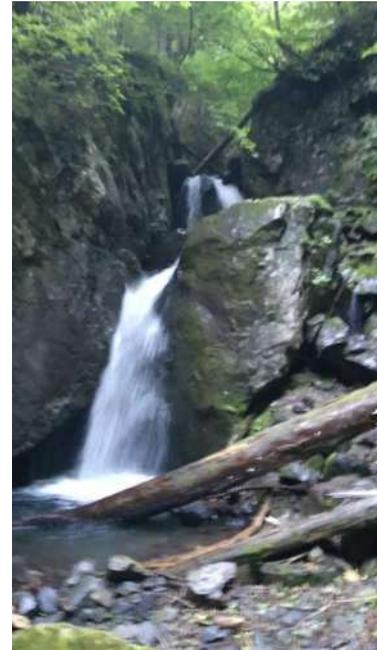
車の後ろで、水浴びをして着替えながら、深い森と清き流れ、良い山だったと感慨にふけっていると、3度目のニョロニョロ君登場。最後に、駐車場代を血で払う。



池口谷最狭部、幅約2m



二俣で、焚き火キャンプ



池口谷上部、湯沢の滝群

以上

# 苗場山及び恵那山山行

大竹口誠治

新型コロナが2021年9月頃に一旦落ち着いたので、10月に女房と苗場山に登って来ました。また、2022年8月・9月初旬に行く予定だった剣岳・南アルプス・幌尻岳は、新型コロナや天候の関係で行けなかったですが、2022年9月中旬にはまだ、登っていなかった百名山の恵那山に酒井さんの主催する山の会の方々と登って来ましたので、以下の通り報告致します。

**期間：2021年10月4日～5日：苗場山**

1. 参加メンバー：大竹口誠治、美佐子

2. 行程

10月4日：祓川登山口駐車場発10：45、下の芝着12：27、神楽ヶ峰下鞍部着14：35、苗場山山頂着15：45、山頂ヒュッテ着15：50（所要時間約5時間）

駐車場を20分程登ると有名な和田小屋に到着。途中で、名鉄観光バスツアーの団体さん30名位とすれ違う。マスクをしている人は、殆どいなかった。その後、スキー場の中を通り、急登が始まる。神楽ヶ峰下鞍部から苗場山の道はかなり急傾斜であったが、紅葉見学をしながらゆっくり登る。当日は、苗場山山頂ヒュッテに宿泊。ほぼ、個室状態でコロナ対策はしっかりしていた。夕方、日の入りを見学。草紅葉が見事であった。天気が良く、周りのほとんどの山々が良く見えた。槍、穂高、立山も見えた。

10月5日：5時15分から6時位まで日の出を見に出かけた。

山頂ヒュッテ発08：09、神楽ヶ峰着09：25、和田小屋着12：00

祓川登山口駐車場着12：30（所要時間4時間10分）

久しぶりの登山なので、普段鍛えていない太腿に疲れが溜まった。



鞍部から苗場山を臨む（結構、迫力がある）



頂上の草紅葉と岩菅山（中央）



苗場山頂ヒュッテ



和田小屋

期間：2022年9月10日～11日

1. 参加メンバー：瀬良孝司、田中廣（以上室町山の会）、大竹口
2. 行程

9月10日：10時頃に名古屋駅で落ち合って、瀬良氏の車で、今日の宿泊場所である萬岳荘（泊）へ向かう。萬岳荘到着後、富士見台高原を1時間程度散歩した。

9月11日：萬岳荘出発05：30、鳥越峠着06：25、大判山着07：26、天狗の頭着09：00、恵那山山頂着10：52、天狗の頭着12：30、鳥越峠着14：38、駐車場着15：06、駐車場発15：35、名古屋駅着18：10解散

萬岳荘の人に教えられた林道からの直登ルートを取るために、車で移動する。鳥越峠までは30分の急登であった。鳥越峠からは比較的なだらかな稜線を歩くが、雨が多いためか、途中で田圃みたいな所が沢山出て来て回避するのに苦労した。途中、御岳山らしい山が見えた。瀬良さんが吐き気がする等の体調不良を訴えられたが、徐々に回復され、5時間で、何とか恵那山の山頂に登頂した。山頂はガスっており、眺望はなかった。

帰りは順調に飛ばすが、田中さんが足がつりそうになったため、ペースを落として、慎重に下る。鳥越峠からの下りでスリップして2回転されるハプニングがあったが、怪我もなく、アキレス筋の方も、問題は出なかった。

15時過ぎに、駐車場に到着。出発から9時間余りの行程で、日帰りでは少し、きついものであったが、怪我もなく、無事終了した。



萬岳荘（ホームページより）



恵那山山頂にて集合写真



富士見台高原



恵那山頂上避難小屋

## 第五章 例会山行報告

### 氷ノ山千本杉ヒュッテ整備例会報告（第244回例会）

山田健

ほぼ2年間例会がコロナ禍のために中止になりましたが、ようやく2022年6月11日、12日に第244回の例会を山岳部山岳会合同で実施することができました。以前は毎年6月初めにヒュッテの整備を兼ねて現役新入生も交えて現役とOBの懇親を行って来ました。2年間この整備懇親山行ができなかったもので、今回は少なくなった薪づくり、ヒュッテの大掃除、水道の補修などを実施し、夜はみんなでストーブを囲んで懇親を行いました。参加者は、東郷、壺阪、居谷、山本（恵）、山田、城間（3年生）、大矢（2）、三谷（2）、小田（1）、後藤（1）の10名。初日はあいにくの雨模様でしたが、翌日は朝もやの中、幻想的な日の出が拝めました。その後晴れてきましたのでみんなで頂上を往復しました。



ヒュッテ前での集合写真



薪づくりを現役に指導する東郷さん

6月の例会に続いて、7月23日にはテラス補修資材などの荷揚げ山行も実施しました。8月に正垣木材さんが工事をするための木材や防腐剤、工事道具などに加えて、新調した発電機、灯具、水道塩ビ管などもこの時に一緒に大段平から荷揚げを行いました。この時にはコロナの第7波がやっていたので日帰り山行となりました。参加者は居谷、山田、萩原（3）、大澤（4）、三谷（2）、小田（1）、後藤（1）の7名。暑いときにご苦勞様でした。



荷揚げを終えて



大段平から木材などの荷揚げ



何十年かぶりにヒュッテに電灯が灯った



ガスボンベ式エンジン発電機

## 山岳会山岳部合同忘年会（第247回例会）

山田健

2022年12月16日金曜日に山岳会山岳部合同の忘年会を阪急六甲の六甲苑において実施しました。以前から山岳会と山岳部の懇親のため忘年会を兼ねて例会として実施してきたところですが、2020年、2021年はコロナが蔓延したため実施を見合わせておりました。この度、自治体からの大人数での会食の自粛要請もなくなり、大学でもこのような会の規制もなくなったことから再開したものです。また、山岳部長の河端先生（現副学長）が農学部教授を定年退官するために何とか実施したいと考えておりました。

当日の参加者は山岳会からは東郷、石川、居谷、岩井、山田、山岳部は河端部長、小池副部長、現役全部員9名（萩原主将、城間主務、侯、大沢、柳本、大矢、三谷、後藤、小田）で久しぶりに賑やかに忘年会を実施することができました。

プロカメラマンの石川毅さんによる集合写真を載せておきます。



（編集部注）

- ・第231回から第243回は新型コロナで中止となりました。
- ・2022年度に計画していた例会山行は、2021年度分の例会山行番号をそのまま適用していましたが、同じ番号を適用するのは正しくないため、2022年度は244番からとなります。
- ・第245回、第246回、第248回は、新型コロナ及び参加者が少ないため、中止となりました。

## 第六章 山岳部活動報告

### 2021 夏 常念山脈縦走合宿

上田一輝

メンバー：CL 侯(3), SL 萩原(2), 城間(2), 上田(2), 食糧大矢(1), 装備三谷(1), 柳本(2)

日程：7月22~25日

#### ①22日 アプローチ 晴れ一時雨

上高地 15時35分頃着（小梨平キャンプ場着もほぼ同時刻）

各自、朝に梅田・難波からバスに乗り、まずは高山を目指す。アプローチ日ではあるがキャンプ場に泊まっているので雰囲気を出すためにご飯を作った。豚肉の味噌漬けと米を炊いて食べた。他に特記事項はないが、小梨平キャンプ場では温泉に入れるということ、熊対策で食糧はコンテナ内に保管すること、人気のキャンプ場で人が多いことを付け加えておく。

#### ②23日 晴れ一時雨

小梨平キャンプ場 05:00—06:20 徳沢 06:30—09:08 長堀山—09:55 蝶が岳

4時起床。小梨平キャンプ場から徳沢までは山と高原コースタイムでは2時間となっているが実際には1時間20分で歩ける距離である。平地はかなり速く歩ける。徳沢はものすごくたくさんの人であふれかえっていた。いよいよ長堀（ながかべ）尾根である。これは急登であるのでみな意気込んでいた。また熊に注意しながら歩いた。大きめの声でずっと話しながら歩いていた。この道は基本的につづら折りである。樹林帯のため道迷いがあるかと思われたが明瞭な道であり、少なくとも登りで使う分には迷うことは無いだろうと思われる。稜線西側のため朝は日が当たらず涼しい。このせいもあり、アッという間に稜線に出こられたという印象である。稜線に出てきた直後の我々はその景色の雄大さにとても興奮していた。近くを歩いていたおじ様たちもなんだか嬉しそうである。若さをおすそわけしておいた。早く着きすぎたかと思われたが、テント場の込み具合と天候が崩れていったことからむしろこれで良かったと思った。ちなみに電波は入った。晩御飯は大矢君特製のミートソースと共にいただくパスタだった。とてもおいしかった。最高。

#### ③24日 晴れのち曇り一時雨

04:05—05:00 蝶槍—08:00 常念岳—09:07 常念小屋—10:55 東天井—11:50 大天荘

3時起床。まだ足元が暗い状態でスタート。しかし東の空は赤くなりだしていた。朝焼けを楽しむために蝶槍手前のp2664でしばらく太陽が出てくるのを20分ほど待った。蝶槍には先客がいたのである。しばらくすると太陽が顔をだしてとても美しかった。その美しさのせいでみな頭がおかしくなりそうであった。蝶槍を下ると樹林に入る。ここから細い尾根上の地形で離合困難との情報があったところだ。しかしすれ違いの人に出くわすことは常念の登りまでなかった。そしてここもまた熊の出没ポイントであったので大声を出しながら歩いた。というよりも話し声が単純に大きかっただけであるが。花を見ながら、木漏れ日を浴びながら歩いた。ここは景色もそれほど楽しいものではなかったのですがすぐに抜けてしまった。しばらく進むと常念の登りが見渡せるポイントに出てこられた。ここで休憩を取り、何時間で登りあがり切れそうかなど話した。いよいよ始まった常念の登りだった。萩原は一番テンションが高い。さすがに城間はしんどそうである。この道はいかにもアルプスらしい大きめのガレ場を上がる斜面で、左手に穂高や槍を、右手に雲海を見ながらの稜線だった。しばしば人にもすれ違う。しかし離合はそれほど困難ではない。また浮石が多かった。柳本が特に辛そうであった。頭痛を訴えており、高山病のようであった。しばらくすると常念山頂に至った。ほどほどに休憩したあと、常念乗越へ下るのがこれがつらい。大きなガレ場の下りは膝や足の裏に負担がかかる。また離合も多かったため時間がかかった。そのため常念小屋でも休憩をとった。また横通岳に向けて登り返しなのだが歩きやすい稜線だったので常念の登りに比べてすぐに上がった。やはり足場の状態で進むスピードは劇的に変わる。ここからは平和なトラバースである。しかし柳本はずっと疲れで苦しそうであった。上田はコマクサの群生している様子を楽しんでいた。東天井のクランクポイント手前は少しだけ雪が残っていた（道上にはない）。この時間から雲が湧きたってきていた。大天井の登りの頃にはほぼ霧に包まれていた。大天井の登りはきつくはないのであつという間に着いた。テント場に着くと慶応大学の山岳部がいた。しばらく話して情報交換をした。彼らは翌日2時出発で槍の小屋に行くそうである。このトイレはとてもきれいである。蝶のトイレは深く呼吸をすると本能的に危険を察知するほどだったが。大天井のピークには行かなかった。もう景色は十分楽しめたからピークにそれほど興味がなくなっていた。晩御飯はビーンズカレーである。他の大人の皆さんには我々が包丁まな板を駆使してテント場でニンジン切っているのが面白

いようである。おつまみやお菓子を差し入れしていただいた。ありがとうございました。

#### ④25日 曇りのち晴れ

テント場 05:00—05:20 切通岩—05:39 吊岩—06:42 蛙岩—07:10 燕山荘—07:55 燕岳—08:20 燕山荘—09:00 合戦小屋—10:40 第一ベンチに戻る。熊発生—11:20 中房温泉

4時起床。朝から霧である。結局曇りがちなのは10時ごろまで続いた。下りなのでほいほいと足が進む。すぐに切通岩を通過し吊岩に至った。このコースはすれ違う人が多い。また年齢層もどうやら高いようである。思っているよりも合戦尾根で上がってくる人が多いという事か。我々ももっと頑張らねばという気持ちになった。燕岳周辺はまた他の山域とは地質が違う。足元は真砂で白く、面白い形の花崗岩がそり立っている。全体的に岩っぽく、六甲山のようなようである。蛙岩もそのような奇岩の一つである。すぐに燕山荘に着いたのでデポする人はデポして、ピークを目指す。ここも真砂の地質で白い。遠くから見たら残雪だと見間違えそうだった。燕岳のピークも岩っぽく本当に六甲山の芦屋地域、そう、さながら万物相である。残念ながらピークは霧に包まれて景色は楽しめなかったが、山の姿そのものが面白かったと個人的には思う。合戦尾根は樹林の中を行く道で正直面白くはない。ポッカをした六甲の帰り道を思い出す。また人が多く、離合のために50回は立ち止まっただろう。燕山荘で順天堂大学診療所のボランティアをしていた同大学の学生さんに出会った。男子1名、女子3名だった。うちの山岳部の一部の者は羨ましがっていた。しかし話をするのはあまり得意ではないようである。しばらく無心で下りていったが第一ベンチから5分進んだポイントで熊が出たという情報が入った。前から引き返してきた人たちに教えていただいたのだ。この時10時35分。10時45分第一ベンチを再び出発した。大声を出して熊を遠ざけながら歩くのがセオリーである。ひたすらこれを繰り返しながら歩いた。無事に下山完了し、お風呂に入った。いい湯である。松本に移動して食べて遊んだ、これもいい思い出となった。



2021.7 休憩中の萩原と侯

### (2021 冬 伯耆大山雪上訓練)

(城間一輝)

参加者：萩原（主将）・城間（主務）・三谷（装備）・大矢（食料）・坂本（OB）・藤川（OB）・清野（OB）

2021年の夏合宿は感染者数の増加により活動制限がかけられた。しかし、12月になってコロナが収まりつつあるので、大学から合宿実施の許可を得ることができた。さらに、学外指導者の参加も容認されたためOB3名らを加えた総勢7名の雪上訓練となった。

12月28日の未明、現役の4人と藤川OB、清野OBは伯耆大山へと向かう。坂本さんとは鳥取県のローソンで待ち合わせを行い、全員で大山寺の駐車場へと到着した。冬期にもかかわらず駐車場には多くの車があり、その人気さが垣間見えた。全員の顔合わせを行った後、入山届を出し忘れ、元谷避難小屋へと向かう。避難小屋付近は、トレースはなく、直近の降雪による深雪に苦しめられることとなった。また、元谷避難小屋は異臭がするとの情報だったが、まったくなかった。非常に清潔であった。その後、

テント泊装備を小屋にデポし、翌日のために、七合尾根の出合まで下見に行くことにする。ここで、地形図の確認の不十分により、登るべき谷より一つ西側の谷を進んでしまう。OBらに途中で指摘され、無理やり尾根を越えて、目指すべき谷へと戻ることを試みる。この時点で新雪は相当深く、先頭を交替しながらであったが、時間が非常にかかり苦しい。七合尾根もかなりしんどいものだと判断し、七合尾根出合まで行くことは避け避難小屋まで戻る。その後、現役勢はテントで、藤川さんと坂本さんは小屋で、清野さんはテントでそれぞれの準備に入る。夕ご飯の酒粕汁は肉の量が多くてとても美味しかった。翌日、幕営地を発し夏道登山道へ向かう。夏道登山道は人の往来が多いのか、かなり踏み固められているようである。しばらく進むと、樹林が消え、風がどんどん強くなっていき、8合目からはホワイトアウトしていた。数メートルの先の視界は見えず、さらに、サングラスやゴーグルは一瞬にして曇るので視界は最悪である。何度か登山道からずれるも、OBらのご協力により、なんとか山頂の避難小屋へと到着する。今にも帰りたい気分である。山頂で写真を撮った後、そそくさと下山を開始する。人の往来が段々と増えてきており、20パーティはすれ違った。中には、かなりの軽装備で登っている人もいて驚いた。避難小屋まで到着した後は、テントを撤収し、ビーコン捜索訓練を開始した。まずは、ビーコンが示す方向の正確性について教えられ、OBらによる捜索のお手本を見せていただいた。迅速な行動や状況把握だけでなく、捜索する人、スコップを持つ人、雪崩に気を付ける人など、役割分担をするというのも大事だと感じた。その後は、登山道に面した谷を利用して、スノーアンカーの設置およびブーツアックスビレイの練習を行った。ご協力いただきありがとうございました。

## 2022 夏 劔岳定着合宿

(城間一輝)

日程：2022/08/26 (金) ~2022/08/31 (水)

メンバー：城間 (B3・CL) 大矢 (B2・SL) 三谷 (B2・装備) 後藤 (B1・食料) 小田 (B1・食料)

2020年度、2021年度は大学からの強い活動制限により、例年の劔岳定着合宿が実施されなかった。そのため、今回は実に3年ぶりとなる。前期の試験が終わり、着々と準備を進めてたものの、長次郎谷出合の雪渓崩壊、主将萩原の参加拒否、城間の追試による順延により、ルートや日程がどんどん変更されていった。そして、若手OBからの的確なアドバイスや度重なる下調べを経て山行を迎えた。

1日目 8/27 (土) 小雨

08:10 室堂— 08:45 雷鳥沢キャンプ場— 11:25 劔沢キャンプ場

雷鳥沢から劔沢キャンプ場まで、小雨に降られてかなり濡れてしまった。濡れた服は着替えることで、寒さを感じなくなった。着替えを多めに持ってきて正解である。夜までは大富豪をして過ごした。トランプは後藤が強く、小田の引きが弱いことが判明した。

2日目 8/29 (月) 晴れ→雨→晴れ

07:00 劔沢キャンプ場—08:10 源次郎尾根取り付き—10:20 劔沢キャンプ場—13:00 別山岩場取り付き確認

04:00に起床し劔岳の一般道ピストンを行う予定であったが、雨がひどかったので、05:00まで寝た。二度寝後、雨はまだ酷かったため、源次郎の尾根取り付き確認と別山岩場に行くことにした。

06:30頃から、雨が止んだので、07:00発で源次郎尾根の取り付きへと出発した。アイゼン装着のスピードは問題なかったが、1回生のアイゼンにどちらも不具合があったようである。アイトレを行わなかったのを後悔した。多少難儀したものの、源次郎尾根の取り付き(草つき)を見つけた。源次郎尾根に取りつきには草つきとルンゼの2つがあり、誤認していたのは反省である。10:00頃にBCに戻ったが、雨が降り出したので、別山岩場は諦めて大富豪を行った。5回連続で行い、最終的に大貧民になった者が全員のトイレ代(100円)を1回分負担する罰ゲームを設けたりもした。13:00ぐらいから晴れてきたので、別山岩場への取りつきに城間と大矢だけ見に行った。しかし、別山の稜線上では、劔岳方面の眺望が素晴らしく良かったので、取り付きの支点を確認することなく、40分ぐらいでまったりと過ごした。入山日から天候からずっと天候が悪かったが、翌日は近日中1番の晴れ予報のため大変期待出来ると信じて寝た。

3日目 8/30 (火) 快晴

04:00 発-05:03 取り付き着-05:13 取り付き発-07:20 ルンゼと合流-08:18 1峰着-08:30 1峰発  
-09:15 2峰着-09:25 2峰発-09:35 懸垂支点着-10:30 懸垂終了→山頂へ歩き出し-11:30 山頂着  
-11:50 下山開始-15:30 BC

計画書では、03:00 BC 発の予定だったが、04:00 に取り付きについても暗すぎると判断 (2022/08/27 の富山県の日の出は 05:18) したので、1時間遅らせた 04:00 BC 発とした。だが、04:30 の時点で、登れるほど明るかったので、03:30 BC 発が正解であった。取り付きは前日に確認していたので、スムーズに登り始めることができた。初めの草つき部分からすぐ上がった箇所、1回生は越えるのに苦労していた。そこからしばらく進んだ樹林帯で、道がわかれており、SL の大矢が、あまり人が入っていないような道に進んでしまった。正解のルートは倒木で見えづらくなっており、また、進んだ道も踏み跡やロープの残置があったためである。ザックが相当木に引っかかり、また、踏み跡もかなり軟らかかったので、通行に時間がかかった。正規のルートと合流した後、またもや危険箇所が現れた。もし落ちたら、穴に転落して死にそうである。大矢はフリーで登っていたが、他の4人はハーケンでセルフを取りながら登った。ここで、クライミングシューズに履き替えるのがベストだと思う。それからしばらくすると、ルンゼと合流した。この時点で、出発してからおよそ2時間が経過しており、概ね計画通りだった。ルンゼ合流後、1峰を越えて2峰までは難なく進んだ。計画より1時間も速かった。2峰すぐの懸垂支点は、綺麗なリングボルトが3つと、鉄杭、鉄の鎖、捨て縄があった。リングボルト2つにかけられた残置の捨て縄にロープをかけ、他2つの残置捨て縄にバックアップを取って下降した。ロープの流れは非常に良く、無事に終わることが出来たのは良かった。しかし、懸垂開始から、終了まで1時間もかかってしまったのは反省点である。懸垂地点から、山頂までは浮石が非常に多く、落石の危険があった。足の置き場に気をつければ問題はない程度であった。また、ルートが色々取れるので、ルートファインディングも重要だと感じた。大矢のルーファイがかなり上手かった。

山頂には、11:30 に到着した。取り付きは 05:15 出発であったため、6時間15分で源次郎尾根を進んだことになる。時間通りに着いて良かった。至る所でスムーズに動ければ、あと30分~1時間は短縮できると思う。山頂から剣沢 BC までのルートを、全員があまり把握しておらず、かなりしんどかった。体力的にしんどい者は、PAS を鎖にかけて通行した。時間・天候には余裕があったので、剣岳から BC までは休憩を長めに取り、ノロノロと進んだ。

4日目は雨であったので沈殿 (大富豪)。5日目も天候が崩れそうなので早めに下山した。

ロープを使ったクライミングが出来ず消化不良に終わってしまった剣岳だったが、3年ぶりに実施出来ただけでも何か意味があればいいなと思う。



2022.8 剣岳山頂にて  
左から小田、城間、三谷、大矢、後藤



2022.9 表銀座縦走中

## (2022 秋 表銀座縦走合宿報告書)

(侯替開)

(2022/9/11(土)~9/14(水))

メンバー

CL:侯 SL,食料:三谷(二回) 装備:小田(一回)

1日目 9月11日

3:30 起床→4:40 穂高駅の臨時バスに乗車→5:40 中房温泉出発→6:14 第一ベンチ→6:46 第二ベンチ→7:17 第三ベンチ→7:43 富士見ベンチ→8:20 合戦小屋→9:28 燕山荘→9:58 燕岳→10:35 燕山荘→11:24 大下りの頭→13:21 大天荘 18:00 就寝

朝 4:40 の臨時バスに乗車するために穂高駅に着いたのが4時10分くらいだったがすでにそここの人が並んでいた。そして4:40 ごろにはかなりの長蛇の列となっており、並んでいる人のおよそ半分ほどが定員オーバーにより乗車できなかった。早く並んでいて良かったと心から思った。

最初から侯はすでに体力的にしんどい状況に陥っていた。三谷はペースがめっちゃ遅いと言っていたが、侯はすでにかなりしんどかった。結果的にはコースタイムよりも速かったので、侯はめっちゃ遅いことはないと思った。ベンチごとに10分の休憩をとり、合戦小屋では侯の奢りで全員スイカを食した。一切れ500円。当初小田はうどんを食べたかったようだが、9時から販売開始とのことで、結局スイカを食した。なぜうどんを食べたかったのか侯は理解できなかった。

その後は順調に、侯はしんどいながらもなんとか付いていき計画通りにルートを進んだ。燕岳へはザックをおろして手ぶらで登った。燕山荘から大天荘への行程は休憩で立ち止まると虫が大量にまとわりついてきた。これは今回の合宿にて以後悩まされることになる。繁殖期なのだろうか。そして大天荘に到着。さすがに皆疲れたようだ。大天井岳へは侯と三谷の二人が登頂。小田は登らなかった。三時頃にはご飯を作り始め18時には寝てしまった。前日の睡眠不足と本日の疲労の結果だ。小田は歯磨きせずに寝た。

2日目 9月12日

3:00 起床→4:00 出発→4:34 大天井ヒュッテ→4:58 ビックリ平→6:33 ヒュッテ西岳→7:37 水俣乗越→9:21 ヒュッテ大槍→10:20 槍ヶ岳山荘 18:00 就寝

テントをたたんで出発できる状態になっていたのは起床から50分ほどだった。かなりの余裕ができていたのは意外だった。

そして暗い中出発。大天井ヒュッテへは全く景色を楽しめずに歩く。その後次第に空が明るくなっていき、西岳の手前では槍ヶ岳がはっきりと見えた。しかし、ヒュッテ西岳に着くころには雲に覆われ以後は槍ヶ岳を拝むことはできなかった。

ヒュッテ西岳からの下りは確かに危険だなと感じる箇所はあったが、そういう箇所は一部にとどまった。水俣乗越からの登り、つまり東鎌尾根では侯は相変わらず遅れがちであった。ハシゴや整備された木の道を進み、ヒュッテ大槍に到着。山と高原地図ではヒュッテ大槍から槍ヶ岳山荘へのルートは2021年に通行止めとなっていると書かれていたが、すでに通行できる状態であった。槍ヶ岳山荘に着いたときには槍ヶ岳は相変わらずガスに覆われていたため、とりあえずガスが晴れるまで待とうということになったが、なんだが雨が降りそうだしということで、2時くらいに手ぶらで槍ヶ岳山頂を登る。山頂はけっこう人がいた。なんとクライミングで槍ヶ岳山頂を登っている二人組がおり、そういうことができるのかとびっくりした。結局山頂がガスに覆われて景色は全く楽しめなかった。

その後下山し、晩飯を作り、食べ終わったときにはあたり一帯が晴れて、景色がきれいに見えるようになった。なんで今晴れるんだよと残念な気持ちになった。

ちなみに槍ヶ岳山荘は30張であり、他の小屋と比べて少ないし、早く埋まるかもしれないということで4時に大天荘を出発したが、結局わりと空いていたので、5時出発でも問題はなかった。槍ヶ岳山荘のテント場は小さく区切られていたので、6人テントだと厳しいのではと思った。探せばあるかもしれないが。

3日目 9月13日

3:00 起床→3:57 出発→4:53 中岳→6:09 南岳→6:23 南岳小屋→8:30 長谷川ピーク→9:10 飛騨泣き→9:55 北穂高小屋→12:50 潤沢ヒュッテ 19:30 就寝

暗い中を出発した。昨日とは違い、ガスに覆われてなかったので、満月ということもあり、わりと周りが良く見えた。しかしそれも束の間でやがて辺りがガスを覆うようになった。南岳

へは岩稜の道がしばらく続いた。南岳付近で侯は虹が見えたが、他の二人は見えなかったようだ。

その後南岳小屋にてトイレ休憩を行う。大キレットへはガスが覆っており、侯は少し待つことを提案したが、三谷はこの程度なら大丈夫と答え、侯も同意し大キレットに挑む。結論を言えばこの程度のガスは問題ではなかった。ただ、岩がまだ乾いておらず湿っていたため、もう少し待っても良かった。まあ、致命的とは言えないほどのものだったので、許容範囲内だ。獅子鼻の後の下りはかなり急ですが大キレットだと思った。しかし、別にそのような急峻な箇所ばかりではなく普通に歩けるような場所も多くあった。長谷川ピークは見つけることができず、通り過ぎたあとにあれが長谷川ピークだったのかと知るに至った。最低コルからの登りは2017年の報告書にもあるように確かに急峻だった。三点支持を意識しつつ登る。ここでも侯は遅れがちだった。飛驒泣きは容易に分かった。通過時に突風が吹けばヤバイなとは思ったが、そのようなことがなければ注意していけばいけるような箇所だ。飛驒泣き後の登りも急で大変だった。

結局大キレット通過時はずっとガスっていて、北穂高小屋に着いた時もガスに覆われて景色は楽しめなかった。北穂高小屋に着いたときは先着の登山客がカレーを食べており、侯、小田はすごくおいしそうに見えた。その後北穂高岳を下る。下りの途中で北穂高岳山頂付近が晴れていることに気づき、あと20分くらい滞在しておけば景色楽しめたのにと残念に思った。

大キレットを通過しての感想は事前の調査ほど怖いものではなかったというものだ。過度にビビっていたと思う。しかし、何にせよ無事に通過できて良かった。

北穂高岳からの下りはすごく長く感じた。そして実際長かった。もう後は涸沢ヒュッテでくつろぐだけだと思っていたからであろう。足もすごく痛かった。下りの途中は基本的に涸沢ヒュッテを見ながらであったが、涸沢小屋が見えないことに侯は不思議に思ったが、それは山側の近くにあるため、見えないのだと涸沢ヒュッテに着いてから気づいた。涸沢ヒュッテは人が多く、賑わっていた。涸沢小屋も同様だった。平日にこんなに人が多いんだと思った。

いい感じのテント場を見つけてゆっくり過ごした。予備日用のおかずを三谷と小田は食べていた。この日の夕飯はちゃんぽんだが、一つのなべで作ったことが原因なのか、麺がびちょびちょして失敗だった。味は良かった。

この日のうちに帰りのバスを予約することになっていた。最初侯のスマホはちゃんと電波が届いていたが、途中全く届かなくなった。ちなみに三谷のスマホは圏外で、小田のスマホは通信速度は遅いがちゃんと電波は届いた。しばらく奮闘して、諦めていたときになんと電波が入ってちゃんと予約できた。恐らく雲のせいなのではないかと侯は思った。涸沢は意外と電波が入りにくいことを知った。もし雨だったら全く電波が届かないのかもしれない。ちなみに僕の使ったバスは当日の13時まで予約可能だったので、上高地で予約も可能だった。

4日目 9月14日

4:30 起床→5:37 出発→7:26 横尾→8:24 徳沢→10:22 上高地

計画では5時出発だったが、別にそんなに早く着いたところということになり、日の出の時間に出発しようということになった。いつもどおり棒ラーメンを食べ、時間内にテントを片付け出発できる状態だったが、侯がおなか壊して出発が少し遅れた。涸沢にてモルゲンロートを見てから出発した。

この日はずっと素晴らしい天気だった。行程も楽だから気持ちよかった。会話も弾んで楽しかった。しかし、徳沢からはさすがに同じような道で飽きてしまったようだ。上高地は賑わっていた。平日なのにこんなに人がいるのかと驚いた。売られているものは基本的に高く、侯は買わなかった。小田はメンチカツを買って食べていた。

無事終わって良かった。天気にも恵まれたと思う。

## 第七章 事務局報告（総会・会員近況報告・理事会・会計・予算）

### 2021年度神戸大学山岳会定例総会議事録（書面決議）

2021.5.29 15:00～17:00（Zoom/Web会議）

出席者：（名誉会員）河端俊典、小池淳司、山形裕士、井上達男、（正会員）豊田寿夫、田中俊甫、土山尚彦、八田義一、白形洋、居谷千春、中川勝八郎、坂本淳、小林功、山本裕宣、尾崎久純、川端充、野邊正彦、石丸祥史、松村健司、山本浩輔、井部良太、吉井修、（理事・監事）山田健、大竹口誠治、長谷川浩、岩井正隆、山本恵昭、野邊久美、藤川圭祐、金井良碩、森長敬 計31名（内、議決29名）、委任状提出20名、準会員：現役9名  
開催案内120名、出席＋委任計51名で総会成立。

- 1 会長あいさつ 山田会長
- 2 議事（議長：事務局長）：各議案とも満場一致で承認
- (1) 会則の変更（第1号議案） 事務局長  
電磁的手法（メール等）による総会開催通知や、Web会議システム利用による（リモート）総会開催、総会出席、議決権行使を有効とする旨を会則に明記。第18条、第19条、第20条の一部を改訂。
- (2) 2020年度活動報告（第2号議案） 事務局長
  - ① ACKU ニュース 45号発行（2021.3.20）
  - ② 2020年度定時総会開催（書面決議）（2021.4.30）
  - ③ 理事会（第92回、第93回、第94回、第95回）
  - ④ 海外登山研究会
  - ⑤ 新入会員（紹介）
- (3) 2020年度決算報告（別紙）（第3号議案） 会計担当理事・監事
- (4) 2021年度活動計画（別紙）（第4号議案） 各担当理事
  - ① 活動計画（総会冒頭に会長から説明）
  - ② 行事等（平井名誉会員追悼行事、氷ノ山ヒュッテ60周年行事等）
  - ③ 「山と人22号」発行
  - ④ 例会山行
- (5) 2021年度予算案（別紙）（第5号議案） 会計担当理事
- (6) 名誉会員推薦（第6号議案） 事務局長  
理事会より、これまでの功績により居谷千春前会長を名誉会員推薦
- (7) 報告事項（第7号議案） 事務局長
- 3 前会長あいさつ
- 4 連絡・報告事項
- (1) 現役紹介・現役活動報告 現役部員
- (2) 会員近況報告 出席者全員
- 5 閉会

以上

### 2022年度神戸大学山岳会定例総会議事録

2022.4.28 14:00～16:00  
神戸ラッセホール（パンジー）

出席者：（名誉会員）山形裕士、井上達男、居谷千春（特別会員）石川毅、（正会員）東郷賢治、田中俊甫、柏田紘一、土山尚彦、河本卓生、白形洋、山口幸久、坂本淳、吉井修、大仲秀治、金隼泳、（理事・監事）山田健、大竹口誠治、長谷川浩、岩井正隆、山本恵昭、野邊久美、金井良碩（現役）萩原真哲、城間一輝、大矢隆太郎、三谷昌輝、（Web参加）小林功、山本裕宣、

尾崎久純、松村健司、石丸祥史、井部良太（敬称略）  
 計 32 名：出席 22 名、Web6 名、準会員 4 名、委任状提出 29 名（開催案内 126 名）  
 出席 22+Web6+委任 29=計 57 名で総会成立。

1 会長あいさつ 山田会長

2 議事（議長：事務局長）：各議案とも満場一致で承認

(1) 2021 年度活動報告（第 1 号議案） 事務局長

- ① 「山と人 22 号」の発行（2022.4.23）
- ② 2021 年度定時総会開催(Web 開催)（2021.5.29）
- ③ 理事会（第 96,97,98,100 回）

(2) 2021 年度決算報告（第 2 号議案） 会計担当理事・監事

(3) 役員改選（第 3 号議案）理事会案：現役員の留任

会長：山田健、副会長：大竹口誠治、事務局長：長谷川浩、理事：山本恵昭、  
 岩井正隆、香山博司、野邊久美、藤川佳祐、監事：金井良碩、森長敬

(4) 2022 年度活動計画（第 4 号議案） 各担当理事

- ・平井先生を偲ぶ会（2021 年度から延期、4/23 開催）
- ・例会山行（計画書配布済み）
- ・氷ノ山ヒュッテ 60 周年関係イベント
- ・ACKUニュース (No46) の発行
- ・海外登山研究会（適宜開催）

(5) 2022 年度予算案（別紙）（第 5 号議案） 会計担当理事

3 連絡・報告事項

- (1) 新入会員、物故会員、退会会員 事務局
- (2) 現役紹介・現役活動報告 現役部員
- (3) 会員近況報告 出席者全員

4 閉会

以上

会員近況報告（2022 年定時総会出欠はがきメッセージより）

会員番号	氏名	近況報告
258	東郷賢治	KOBE での総会初めてのことですね。老会員でご迷惑をおかけしない様にと 思いながらの出席となります。ご盛会を祈念します。
260	田子秀夫	自宅近くの山（丘、約 200m）の散歩が生活の一部です（週 1～2 回）。
273	久保田幹夫	畑仕事を直ぐ近くの里山、みかん林を毎日歩いています。先月（令 4. 3）の 平均 11,777 歩/日。
274	田中俊甫	なんとか命をつないでいます。よろしくお願いします。
277	柏田紘一	神戸から横浜に住所を動かしました。月に 1 週間ほど神戸に帰ってきており総 会は出席します。
282	田中信行	1963 年に卒業、2023 年 3 月に 60 年を迎えます。卒後 50 周年集まりに続き、 60 周年も開催したいと思っています。
286	増田正勝	80 を越えて、身長 164cm で体重 81kg の肥満児です。衣類のサイズは LL か XL。この重たい体をなんとか足腰で支えて里山を登っています。
322	瀬野鋼太郎	毎日、2 時間歩いています。

324	和光広典	参加すべく調整していましたが、23日、24日は田植えを外せないため、残念ながら欠席させていただきます。
333	居谷千春	acku 活動再開の気運が確認できればいいと思います。多くの方にお会いできるのを楽しみにしています。
334	酒井利直	時々山に登っています。
337	森長 敬	未だに仕事に追われる毎日で、山岳会のことではお世話になるばかりで申し訳ありません。
338	廣石一英	元気しております。鎌倉の小山を歩いています。
341	中川勝八郎	仕事、私生活等で、コロナ対応に終始しているこの2年間です。
343	谷本 清	中央アルプス、北アルプスなどでのマイペース単独山行を楽しんでいます。2022年は槍を目指しています。
349	吉原敏明	月に3回と決めて主に関西近郊の山に登っています。危なきに近寄らず、人と競わず、少しだけ頑張るを旨としてチョイ無理オヤジをやっています。
351	山本裕宣	数年前から腎機能が低下しています。食事の事もありますから、とりあえずリモートで出席します。
356	片山博仁	毎日自由なリモート出勤で生活リズムがゆるくゆるくなりました。ちゃんと規則正しく生きてます。
363	川端 充	会へ参加できずすみません。東京単身赴任中につき、元気に山に登っています。
379	木南晴太	所用により欠席させていただきます。当日の盛会をお祈りしております。
389	小宮勇介	近くの山に登って身体のなまりを防ごうとしています。 畑の溝掘りなどをして鍛えています。 大阪や神戸の集会に行くために三田駅まで片道30分位歩いています。
411	松村健司	去年8月に息子が生まれました。
416	清野幸司	現在の住所は、長崎県佐世保市***です。これからも転勤が続くため、郵送物等は実家である、滋賀県高島市***へ送っていただけると助かります。
特別	桜井勝之	いつも連絡ありがとうございます。 会の発展を祈念しております。
特別	神吉賢一	なんとか元気に生きています。協力金は別途送付します。3/28加古川支店から振り込みました。

## 神戸大学山岳会第94回理事会 議事録

2021年2月27日(土) 15:00 ~ リモート会議 by Zoom

(記載:長谷川、文中敬称略)

- 参加者 : 山田、大竹口、山本恵、岩井、長谷川、野邊、金井良 (監事)
- 議事内容

①2021年度定期総会開催の件 (総会議事の協議は別紙)

- ・日程: 5月29日15時開始 @大阪凌霜クラブ (山田会長から連絡)  
コロナ鎮静を待ち、会則2ヶ月以内開催期限内で実施。
- ・収容: ホール収容30数名 (パイプ椅子併用)、セミナー式着席。  
参加者超過時は隣接会議室利用も可 (同階セミナー室は廃止)。  
在宅参加希望にも対応し、リモート接続準備 (長谷川、藤川)。
- ・対策: 感染対策として総会と追悼セレモニーのみ実施、懇親会は行わない。  
したがって会場代は会費徴収せず、一般会計から支出。
- ・特記: リモート対応 (出席・議決権行使) や委任状活用、緊急事態宣言等での延期可能性 (特別処置) 等を3月発送の「総会案内」に記載。

## ②2021年活動計画

- ・平井先生追悼行事：9～10月頃の開催を想定。  
会主催の追悼行事は名誉会員逝去時と山岳遭難者限定で実施（有志開催と区分）。
- ・千本杉ヒュッテ60周年記念：現地イベント&下界セレモニー  
とりあえず、2件の準備をすすめ、状況に応じて合同開催も選択肢とする。
- ・「山と人22号」編集（平井先生、宅見先生、追悼文、緒方会員遭難の件も含む）  
18号以降、遠征等の特別編集が続き、通常山行報告が掲載されていない状況。  
2008年17号以降の活動記録（特に現役山行記録）14年分の編集が必要な状況。  
本日理事会で編集委員会発足を決議し、総会での承認、2021年度中発行を目指す。  
編集長：大竹口、委員（案）：小林、若手（藤川？）、井上・居谷（平井先生関連）
- ・海外登山研究会：次回3月20日の拡大理事会後に開催を探る（山田・藤川）
- ・例会山行：山本より原案提示。7月後半～8月、東西が集まれる山行が欲しい。  
八方尾根、上高地、雷鳥沢、BC方式・3～4日。幹事：山本、大竹口で検討。

## ③ACKU-news45号編集状況（大竹口：別紙）

### ④次回拡大理事会&ACKU-news45号発送準備（詳細別紙）

- ・日時：3月20日14時神大農学部（河端先生依頼）発送作業、15時拡大理事会
- ・発送作業：総会案内、会費納入依頼、宛名レベル、封筒など

### ⑤会費納入状況（ヘリテージ基金寄付含む）の状況（岩井）

### ⑥「体育会OBOG会連合会」（2021.4発足）加盟の件

（正式名称：神戸大学体育会系公認課外活動団体OBOG会連合会）

- ・本理事会で加盟議決、定時総会で報告。連合会へは長谷川から参加表明のこと。

### ⑦その他

- ・All-Mailの有効性確認と活用のため3月20日総会案内に先立ち通信テストを実施し返信用葉書の省略（メール回答）等を探る。委任状の扱いには議題通知に注意。

以上

## 第94回理事会\_議事詳細

### 1. 2021年定例総会 打合せ

- 1) 進行 事務局長（長谷川）
- 2) 開会あいさつ（山田会長）：新執行部の活動方針含む
- 3) 議事（報告・承認事項）

#### ①2020年度事業報告および収支決算

- ・活動報告（長谷川）定例総会書面決議、秋の集い中止、海外登山研究会、理事会開催状況、例会山行、ACKU-news45号発行  
（活動報告、メモを配布、長谷川準備）
- ・会計報告（岩井） 収支報告、監査報告

#### ②2021年度事業計画および収支予算

- ・活動計画（長谷川）：平井先生追悼行事、千本杉ヒュッテ60周年イベント（秋）
- ・例会山行（山本恵）
- ・会計予算（岩井）
- ・「山と人」発行に向けて（編集委員会発足報告）

#### ③名誉会員の承認（会則第7条）

- ・居谷千春前会長を名誉会員に推薦（推薦理由：長谷川作成）

#### ④報告事項

- ・「神戸大学OBOG連合会」の紹介と加入報告
- ・新入会員紹介（出席している各人から挨拶）  
小池名誉会員（山岳部副部長）、大仲会員、吉井会員、清野会員、國藤会員  
（2021.3卒業生の確認：長谷川）
- ・その他：逝去会員告知  
平井名誉会員、古橋会員（239）、河西会員（270）、中家会員（259）  
鷲尾会員（2020年総会での漏れ確認）

注：入会者と除籍者は「会則」により総会での報告事項。

それ以外（物故会員、退会会員）については取り決めなし。

## 2. 故宅見先生（前副山岳部長・名誉会員）追悼セレモニー（総会終了後、継続して開催）

### 1) 先生の遺影準備

### 2) 式次第（案）

- ・黙とう
- ・追悼の言葉：河端名誉会員（山岳部長）
- ・若手メンバーからの追悼・思い出の言葉（藤川）

## 3. 拡大理事会&ACKU-news45号発送準備（3月20日土曜日）

- ・河端先生へ会議室予約依頼（長谷川）14時集合・発送、15時拡大理事会
- ・発送作業準備（①～④各130部）＊部数要確認
  - ①総会案内（主な議事含む）：長谷川原案作成
  - ②事務局からのお知らせとお願い：長谷川原案作成
    - ・会費納入案内（15年前前納の永久会員以外の正会員、二年分期待通知）
    - ・協力金案内（対象：上記以外正会員、名誉会員、特別会員）
    - ・ヘリテージ 振込時は連絡をいただく事、会費・協力金との区別など念押し。
    - ・メール登録の依頼、例会山行の登録
  - ③返信ハガキ（長谷川）：事前に All-Mail 登録者には要不要を確認。
  - ④例会山行計画書（山本）
  - ⑤宛名ラベル（会員向け&外部向け：長谷川）
  - ⑥封筒（長谷川）料金別納ハンコ
  - ⑦その他：のり、搬送用ダンボール箱
  - ⑧外部向け Acku-news45号 発行案内文（長谷川）、発送ラベル
  - ⑨発送：完成封筒は長谷川が車で保管。ダンボール持参、月曜日に西宮から発送

以上

## 神戸大学山岳会第95回理事会 議事録

2021年3月20日(土)15:00～(14:00～発送作業後)（文中敬称略）

1. 参加予定：山田、大竹口、山本恵、長谷川、野邊、藤川  
河端部長、小池副部長、金、侯、萩原、上田 / 欠席：城間

### 2. 議事（案）

- ①2021年度定期総会開催の件（総会議事案、別紙）
  - ・日程：5月29日15時開始 @大阪凌霜クラブ
  - ・収容：ホール収容30数名（パイプ椅子併用）、セミナー式着席。  
参加者超過時は隣接会議室も利用、リモート接続準備（長谷川、藤川）。
  - ・4月末出席確認。5月7日（金）確定。
  - ・特記：リモート対応（出席・議決権行使の可否）、コロナ対応での延期可能性
  - ・宅見先生追悼セレモニー：写真が1枚（ACKU-news）。
- ②理事会（5月29日14:00～）総会前に参集、打合せ
- ③平井先生追悼行事：9～10月頃開催
  - ・準備体制、日程、会場、式次第、
- ④千本杉ヒュッテ60周年イベント：9～10月
  - ・山田、藤川：準備体制、日程、現地式典、下界セレモニー、
  - ・6月の例会山行。6/12-13に変更。
- ⑤「山と人22号」編集 発行時期 仮）2022年3月、予算70万～
  - 編集委員会：大竹口委員長
  - 委員：小林、野邊、近藤、藤川、金、（井上・居谷：平井先生関連）
  - 掲載内容：平井先生、宅見先生、追悼文、緒方会員遭難の件含む  
名誉会員・山の遭難会員  
平井先生：案：座談会、年代分けて

現役山行報告（過去未掲載分一括編集必要、17号参照  
アンデス・パタゴニア（豊田さん）

（委員会素案、総会までに、理事会メンバー）

編集作業と費用面から「ACKU-news」は2021年度スキップ。

⑥海外登山研究会(山田・藤川)

5月29日総会のタイミング。12:00-14:00 外部講師。

日本山岳会 京都府大ネパール〈6千未踏峰〉。

⑦例会山行：企画案：夏の定着山行（雷鳥沢ベース）

⑧会計／会費関係 → 次回5月29日（2021予算作成のこと）

⑨「体育会 OBOG 会連合会」（2021.4 発足）加盟の件

（正式名称：神戸大学体育会系公認課外活動団体 OBOG 会連合会）

⑩Mail 登録活用（有効登録105名、不達11名、総会出欠了解の返信62名）

⑪現役活動：新入生勧誘、オンライン授業、入学式時に会場で勧誘活動できない

以上

## 神戸大学山岳会第96回理事会 議事録

2021年5月7日(金)20:00～21:00（文中敬称略）

1. 参加：山田、大竹口、岩井、山本恵、長谷川、野邊、藤川、金井監事

2. 議事：

5月29日開催予定（会員案内済み）の2021年度定時総会について、コロナ感染拡大にともなう5月末までの大阪府・兵庫県の緊急事態宣言継続を受け、緊急リモート理事会を開催し、以下を決定した。

①会則規定を優先し、新年度2ヶ月以内の5月29日定時総会を予定通り開催する。

②外出・集会リスク等回避のため、総会はWeb会議/Zoomでのリモート開催とする。  
（大阪凌霜クラブの予約はキャンセル。参加者全員がリモート接続で出席。）

③リモート総会の開催・出席・議決を有効とするため、会議冒頭で会則変更を議決。

④開催に向けた課題・懸案を、至急、事務局で検討し理事会メンバーで対応する。

3. 備考（理事会開催5月7日以降の状況）

上記を受け、5月12日、開催方法変更（Web会議/Zoomでのリモート開催）の通知をメール、ホームページ掲載、電話連絡等で実施。その後、一部会員からの本件問合せに回答する形で、5月18日に「総会の開催方法変更に関する理事会説明（Q&A）」（以下掲載）を発信、変更の経緯などを各会員への連絡を行った。

以上

\*\*\*\*\*

「2021年総会（5月29日）の開催変更のお知らせ」に関する理事会説明（Q&A）  
＜2021年5月18日メール配信＞

神戸大学山岳会 会員各位

5月12日にメールアドレス登録の会員に配信いたしました「リモート総会（5月29日）への変更」について、何人かの会員からご意見、ご質問等を受けていますので、以下に、Q&A形式で理事会での考えを述べさせていただきます。

（改行等で読みにくい場合は、添付のPDFファイルをご確認ください。）

Q1 なぜリモート総会にしたのか？

- A1
- ・大阪、兵庫他での緊急事態宣言が延長され、対面で5月29日に開催することは困難と判断。
  - ・会則で2か月以内に総会を招集する必要があるが、今年度事業計画を実施する上でも延期はできない。
  - ・現状では、以下のようにリモート開催のメリットが大きい。
    - \* コロナ禍の移動制限がされているなか、遠隔地からの参加、外出・対面を避けたい会員でも参加できる。
    - \* リモート化を支持する若手会員も多く、彼らの積極的な参加が望める。
    - \* 最近のZoom等による会議ではストレスなくリモート会議が進行でき、スマホ、パソコンからも容易に参加可能。
- Q2 会則で、書面決議による総会の開催ができるようになってきているのに、なぜしないのか？
- A2
- ・書面決議では必要最小限の議案の表決しかできず、どうしても事務的な総会にならざるを得ないが、山岳会のような親睦を主な趣旨とする会では、2年続けての事務的な書面決議はできるだけ避けたい。
  - ・会員からの意見陳述や提案なども書面によるため、他の会員も入った議論や修正案等の協議ができない。書面決議より、意見交換が可能なリモート開催の方が、このようなデメリットが緩和される。
  - ・書面決議では現役（準会員）は全く関与することができないが、リモート開催では全員が会議に参加できる。
  - ・次年度以降は対面総会を基本とし、加えてリモート参加も可能とする総会開催が良いと考える。
- Q3 パソコンやスマホに不慣れなためリモート総会に参加できない会員への対応は？
- A3
- ・パソコンやスマホでのリモート会議経験のない会員には、技術的、心理的なハードルがあると思うが、使ってみれば簡単なので技術面は事務局でもサポートする。
  - ・パソコンもスマホも全く使われない会員、今回のメールでのリモート総会案内やホームページ通知を見ていない会員には、ご参加の機会を奪うことになるが、書面案内での4月末納期内に回答ハガキで出欠連絡をいただいた会員には、電話等で連絡もおこなうなどの対応も並行している。
  - ・会員同士で協力し、リモート接続可能な会員と一緒に出席いただく等の対応も可能。
  - ・今回は急な案内となったので、接続の理由で出席ができない場合、ご要望があれば事前に議事案をメールで送付し、ご意見を事前にいただき、総会内で共有するなどの運用も個別に検討したい。
- Q4 リモート総会の場で、リモートを可とする会則変更をしようとしているがそれは有効か？
- A4
- ・リモート開催が事後承認のようになってしまうが、まさに緊急事態なのでご理解いただきたい。昨年の書面決議の会則変更の場合も同じ方法を取った。もし今回の総会でリモート参加を可とする会則変更が否決されれば、総会は成立しない。
  - ・コロナ禍で世の中全体が急速にリモート化が進んでおり、若手会員が活躍できる山岳会を目指すにはリモート参加も可能にしておくべきと考えるので、今回の総会で、そうした手段利用の承認を得たい。

## 神戸大学山岳会第97回理事会 議事録

2021年9月5日(日)17:00～（文中敬称略）

1. 参加者：理事\_山田、岩井、大竹口、山本恵、長谷川、野邊久、藤川  
監事\_金井良
2. 議事：コロナ禍における山岳会の活動について
3. 結論：本年度の山岳会行事はコロナ感染の鎮静化を待つこととし、年内活動は停止・延期とする。  
12月行事は1ヶ月前に別途判断。

- ① 平井先生追悼行事  
総会説明の9～10月頃開催を延期し、1月中旬～2月上旬（1周忌の2/15迄）の開催とする。理事会決議としてAll-Mailでメール会員に通知、ホームページ掲載とする。長谷川にて通知案を作成し、10日以内をめどに発信。
- ② 千本杉ヒュッテ60周年イベント  
①と同様、9～10月行事は中止する。コロナ禍明けの活動再開として、2月末～3月初開催予定の例会山行を、記念行事として盛り上げる事としたい。  
(現地記念イベント、ベースキャンプ方式、現役/OB交流など)  
ヒュッテの中規模メンテナンス(外壁塗装や水道改修)が必要なため、来年度の取り組みを想定した準備を始める。
- ③ 「山と人22号」の発行について  
①の平井先生追悼行事を掲載するため、4月後半の発行とする。3月を原稿納期とし、4月上旬印刷、4月下旬の総会での配布と、以後の郵送とする。
- ④ その他、連絡事項、情報共有
  - ・山と人掲載予定の「平井先生を偲ぶ座談会(若手)」は、12月頃懇親会(忘年会)を兼ねて開催を検討中(野邊)。例会の忘年会とは別行事として。
  - ・現役活動は、兵庫県の緊急事態宣言と学内感染対策のため休止が続いている。  
リーダーが侯君から萩原君に交代。(理事会後、主務の城間君に確認した部員現状は、2回生:萩原、城間、上田、柳本(1年目)、1回生:三谷、大矢の6名が活動中。他にM1:江田、4回生:金、3回生:侯。
  - ・本年度入会手続きは、今井、熊田完了、稲川未完。
  - ・次回の理事会は、コロナ終息を見ながら2ヶ月後の11月を予定。

以上

## 神戸大学山岳会第98回理事会 議事録

2021年11月7日(日)17:00～(文中敬称略)

1. 参加者:理事\_山田、岩井、大竹口、山本恵、長谷川、野邊久、監事\_金井良

2. 議事:年内および2022年1-5月の山岳会活動について

- ① 12月例会(忘年会)の開催について
  - ・コロナ感染防止のため、大人数での飲食開催は困難、中止とする。
  - ・リモートでの現役・会員活動報告会、海外登山研究会開催等の代替案特になし。
- ② 平井先生追悼行事の準備(前回、1月中旬～2月上旬開催で決定事項)
  - ・候補:1/29土、1/30日、2/5土、2/6日、2/11祝、2/12土、2/13日
  - ・会場:候補\_神大・大阪クラブ(旧大阪凌霜)山田さん確認済、MAX40人。  
40名超の時、リモート併用で調整か、他の会場手配検討など。  
(緒方さんのときは、三宮\_ホテル北野プラザ六甲荘利用)
  - ・式次第:開会の辞、献花、弔辞、参加者追悼の辞、故人足跡(写真・動画)  
(案) 2時間程度(15-17(18)時又は弁当式会食で17-19時など検討)  
注)遺影(山田さん\_石川さん提供分有、葬式時の遺影も。)
    - ・担当者:長谷川、岩井、野邊(及び各理事)(写真・動画:居谷さん?)
    - ・列席者:ご遺族\_由仁子様(大竹口1)、山岳部\_河端先生(長谷川2)、  
甲南大\_平井会長、AACK\_岩坪氏、JAC\_平林氏(山田3-5)

ACKU以外\_クレーカーンリ関連(藤本、合田、依田他)、  
山岳会 20-30人?

- ・規模：40-60名規模（@5千円×50＝25万円規模、参加費で充足が基本）  
（着席、会食：仕出し弁当・アルコール、スクリーン投影）
- ・Todo：1週間以内に主賓級スケジュール確認。（山田、長谷川、大竹口）
- ③ 山と人 22号編集状況（大竹口編集長：別紙）
  - ・山と人 22号への特集的な掲載は見合わせる方向で。編集員と協議する。
  - ・発行時期：仮）4月23日総会で配布、配布先のリスト、そろそろ準備のこと。
- ④ 千本杉ヒュッテ60周年イベント  
2/26-27で確定。ベースキャンプ方式での前後日程も検討。担当：藤川理事
- ⑤ 2021年行事日程：総会（土曜日）GW前の4月23日を第一候補とする。  
通知は1ヶ月前、3月初旬。会費納入の案内含む。  
「山と人22号」は総会日配布とする。（当日、発送作業？）
- ⑥ その他、連絡事項、情報共有
  - ・山と人掲載予定の「平井先生を偲ぶ座談会（若手）」の件（野邊）  
8名程度、Zoom座談会を予定。日程は12/4-5,12/11-12あたり。  
（川端、柴田、杉本、大瀧、野邊夫妻、香山夫妻、、、他）  
進行\_\_野邊久\_\_事前に話題整理など必要か。  
座談会の様子絵を「山と人」へ投稿、原稿3～4ページ程度。
  - ・次回、理事会（平井先生追悼行事打合せ、12月中に開催。日程別途。

以上

## 神戸大学山岳会第99回理事会 議事録

2022年1月15日(土)20:00～（文中敬称略）

1. 参加者：理事\_山田、岩井、大竹口、長谷川、野邊久、監事\_金井良
2. 議事：平井先生を偲ぶ会の開催（1/26）について
3. 結論：コロナ感染防止のため、開催を延期とする。  
翌1/16には通知文をAll-Mailで配信し、出席予定者にはメール追加配信して、確認のメールをもらうように対応（万一の通知もれを防ぐため）

仕切り直しての開催時期は未定。

外部関係者にも参加いただくため（一部の会員から提案のあった）4月の総会での実施は難しいが、同日に同場所での開催可能性は残る。また、別日程検討も含め、別途協議する事とした。

総会は、以前決定済の4月23日とし、2月以降、準備に入ることとした。

4. その他  
山と人の発行準備状況確認、若手座談会による「平井先生を偲ぶ会」の開催結果など共有した。

以上

# 神戸大学山岳会第 100 回理事会 議事録

2022 年 3 月 5 日（土） 18:00～（文中敬称略）

1. 参加者：理事\_山田、岩井、大竹口、山本恵、長谷川、野邊久

2. 議 題：2022 年度総会の開催準備について

## ① 総会会場、開催方式、議事内容

- ・ 総会開催：4 月 23 日(土)
- ・ 平井先生を偲ぶ会との同日開催とする（遠方からの来訪者への利便性確保）
- ・ スケジュール、内容
  - 12：00-14：00 「平井先生を偲ぶ会」来賓・外部参加者含む（弁当付き）
  - 15：00-17：00 「定例総会」（コロナ次第だがビール+軽食・おつまみ）
- ・ ラッセホール（神戸・元町） 予約 長谷川（3/6 予約済、B1 パンジー）
- ・ ゲスト（由仁子さん、平林氏、岩坪氏、平井氏）の日程確認（山田）
- ・ 偲ぶ会、総会とも対面メインでリモート参加も可のハイブリッド開催（Zoom 利用）  
（総会での決議時、リモートでの賛成確認の対応も要調整。又は反対者発言）
- ・ 議事／決議事項（案）
  - 1 挨拶（山田）
  - 2 活動報告（長谷川）
  - 3 会計報告（岩井） < 2～3、承認 >
  - 4 役員改選（任期 2 年満了、再選動議） < 4 承認 >  
注：若手理事 1 名の追加検討（藤川さんには依頼済み、要確認）
  - 5 行事計画（長谷川）  
氷ノ山還暦イベント、ACKU-News、海外登山研究会など  
例会山行（山本）：総会案内で配布済み紹介
  - 6 予算案（岩井） < 5 承認 >  
< 議決後、挨拶、紹介 >
  - 7 新入会員、物故会員の紹介（2020～2022 年、3 年度分）
  - 8 小池先生 副部長就任あいさつ
  - 9 現役 部員紹介、活動報告

## ② 開催通知、案内発送

- ・ 予告：日程、場所確定後、All-Mail で先行発信（3/12 頃予定）
- ・ 発送：3/26-27 偲ぶ会&総会開催案内発送、理事（岩井・長谷川）+ 現役応援  
作業場所 小池先生研究室、部室、県岳連（研修所）等（長谷川調整）  
準備 1.開催案内（偲ぶ会・総会）、2.事務局連絡（会費納入他）、  
3.例会山行計画、4.滞納会費情報、5 返信ハガキ、6.封筒、  
7.宛名ラベル（会員向け、前回 133 名程度）
- ・ 「偲ぶ会」外部参加者は別途調整（基本は Mail ベース）
- ・ All-Mail 3/26-27 開催案内を配信（偲ぶ会・総会）  
（URL リンク先からの出欠回答依頼）

## ③ 総会前準備

- ・ 4/16 土 20:00 理事会開催
  - ・ 総会の事前打合せ
  - ・ 総会出席者の確認（回答締め切り日）
  - ・ 総会議事資料確認
  - ・ 会計報告確認（3 月末決算、予算案確定、監査終了）

## ④ 「山と人」発送作業について

- ・ 納品は指定場所に 4 月 22 日着予定

- ・作業：総会前の作業を現役に依頼（@大学、会場、近隣貸会議室など）  
作業後、総会に合流（総会参加者に会場で配布）  
大学で実施のときは小池先生連絡・依頼必要（本の受け取り、作業場所）
- ・発送：レターパックライト予定、作業後、分担してポスト投函）
- ・準備：郵送部数 Max230 部 - 総会配布数、必要数レターパック購入、  
宛先ラベル、案内文（会員向け、外部向け）

⑤ その他

- ・コロナ判断：別途、必要に応じて臨時理事会を開催（リミット2週間前 4/9-10）  
例：総会は会食なしで決行、偲ぶ会は延期もやむなしか。

以上

## 神戸大学山岳会第 101 回理事会 議事録

2022 年 8 月 21 日（日） 18:00～（文中敬称略）

参加者：山田会長、大竹口副会長、岩井、山本、長谷川、野邊、金井良

議 題：2022 年度後半の活動について

1 ACKU-newsNo46 発行準備 発行時期：2023 年 2 月

- ・別紙、大竹口編集長から準備状況を悦明。
- ・日程 原稿依頼 2022 年 10 月 26 日、原稿締切 2023 年 1 月 15 日、  
校正 2023 年 1 月末、印刷日 2023 年 2 月末、発送 2023 年 3 月初め
- ・山と人発行に伴い、ACKU-news は 2021 年度、2022 年度分の活動内容報告となる。

2 氷ノ山ヒュッテ関連

- ・8 月中に小屋の補修工事完了の予定。
- ・「氷ノ山ヒュッテ竣工 60 周年」として 11 月 25-26 日に現地で祝賀会を開催する。  
All-Mail にて開催案内を発信予定（9 月 7 日発信済み）。

3 神戸大学体育会系課外活動団体 OBOG 会連合会関連

- ・紹介：「事例発表会（OBOG 会活性化）」（9/3 開催）、大竹口、長谷川で聴講を予定する。  
（内容は、6 月 25 日の連合会総会（山田会長参加済み）での発表と重複のみこみ）

4 河端山岳部長のご退官（来春）について

- ・ご退官に際し、山岳部・山岳会として祝賀・謝意の会を開催したい。先生のご都合を伺いながら開催（1～3 月）のタイミング確認が必要。先生に直接お世話になった若手会員で準備をお願いしたいところなので、長谷川から藤川理事に依頼することとする。

5 その他

- ・ACKU のホームページの FIRST ASCENT 掲載文書入れ替えの件（大竹口）
- ・会計状況、海外登山研究会、現役活動など、特に議事なし
- ・例会（12 月忘年会、1 月梅池雪見会、2 月合歓の木・氷ノ山、3 月高鷲井上山荘）  
梅池雪見会：参加者が少なくなっており、次回開催が不確定な状況（山本）

以上

## 2020年度会計決算報告

事務局長 長谷川浩  
理事(会計) 岩井正隆  
(2020.4.1~2021.3.31)

### 1. 一般会計

#### <収入の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
前年度繰越金	543,126	543,126	0
会費収入	450,000	✓ 319,365	-130,635
協力金収入	0	✓ 35,000	35,000
雑収入(預金利息)	100	✓ 35,005	34,905
計	993,226	932,496	-60,730

雑収入:利息5円 平井先生告別式供花補助金35,000円

#### <支出の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減(決算額-予算額)
事務・通信・振込手数料	70,000	66,853	-3,147
山岳部活動援助金	50,000	50,000✓	0
ACKUニュース	200,000	76,780✓	-123,220
「山と人」積立金	100,000	100,000✓	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000✓	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	3,256	-1,744
雑費	50,000	74,621	24,621
次年度繰越金	464,766	430,986	-33,780
計	1,069,766	932,496	-137,270

### 2. 特別事業基金

(単位:円)

費目	20年3月現在残高	21年3月現在残高	増減
「山と人」積立金	610,500	710,505	100,005
海外登山準備積立金	0	100,000	100,000
千本杉ヒュッテ維持管理金	31,878	38,625	6,747
総計	642,378	849,130	106,752

「山と人」積立金100,000円、海外登山準備積立金100,000円、利息 5円

千本杉ヒュッテ維持管理金 ヒュッテ使用協力金 8,000円 管理業務謝金 35,000円  
備品・補修資材費 16,681円  
食料等補助金 17,422円、通信費 2,150円

### 3. 遭難対策基金

(単位:円)

費目	20年3月時点残高	21年3月現在残高	増減
遭難対策基金	2,517,092	2,517,115	23
利息23円			

### 4. ヘリテージ基金

(単位:円)

費目	20年3月現在残高	20年3月現在残高	増減
ヘリテージ基金	2,549,782	2,650,024	100,242

基金 100,000円、振込手数料返納 220円、利息 22円

※一般会計:「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」東加古川支店 口座番号 4332\*\*\*

※「山と人」積立金、海外登山準備積立金:「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3407\*\*\*

※千本杉ヒュッテ維持管理金:「三菱東京UFJ銀行」普通預金にて管理

「三菱東京UFJ銀行」東神戸支店岡本出張所 口座番号 4672\*\*\*

※遭難対策基金:「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3815\*\*\*

※ヘリテージ基金:「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」神戸営業部(店番号500)口座番号 1699\*\*\*

以上、監査の結果 適正且つ妥当であることを認めます。

2021年 月 日

監事 金井 良碩

監事 森長 敬



神戸大学山岳会

2021年度予算

(2021.4.16~2022.3.31)

1 一般会計

<収入の部>

(単位:円)

費目	20年度予算額	21年度予算案	増減
前年度繰越金	543,126	430,986	-112,140
会費収入	450,000	450,000	0
雑収入	100	100	0
計	993,226	881,086	-112,140

<支出の部>

(単位:円)

費目	20年度予算額	21年度予算案	増減
事務・通信・振込手数料	70,000	70,000	0
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	200,000	0	-200,000
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	5,000	0
雑費	50,000	50,000	0
予備費(次年度繰越金)	388,226	476,086	87,860
計	993,226	881,086	-112,140

<「山と人」積立金 >

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	710,505		710,505
当該年度積立金	100,000	810,505	0

<「海外登山準備金」積立金 >

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	100,000		100,000
当該年度積立金	100,000		200,000

<千本杉ヒュッテ維持管理金 >

(単位:円)

	収入	支出	計
前年度繰越金	38,625		
ヒュッテ使用料	35,000		
管理業務謝金	35,000		108,625
食料費等補助金		10,000	
備品購入費		60,000	
予備費		38,625	108,625

# 神戸大学山岳会 2021年度会計決算報告

(2021.4.1~2022.3.31)

事務局長 長谷川浩  
理事(会計) 岩井正隆

## 1. 一般会計

### <収入の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減
前年度繰越金	430,986	430,986	0
会費収入	450,000	292,032	-157,968
協力金収入	0	20,000	20,000
雑収入(預金利息)	100	4	-96
計	881,086	743,022	-138,064

雑収入:受取利息 4円

### <支出の部>

(単位:円)

費目	予算額	決算額	増減
事務・通信・振込手数料	70,000	27,713	-42,287
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	0	0	0
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	7,920	2,920
雑費	50,000	1,560	-48,440
次年度繰越金	326,302	425,829	99,527
計	731,302	743,022	11,720

## 2. 特別事業基金

(単位:円)

費目	21年3月現在残高	22年3月現在残高	増減
「山と人」積立金	710,505	244,684	-465,821
海外登山準備積立金	100,000	200,000	100,000
千本杉ヒュッテ維持管理金	38,625	90,625	52,000
総計	849,130	535,309	-313,821

「山と人」積立金100,000円、海外登山準備積立金100,000円、利息 7円

「山と人」印刷代・振込手数料465,821円

千本杉ヒュッテ維持管理金 ヒュッテ使用協力金 17,000円 管理業務謝金 35,000円

## 3. 遭難対策基金

(単位:円)

費目	21年3月時点残高	22年3月現在残高	増減
遭難対策基金	2,517,115	2,517,137	22

受取利息 22円

## 4. ヘリテージ基金

(単位:円)

費目	21年3月現在残高	22年3月現在残高	増減
ヘリテージ基金	2,650,024	2,650,047	23

受取利息 23円

以上

※一般会計:「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」東加古川支店 口座番号 4332\*\*\*

※「山と人」積立金、海外登山準備積立金:「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3407\*\*\*

※千本杉ヒュッテ維持管理金:「三菱東京UFJ銀行」普通預金にて管理

「三菱東京UFJ銀行」東神戸支店岡本出張所 口座番号 4672\*\*\*

※遭難対策基金:「みなと銀行」普通預金にて管理

「みなと銀行」春日野支店 口座番号 3815\*\*\*

※ヘリテージ基金:「三井住友銀行」普通預金にて管理

「三井住友銀行」神戸営業部 口座番号 1699\*\*\*

### 【監査報告】

以上、監査の結果 適正且つ妥当であることを認めます。

2022年4月8日

監事 金井良顕

監事 森長 敬



# 神戸大学山岳会 2022年度 予算

(2022.4.1～2023.3.31)

## 1. 一般会計

### <収入の部>

(単位:円)

費目	21年度予算額	22年度予算案	増減
前年度繰越金	430,986	425,829	-5,157
会費収入	450,000	450,000	0
雑収入	100	100	0
計	881,086	875,929	-5,157

### <支出の部>

(単位:円)

費目	21年度予算額	22年度予算案	増減
事務・通信・振込手数料(*1)	70,000	70,000	0
山岳部活動援助金	50,000	50,000	0
ACKUニュース	0	200,000	200,000
「山と人」積立金	100,000	100,000	0
ヒュッテ補修費	0	0	0
海外登山準備積立金	100,000	100,000	0
兵庫県岳連年会費	15,000	15,000	0
日本山岳会年会費	15,000	15,000	0
ホームページ管理費	5,000	5,000	0
雑費	50,000	50,000	0
予備費(次年度繰越金)	476,086	270,929	-205,157
計	881,086	875,929	-5,157

## 2. 特別事業基金

### <「山と人」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	244,684		244,684
当該年度積立金(*1)	100,000	85,100	259,584

\*1: 山と人発送費 @370 × 230 = 85,100円

### <「海外登山準備金」積立金>

(単位:円)

	収入	支出	残高
前年度繰越金	200,000		200,000
当該年度積立金	100,000		300,000

### <千本杉ヒュッテ維持管理金>

(単位:円)

	収入	支出	計
前年度繰越金	90,625		
ヒュッテ使用料	35,000		
管理業務謝金	35,000		160,625
食料費等補助金		10,000	
備品購入費		60,000	
予備費		90,625	160,625

以上

## < 編集後記 >

ACKU news46号は、昨年度に「山と人 22号」の発刊があったため、2年振りの発行となりました。2020年4月から、会長・副会長・事務局長等の交代など新体制になり、もうすぐ3年になります。会誌担当も、7年目になりましたが、編集内容等につき、忌憚のないご意見を頂きたい。

2021年度及び2022年度の山岳会のイベントとしては、2021年2月15日にご逝去された平井一正先生を偲ぶ会を2022年4月23日に神戸ラッセホールに於いて開催し、その後、3年振りに対面での山岳会総会を行いました。また、2022年11月5日～6日には氷ノ山ヒュッテ60周年記念行事を氷ノ山ヒュッテにて行いました。新型コロナウイルス感染の影響で、山岳会の例会山行はほとんどが中止になったため、例会山行報告は少なくなっておりますが、コロナの合間やコロナ明けに個人山行をされた方々から沢山の紀行文を投稿して頂きました。この場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。

ACKU ニュースは、経費削減のため、すべてモノクロ印刷となっておりますが、ACKUのホームページにアクセスして頂ければカラーの写真もご覧になれるようにしております。

今後も、例会山行記録の掲載だけでなく、新執行部の活動方針である①海外登山への機運を醸成②他団体との交流を促進③山岳部活動への支援拡大④ヒュッテの活用促進⑤財政基盤の強化に沿った記事を掲載して行きたいと思っております。

また、若手・中堅・熟年各OBからの積極的な寄稿をお願い致します。特に、今後は、若手OBの投稿に期待したいと思います。

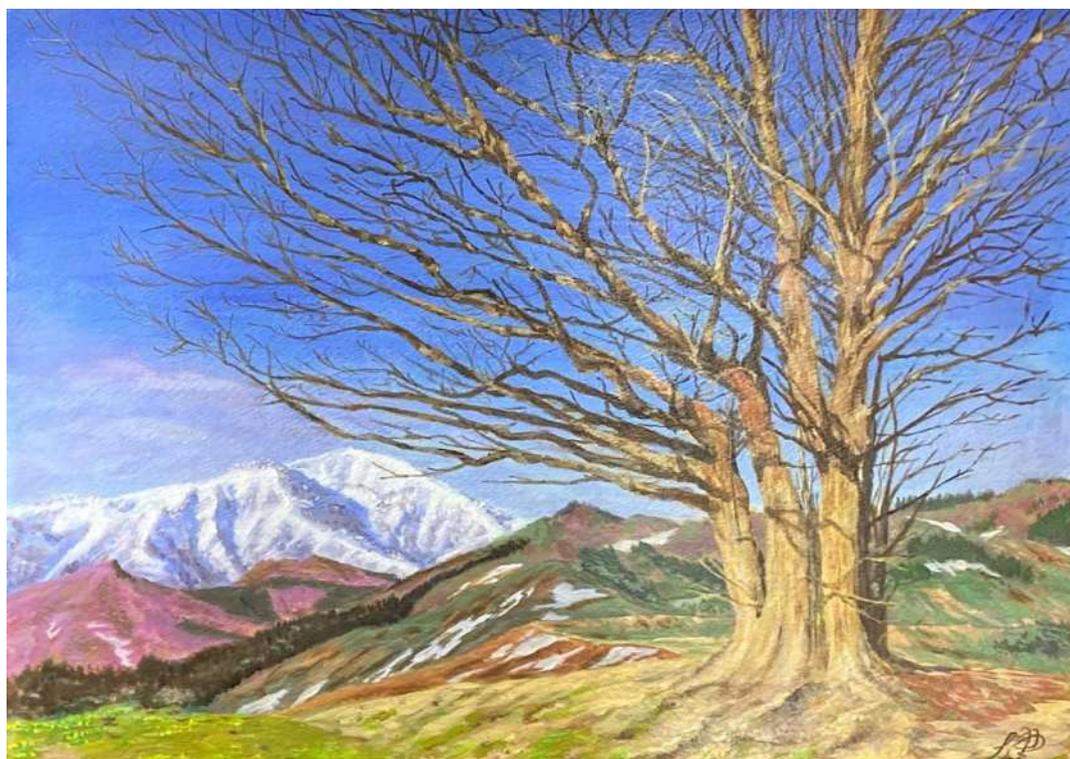
個人的には、新型コロナの影響で本格的な山登りは出来ておらず、2021年は苗場山、2022年は恵那山の登山のみに留まりました。今年は、8月に南アルプス、9月に5回目のチャレンジとなる幌尻岳(2021年は新型コロナ、2022年は大雨による林道崩壊により中止)に行く予定です。

退職後、体力維持のためマスクをつけてジョギングをしておりますが、山で痛めた膝の調子が良くなり、無理をしない程度で、継続しております。チベット語を習い始めて5年以上が経ちましたが、実際に現地に行って使う機会がないため、なかなか、話せるレベルには到達していませんが、週1回の授業は継続しております。最近、チベット文学の本を集中して読むようにしております。

新型コロナは、ほぼ、終息の目途が立ってきておりますので、今年度は、過去の3年間、活動出来なかった分を取り戻すべく、積極的に山登りを再開したいと考えております。

2023/2/25 大竹口誠治 記

「但馬の春」 アクリル画 P6号 2022年製作（山田会長）



3月下旬になると但馬地方では急激に雪融けが進み、それまでの陰鬱な天気が嘘のように晴れ渡り暖かな陽光が降り注ぐ。雪国に住む人たちが待ちに待った春の訪れである。それでも氷ノ山にはまだまだたっぷり雪が残っている。

ACKU-news 46 発行日 : 2023年3月18日

発行 : 神戸大学山岳会・山岳部

発行人 : 大竹口誠治

編集長 : 大竹口誠治 編集委員 : 小林功、近藤昂一郎

原稿送付先 大竹口誠治 〒338-0011 埼玉県さいたま市中央区新中里 1-9-14

E-MAIL: 6824vgdn@jcom.zaq.ne.jp

小林 功 〒197-0823 東京都あきる野市野辺 508-11

E-MAIL: charin8458@gmail.com

近藤昂一郎 351-0104 埼玉県和光市南 1-22-8-2

E-MAIL: k.kondo331@gmail.com

本誌 ACKU-news は神戸大学山岳会山岳部の内部的機関紙として発行しています